

はじめに

本報告書は、2019年8月5日（月）東京・自由が丘、8月18日（日）名古屋および8月25日（日）福岡で開催したアクティブフォーラムでの講演などをまとめたものです。

2007年から始めた本フォーラムは、2017年より大学教育再生加速プログラム（AP）高大接続事業の一環として実施し、AP事業としては最終年度を迎えることになりました。

地方開催としては、3年ぶりに名古屋で、また九州エリアでは沖縄、熊本に続き福岡で実施しました。今年度、名古屋、福岡で実施した理由は、2012年から続いた名古屋フォーラム開催にご尽力下さいました鈴木達哉先生（三重県立四日市商業高校 校長）、また第1回（2007年）、第10回（2016年）にご講演いただき、フォーラムの方向性を築いて頂いた和田美千代先生（福岡県立城南高校 校長）とのご縁に感謝し、本フォーラムの節目としたいという思いでもありました。

3会場ともに講演、ワークショップは大変熱を帯びたものとなり、各会場、振り返りのセッションでは、課題共有、課題形成での話し合いで大いに盛り上がりました。自由が丘、名古屋会場では、昨年度に続き、株式会社LoiLoの全面的な支援を頂戴し、ロイロノート・スクールを活用することで、参加者の意見が可視化しやすいものとなりました。今後もICTを活用したフォーラムにチャレンジしたいと考えております。

自由が丘、名古屋、福岡とご協力、ご支援下さいました登壇者の先生方、本当にお忙しいところありがとうございました。そして何よりもご参加くださいました高校関係者あるいは教育、行政の関係者の方々には感謝の念を禁じえません。心より御礼申し上げます。

次年度は、東京オリンピックが夏に開催されることから、例年とは異なる開催時期になるかとは思いますが、皆様とお会いできることを楽しみにしております。

最後に本報告書が教育改革の一助になることを祈念しております。今後も教育現場に寄り添えるフォーラムとなるよう努力して参ります。

産業能率大学 入試企画部長
林 巧 樹

第13回キャリア教育推進フォーラム

カリキュラム・マネジメントの視点から探究を考える

ねらい

カリキュラム・マネジメントの視点から探究を考察し、各教科との連携など、そもそも探究とは何を考え、生徒に何を期待するのかを参加者皆様と考えたいと思います。
探究での課題を可視化し、これから探究を進める上でのポイントや障壁を乗り越える方法論などを先進事例をもとに検討していきます。
また、フォーラムそのものを主体的、対話的に学ぶ場とし、参加者がアクティブラーナーとして成長することも意図としています。

日時：2019年8月5日（月） 10:30～18:15

本学HPより
お申込みください。



■会場：産業能率大学 自由が丘キャンパス ■参加費：3,000円（資料費等として）

- ・主催：産業能率大学
- ・後援：東京都教育委員会 神奈川県教育委員会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会

■プログラム

【スタートセッション】10時30分～10時40分

【セッション1】10時40分～11時50分

カリキュラム・マネジメントの視点から探究を考える～PART1～

「既存の概念を超える教育改革に挑む」講演 札幌新陽高等学校校長の右腕 中原 健聡先生

【セッション2】11時50分～12時10分

「学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改革を進めていくか～産業能率大学の事例から～」

産業能率大学経営学部 杉田 一真

【ランチタイム】12時10分～12時50分

【セッション3】12時50分～14時00分

カリキュラム・マネジメントの視点から探究を考える～PART2～

「未来を予感させる新たな学びの姿」講演角川ドワンゴ学園N高等学校 副校長 上木原 孝伸先生

【セッション4】探究考察ワークショップ① 14時20分～16時20分 ※A～Dよりひとつ選択

A「SDGsの視点から探究を考える」

新渡戸文化小中学校・高等学校 山藤 旅間先生

B「地域との連携による探究のあり方を問う」

岩手県立大船渡高等学校 梨子田 喬先生

東北学院大学 地域共生推進機構 特任准教授 菊池 広人先生

C「主体性、協働性を育む探究プログラム」

産業能率大学経営学部 杉田 一真

D「探究の土台をつくる教師being」

かえつ有明中・高等学校 佐野 和之先生

【セッション5】16時40分～18時10分

探究考察ワークショップ②「習得・活用・探究を意識した『問い』のあり方を考える」

コーディネート 前 岡山県立林野高等学校校長 三浦 隆志先生

【エンディングセッション】18時10分～18時15分

【参加者相互のネットワークづくり（懇親会）】18時30分～20時30分

任意参加参加費2,000円

授業力向上フォーラム（名古屋開催）

～探究を考える～

開催日時：2019年8月18日（日）10:30～18:00

会場：名古屋プライムセントラルタワー13F 会議室

教育改革推進フォーラム（福岡開催）

～学校改革と探究について考える～

開催日時：2019年8月25日（日）10:30～18:00

会場：アクロス福岡 大会議室（7F）および中会議室（6F）

お問い合わせ：産業能率大学フォーラム事務局 担当：友野 Tel.03-3704-0731

授業力向上フォーラム

探究を考える

in
名古屋
8/18探究について様々な角度から考察し
教科との連携について研究する

次期学習指導要領改訂でのポイントは、「社会に開かれた教育課程の実現」にあり、その肝として「総合的な探究の時間」が義務付けられます。今回は、探究学習の先行事例を紹介し、問いのあり方や教員の役割などについて参加者と考察します。教育あるいは探究による学校改革、各教科との連携など、そもそも探究とは何を考え、生徒に何を期待するのかを参加者の皆様と考えたいと思います。また、フォーラムそのものを主体的、対話的に学び、参加者がアクティブラーナーとして成長する場となることを目的としています。

開催概要

日程 2019年8月18日（日）
時間 10時30分～18時
会場 名古屋プライムセントラルタワー13F 会議室
定員 200名
参加費 2,000円

主催 産業能率大学
後援 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会
 静岡県教育委員会 三重県教育委員会
 岐阜県教育委員会



お申し込みはこちら

※18時30分～20時30分 意見交換会（懇親会） 任意参加 参加費 3,500円

講演

01
session

総合的な探究の時間とは何か
 ～研究指定校での1年間の取り組みを終えて～
 立命館宇治高等学校 酒井 淳平先生

講演

02
session

探究の課題を
どのように克服していくか
 福井県立若狭高等学校 渡邊 久暢先生

事例紹介

03
session

学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改革を進めていくか
 ～産業能率大学の事例から～
 産業能率大学 情報マネジメント学部 松岡 俊

講演およびリフレクション

05
session

キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらせたもの

講演 三重県立四日市商業高等学校 校長 鈴木 達哉先生
 特別ゲスト 前 岐阜県立郡上高等学校 校長 服部 弘幸先生
 リフレクションファシリテーター 立命館宇治高等学校 酒井 淳平先生

探究分科会

04
session

A～Dの1つを選択

- A 数学にとっての探究とは何か？**
 三重県高田高等学校 岩佐 純巨先生
- B 地域連携による探究学習の課題と解決策**
 静岡県立韮山高等学校 鈴木 映司先生
 静岡県立浜松北高等学校 大村 勝久先生
- C 主体性、協働性を育成するプログラムの実践**
 産業能率大学 情報マネジメント学部 松岡 俊
- D 「問い」づくりの体験とその指導方法**
 産業能率大学 経営学部 皆川 雅樹

教育改革推進フォーラム

in 福岡

8/25

学校改革と探究について考える

次期学習指導要領改訂でのポイントは、「社会に開かれた教育課程の実現」にあり、その肝として「総合的な探究の時間」が義務付けされます。今回は、探究による教育改革の先行事例を紹介し、カリキュラムマネジメントや教員の役割などについて参加者と考察します。教育あるいは探究による学校改革、各教科との連携など、そもそも探究とは何を考え、生徒に何を期待するのかを参加者皆様と考えたいと思います。

開催概要

- 日程** 2019年8月25日(日)
時間 10時30分～18時
会場 アクロス福岡 大会議室&中会議室
定員 180名
参加費 2,000円

- 主催** 産業能率大学
後援 福岡県教育委員会 熊本県教育委員会
 鹿児島県教育委員会 佐賀県教育委員会
 長崎県教育委員会 大分県教育委員会
 宮崎県教育委員会 山口県教育委員会



※18時30分～20時 意見交換会(懇親会) 任意参加 参加費 3,500円

講演

01 session カリキュラム・マネジメントによる高校改革
 札幌新陽高等学校 校長の右腕 中原 健聡先生

講演

02 session SDGsの視点による教育改革
 新渡戸文化小中学校・高等学校 山藤 旅間先生

事例紹介

03 session 学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改革を進めていくか
 ～産業能率大学の事例から～
 産業能率大学 情報マネジメント学部 松岡 俊

講演およびリフレクション

05 session キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらせたもの
 講演 福岡県立城南高等学校 校長 和田 美千代先生
 リフレクションファシリテーター 熊本県立熊本北高等学校 溝上 広樹先生

探究をテーマとした分科会

04 session A～Dの1つを選択

- A 教科(国語)と探究をつなぐ授業設計**
 福岡県立若狭高等学校 渡邊 久暢先生
- B 歴史総合、日本史探究、世界史探究を深める**
 岩手県立大船渡高等学校 梨子田 喬先生
 産業能率大学 経営学部 皆川 雅樹
- C 理数探究基礎、理数探究の授業を作ってみる**
 熊本県立熊本北高等学校 溝上 広樹先生
 熊本県立八代清流高等学校 豊田 拓也先生
- D 主体性、協働性を育成するプログラムの実践**
 産業能率大学 情報マネジメント学部 松岡 俊

講演者プロフィール（敬省略）

■ 中原 健聡 札幌新陽高等学校 校長の右腕

認定 NPO 法人 Teach For Japan CEO

2011年の大学卒業後に単身スペインへ渡り、3年間プロサッカー選手として活動した。選手時代に複数の学校へ講演会に行く機会を通して「教育から日本に貢献する」事がMISSIONになり、学校を建てるために帰国。2017年4月より札幌新陽高等学校に校長の右腕として赴任し、同校で探究コースを2018年より開設。探究コースでは生徒の発達とライフスキルに焦点を当てたProject Based Learning と個別学習システムによるブレンディッドラーニングを軸に教育効果を偏差値ではなく「生きたいように生き続ける力」と設定し、人が育つ環境である学校を新たにデザインし全国でも注目される有数の学校となった。また、2019年4月より、認定NPO法人Teach For JapanのCEOに着任し、教員の養成・採用・研修を通じた一体的な改革の推進にも取り組んでいる。

■ 上木原 孝伸 学校法人角川ドワンゴ学園 N高等学校 副校長

1976年大阪生まれ。大学での教職課程を経て、大手教育企業で講師として17年間教壇に立つ。その後「IT×教育」の可能性を感じ、株式会社ドワンゴに入社。「カドカワの創るネットの高校」として2016年4月に誕生したN高等学校の開校に携わり、2017年4月より同校の副校長に就任。2019年5月時点の同校の生徒数は10,339名で開校初年度から約7倍の生徒数となっている。

■ 酒井 淳平 立命館宇治中学校・高等学校 教諭

立命館宇治中高でキャリア教育部の立ち上げを行う。2018年度より学年主任・研究主任として、文科省より研究開発学校（2018年度）、WWL（2019年度～）の指定を受けて総合的な探究の時間のカリキュラム作りや授業実践を中心となって進めている。

■鈴木 達哉

三重県立四日市商業高等学校 校長

国語科教員として3校を歴任。三重県立桑名工業高校を経て、川越高校、津高校で進路指導主事として「進学校としてのキャリア教育」を推進。神戸高校においては教頭として、キャリア教育推進とそれを通じての進学教育に尽力。三重県立高校全体のレベルアップのための高大連携やインターンシップ推進事業、企業・行政・NPOなどとの連携にも貢献。また、キャリア教育におけるアクティブラーニングの重要性と効果に着目、カリキュラムマネジメントをベースにしてその研究と試行に取り組んでいる。

■山藤 旅聞

新渡戸文化小中学校・高等学校 教諭

15年間、都立高校および都立中高一貫校教諭を経て、2019年から現任校。持続可能な社会を実現する行動者の育成を目指す教育デザインを実践。具体的には、企業やNP0/NGOとパートナーシップを組んだPBL(project based Learning)を実施し、現在は40を超えるプロジェクトを生み出している。さらには、全国の学校や大学、企業への「SDGs 出前授業」などを通じて、学校の枠を超えたSDGs教育の普及に尽力している。国連大学主催の全国ユース環境ネットワークやNHK高校講座の講師、東京書籍教科書編集委員等も務める。

■和田 美千代

福岡県立城南高等学校 校長

平成6年、城南高校教諭時代に生徒主体の進路学習ドリカムプランを企画開発、全国的な注目を浴びる。以来文部科学省の各種委員や調査研究者としてキャリア教育を推進。管理職を務めた後、福岡県教育センターでアクティブラーニングの普及啓発を担当。福岡県教委高校教育課主幹の後、現職。SJK(全国女性進路指導研究会)の顧問でもある。一貫して主体性や人を駆動するエンジンについて追求している。

■杉田 一真

産業能率大学 経営学部 准教授

経営コンサルタントなどを経て、2013年4月より現職。2014年に文部科学省「大学教育改革加速プログラム(AP)」の採択を受け、事業推進責任者を務め、アクティブラーニングの組織的な推進に取り組んでいる。2016年度より学長補佐、教育支援センター長。初年次教育改革にも取り組み、プログラム改編を主導した「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」が、2016年日本高等教育開発協会『JAED Good Teaching Award』を受賞。近年は、新たな高大接続の形として、探究学習を支援する高校生向けプログラムの開発・提供に取り組んでいる(主体的・協働的学習者育成プログラム)。

もくじ

「既存の概念を超える教育改革に挑む」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9 P
札幌新陽高等学校 校長の右腕 中原 健聡

「学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改革を進めていくか
～産業能率大学の自事例から～」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35 P
産業能率大学 経営学部 准教授 杉田 一真

「未来を予感させる新たな学びの姿」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49 P
角川ドワンゴ学園 N 高等学校 副校長 上木原 孝伸

「総合的な探究の時間とは何か ―研究指定校での1年間の取り組みを終えて―」・・・・ 81 P
立命館宇治高等学校 酒井 淳平

「キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらせたもの」・・・・ 103 P
三重県立四日市商業高等学校 校長 鈴木 達哉
前 岐阜県立郡上高等学校 校長 服部 弘幸

「SDGs の視点による教育改革
～SDGs を通じて社会課題を自分ごと化する教育デザイン～」・・・・・・・・・・ 123 P
新渡戸文化小中学校・高等学校 山藤 旅聞

「キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらしたもの」・・・・ 145 P
福岡県立城南高等学校 校長 和田 美千代

「習得・活用・探究を意識した『問い』のあり方を考える」・・・・・・・・・・ 169 P
(第13回キャリア教育推進フォーラム(自由が丘開催)参加者の振り返り)
前 岡山県立林野高等学校 校長 三浦 隆志

カリキュラムマネジメントの視点から探究を考える ～PART1～

札幌新陽高等学校 校長の右腕

中原 健聡 先生

既存の概念を超える教育改革に挑む

- 1 自己紹介と札幌新陽高校紹介
 - 2 学校改革・教育改革
 - 3 本日は「カリキュラム」の話、福岡で組織開発の話します
 - ①目の前の子どもを観察してカリキュラムを考える
 - ②探究コースの説明とともに、カリキュラムづくりに必要な考え方を解説
 - 1) 学校は人生を見据えた学習の場、
 - 2) 探究コースの教育目標
 - 3) 機会づくりに PBL
 - 4) 情報収集スキルと判断力の育成
 - 5) 課題達成学習の例
 - 4 人間関係の構築力、協働力
 - 5 探究コースのビジョンは「教室から世界を変える」
- 質問タイム** (ロイロノートを活用した質疑応答)

既存の概念を超える教育改革に挑む

札幌新陽高等学校 校長の右腕
中原 健聡

1 自己紹介と札幌新陽高校の紹介

中原健聡と申します。時間は 50 分ほどと伺っています。その後、皆さんとインタラクティブに意見を共有できる瞬間があればなと思っています。

自己紹介をしながら進めます。ぼく自身のビジョンはこのスライドのとおりでありまして、実は 31 歳ですが 5 回大きくキャリアを変えています。2 年に 1 回やることを変えているということです。履歴書を見るとすごく職の荒れた奴です。今日は僕のキャリア観もふまえて、皆さんと共有できたらなと思っています。よろしくお願いします。

ぼくは小学校の現場で先生として働いた経験もあります。主に 3 年生と 4 年生を教えました。その中で大事にしていたのは、「学力テスト以外の教育の価値、子どもたちの可能性の表し方とは何なんだ」と言うことでした。

そして 2 年間で、自分の中である一定の成果を確認し、仮説が確信に変わったので、次の自分の活動の場を札幌に移しました。その理由は「校長の右腕」という役職の公募があり、それをたまたま見つけて、小学校現場での確信を形にする場には最適だと考え、2017 年 4 月から札幌新陽高校に行きました。今年度からはぼくは新陽高校と雇用関係ではなく、個人事業主として契約し連携を続けています。それは今、言われている「働き方改革」に関連します。新陽高校は残業代を支払うなど、適切な学校経営に改善させているので、良いとは思いますが、それは逆に労働時間などを管理されてしまい、ぼくは窮屈に感じるので雇用契約を辞めました。その他にも東京で認定 NPO 法人 Teach For Japan の代表に就任する機会も重なり、そちらの経営も行うために今のようなパートナーとしての形がベストというのも要因の一つです。

ぼく自身が「働き方改革」に関して先生方にお伝えしているのは、「働き方ではなく生き方の改革だということ」です。「どのように生きたいのか」ということをメインに考え、人生の一部であり個人の Vision を達成する手段である仕事を選択するというマインドを持つことが重要だと思います。

さて、ぼくが新陽高校に行った当初は、生徒の充足率が約 60%ほどまで落ち込んでいる状態でした。地域では「最後の砦、新陽」と言われていまして、もう行く高校がない、最後に行くのはあそこだということでこの通称がついていました。「最後の砦」なので、多くの人は行きたくはないんですよ。行きたくないってことは、充足率はこうなりますよね。少子高齢化のあおりを一番に受けて、行きたくない学校は一番最初に潰れていく。

札幌ではその先頭を切っていました。今は約 103%を超えるまで、経営回復し、この場に呼ばれるような学校になりました。

東京で経営している NPO 法人は、教職課程、教員免許というシステムそのものを大きく変化させようと、チャレンジしています。日本においては「特別免許」や「臨時免許」といった制度が昭和 63 年ぐらいからありますが、それらをうまく活用して今の学校現場の課題を解決していこうと取り組んでいます。

今日は様々なことをお伝えさせていただくとてもいい機会をいただきました。産業能率大学の林さんとのご縁に感謝しております。

また、ぼく自身のサッカー選手時代のことや、小学校でのことはインターネット上に上がっている記事にありますのでご参考ください。

ぼくは 5 回キャリアを変えています。それは全て手段です。仕事は自分の Vision を達成するための手段であって、限られた人生において自分はどのステージ、どの状態にいるかということを考えて手段を選択していくことが重要です。だからぼく自身の夢、「ビジョン」はこれで、(スライド 8) 適切なタイミングに適切なものを選んで、それが手段です。

(スライド 8)



多くの人達は「何をするか」にこだわったり、進学ならどこ高校や大学に行くかにこだわったりしますが、それは重要なことではありません。どの高校や大学であろうと、毎年入学生も卒業生も数多くいます。所属するだけなら one of them になります。進路、キャリア、手段の選択というのは「何のために自分自身が生き方を決断しているのか」という当事者意識を持つことが大事です。それを学校という機関にいるときに育むことが大事で、新陽高校の探究コースはその力を育むカリキュラム設計をしています。

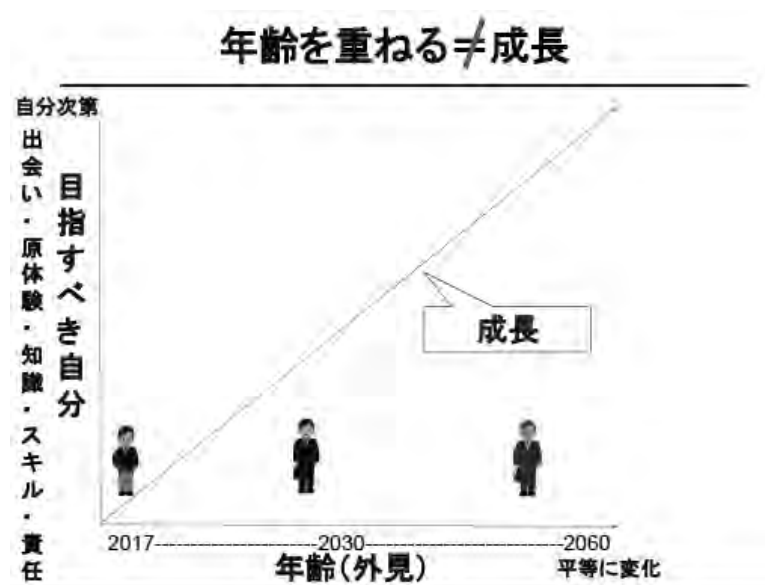
今日のテーマは「既存の概念を変える」としています。「既存の価値観、教育効果の前提条件を疑う、再定義しよう」という提案です。

再定義となると、今まで自分自身が経験したことや、一般的な常識のような空気からくる視点・視野・視座を疑える力が必要です。そして、想像する力も必要です。今まで積み重ねたものを捨てることも必要で、それはすごく勇気がいることです。

そして自分自身にいつも言い聞かせていますが、「年を重ねること=成長」ではないと思っています。多くの人は健康であれば1年経ったら1歳をとって、外見が変化していきます。でもこの外見の変化と中身の変化がイコールだとは思っていません（スライド13）。

歳を重ねることが成長ではなくて、めざす自分の姿、ビジョンがあり、それに必要な体験をしていくことを貪欲に追い求めることができるかどうか成長し続けるか、しないかの差になると思います。だからスライドのこの線にのるための習慣を学校現場で身につけないと、いわば「何のために」ということを自分自身で意味づける力がなければ成長は難しいことだと思います。

（スライド13）



だからこそ、「経験した、体験した学校のイメージ」から発想するのではなく、「想像」から学びの場をデザインしようと。目の前の子どもたちが「どんな時代を生きるんだろう」「どのように生きたいんだろう」「どのように考えているんだろう」と想像しながら、学びの場所をつくりたいと思っています（スライド15）。

（スライド15）

過去の体験＝知識ではない

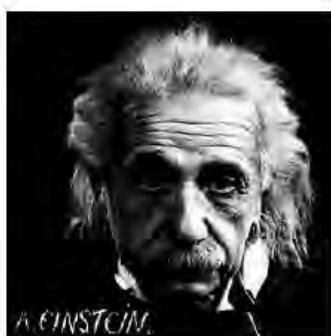
想像は知識よりも重要である。

知識には限界があるが、

想像には世界を包み込み、

進歩を促し、

進化を生み出す。



今日この場に皆さん、お忙しい中で集まっていたので、どういう場にすべきかを考えながら、この時間を、皆さんにとって、そしてぼくにとっても、有意義な時間にできればと思っています。

スライド 17 にある「 $1+1=2$ 」、これについて「こういう理由で絶対に正解だ」と言える方いらっしゃいますか？ では「 $1+1=2$ 」これが間違いだと思う方は？

会場一理由はわかりませんが高校生の時に数学の先生からこの話を聞いたことがあります。

ありがとうございます。いいですね。多くの人は、ここにそれほどの疑問は持たないと思います。「ああなるほど、確かにそうだよね」と違和感が無いと思います。「 $1+1=2$ 」について、それが正解だという体験が多かったと思います。

(スライド 17)

$$1+1=2$$

$$1+1=10$$

では次にその下の「 $1+1=10$ 」について、これは絶対間違いだと思う方は？ 過去の経験から目の前のことを考えるときに、ある程度、定義されてしまう。そういうときに、「前提条件、定義があっているのかな？」「その可能性はないのかな？」といった思考プロセスを経ることはものごとを新しくつくる時、現状を改善・発展するとき、またチャレンジするときに必要なことだと思います。なぜなら定義が変われば、この答えが変わるからです。10進法なのか2進法なのか。定義が2進法に変われば、「 $1+1=10$ 」は正解になります。

ぼくらが普段、経験していないことですら定義が変われば正解になります。では、教育において「定義をどこに持っていくか」です。すごく難しいですよ、正解も絶対はないと思います。

だからこそ、こういう場で多くの人と一緒に考えながら、そして協議しながら、それぞれが解釈して、目の前の子どもたちに伝える必要がある。今日はここでぼくの解釈を皆さんにお伝えしたいと思います。

2 学校改革・教育改革

学校改革・教育改革で、多くのトピックが上がっています。スライド 19 に書かれているような内容です。特に言われているのは「センター入試から大学共通テストになる」という点ですね。

「英語の4技能はどうなるんだ？ TOEIC は入るんだろうか？」と、教育の改革についてそういった議論はなされます。ぼくが責任者を務めている札幌新陽の探究コースでは大学共通テストが中心の設計はしていませんと、在校生、進学希望者、保護者にお伝えしています。大学共通テス

トが騒がれている間に、子どもたちの人生が過ぎていき、時代も変化しているのに、入試改革を待ってられないです。そこを重要視したい方を強引に説得することはしませんが、ぼくは重要じゃないと考えるので、別の軸を教育効果と定めて学びの環境を設計しています。

(スライド 19)

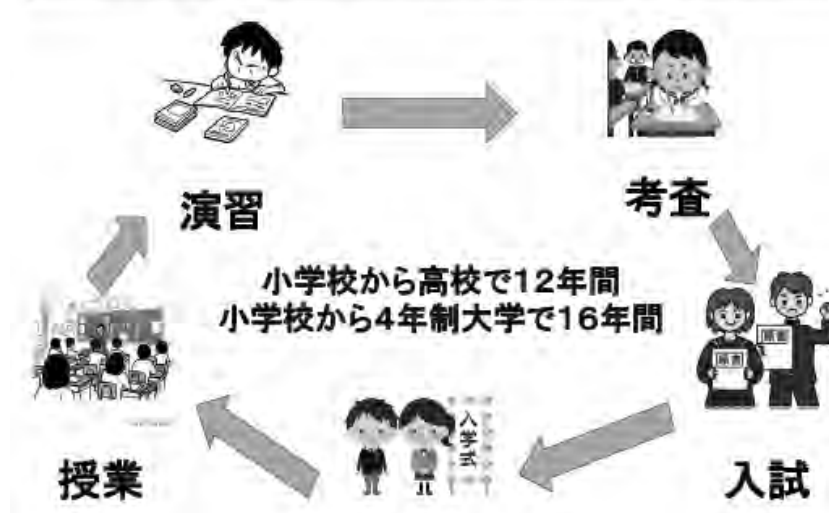


多くの人達や少なくともここにいる方は高校までの教育機関で経験したのは、偏差値を重視した「有名大学に入学するための」テスト、演習、授業のサイクルを回した教育活動だと思います。それが子どもたちの人生において、ベストだと感じられる何かがあったからかもしれません (スライド 20)。

でもこれから先、それも本当にそうなのでしょうか。多くの方々が抜けている情報や知識として、大学に行った後の日本経済や社会構造の変化を捉えていない人が多い。自分が生きてきた過去のイメージを持ったままになっている。その価値観で進路指導、カリキュラムを設計することは危険です。

(スライド 20)

それでも多くの「学校」は価値観を変えれない



その価値観とは誰のためなのか？ それは、学習者を中心に考えた価値観なのか？ということ
をぼくは常に自分自身に問いかけ、チームのメンバー（教員）にも話をしています。

こういった話を講演ですと、例えばこんな反応があります。「中原さんの話は不快でしかなかった」「この方を今回のシンポジウムに選ばれた方の見識を疑う」と。こういうことをしっかりと書いていただけます。今回も皆さんもそう感じられるかもしれませんが、その矛先を向ける先は産業能率大学の林さんです。（笑）林さんが何度も何度も新陽高校に足を運び、是非、話をしてほしいと言ってくださったので「じゃあ行きます」と言いました。なのでこの場合責任取るのは林さんですね（笑）。

それからこんな意見もあります。「中原さんの発表は反動的にしか聞こえない」「あまりにも抽象的で堪えられない」という感想があります。でもぼく自身はすごく重要だと思っています。ぼくの話聞いて皆さんが違和感とか不安を感じられたら、不快に思われたら、それはすごく重要だと思います。異質と出会うと人は考えるし、「本当にそうなのかどうなのか」と考える。だからぼくは常に異質でありつづけようと思っています。教育に携わる人が、常にクリエイティブであるために、思考をフル回転させることが習慣化するために、そのきっかけを創出する事も僕の役割だと考え、このような機会を活用しています。

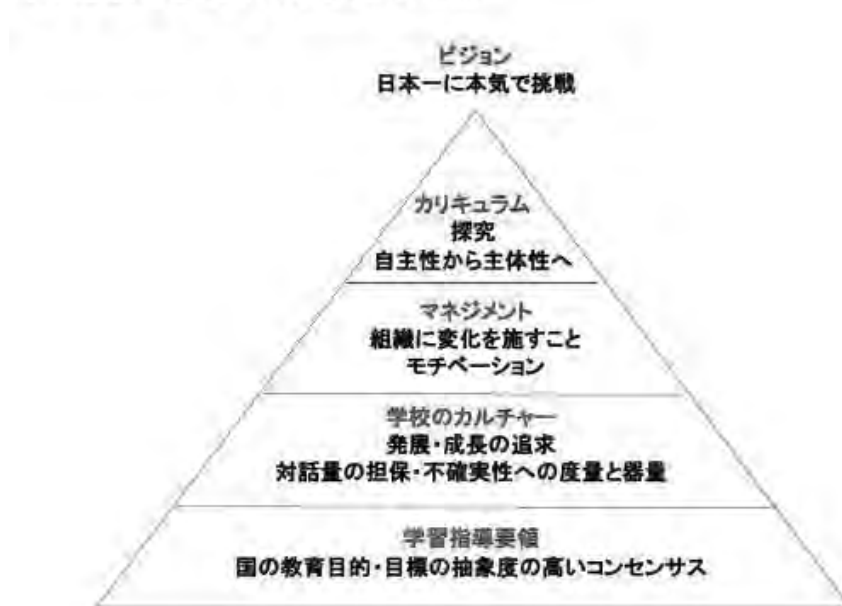
3 本日は「カリキュラム」の話、経営、組織開発、文化の醸成は福岡で話します

①目の前の子どもを観察してカリキュラムを考える

今日は皆さんにカリキュラムの中身の話もします。今日ぼくが話をするのはこの三角の一番上の「カリキュラム」というところです（スライド 23）。しかし、それは重要ではありません。「ICTを導入するんだ」とか「何をしているか」というのは、さっきの「何をして生きているか」というのと一緒にです。仕事と一緒にです。「何をしているか」は重要ではありません。大事なものは「何のためにしているのか」ということです。そのため、何を目的にしているかが定まっていないのに、カリキュラムを取り入れても機能しません。

（スライド 23）

学校経営のビジョン&トライアングル



例えば皆さん、どこかの教育機関や企業に勤めていらっしゃると思いますが、ご自身の学校の教育目標もしくは企業の場合はビジョンを、今この瞬間にすぐ言えますか？これが言えることがまず重要だと思います。教育目標や企業のビジョンは上位目標であり、それを把握していないのに手段の議論は意味をなさないからです。また、ご自身が所属されている場所での当事者意識が、そこに反映します。組織やチームへの当事者意識と個人の目的意識は別物なのでそれをクロスさせて、4象限分析しながら、チャレンジしていくことが重要です。もし、組織やチームへの当事者意識を持っていないなら、起業されて個人の目的意識が組織のビジョンに反映される状態を作ることをお勧めします。

②探究コースの説明とともに、カリキュラムづくりに必要な考え方を解説

1) 学校は人生を見据えた学習の場

探究コースについて説明します。結構、いろいろなことをするので「設定教科は多いんですか？」と聞かれますが、そんなことはありません。取得単位は一般の高校とほとんど変わりません。少し色がついているところ（スライド 26）に学校設定教科や科目がありますが、一般的な科目配置です。

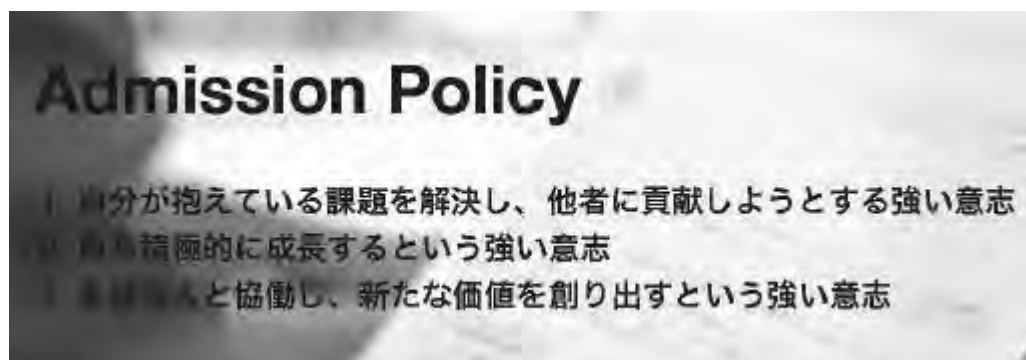
（スライド 26）

取得単位は理数系の高等学校に似ており、進学の選択肢としては一般の高校と変わらない。

1学年	国語総合	世界史A	現代社会	数学Ⅰ	数学A	科学人間	物理基礎	体育	保健	美術Ⅰ	英語Ⅰ	社会情報	総合	デザイン思考
単位	3	2	2	3	2	2	2	3	1	2	4	2	1	1
2学年	国語表現	地理A	倫理	数学Ⅱ	数学活用	化学基礎	生物基礎	体育	保健	英語Ⅱ	家庭基礎	総合	デザイン思考	起業家教育
単位	3	2	2	4	2	2	2	2	1	4	1	1	1	2
3学年	国語探究	地理探究	数学Ⅲ	数学B	物理	化学	生物	理科課題研究	体育	外国語実践	家庭基礎	総合	課題達成学習	デザイン思考
単位	1	1	5	2	4	4	4	1	2	2	1	1	3	1

そしてアドミッションポリシーを3つ掲げています（スライド 27）。探究コースの入試はこの3つだけを問うテストなので筆記テストはしていません。目の前にいる子どもたちとこのアドミッションポリシーに沿った対話をして、入学を決めていただいています。

(スライド 27)



先ほども言ったように、目の前にいる子どもたちにとってベストなカリキュラムを設定するときに、ぼくらのプロモーションだけを見て、楽しそうだからと入学したところで、合わない場合も絶対にあります。そういったミスマッチを避けるために、目の前の子としっかりと対話しなければいけません。

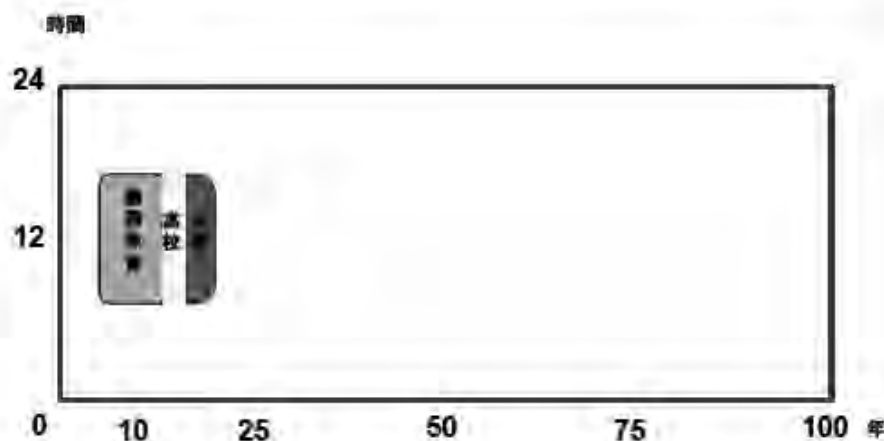
実は1年目が35名の募集に対して、40名弱しか応募がありませんでした。でもぼくは24人しか合格としませんでした。本人だけでなく、保護者もこのコースの趣旨を理解していなければ、探究コースには来ない方がいいという判断です。ほとんどの人が持っていない教育機関の価値観なので、入ることを目的にしている人は断ります。18歳の偏差値を中心に高校生活を考えない、大学入試は無視するくらいの気概がある人が向いています。人生100年という限られた時間をどこまで想像し、予測しながら高校の3年間を活用するかが大切で、卒業時はその人生を見据えた自己決定をしていることを目指しています。百年先を予測するのは確かに難しいかもしれませんが、最新のテクノロジーをキャッチアップすることは一つの指針になります。」そのテクノロジーによって生まれる社会課題や社会構造、経済情勢を想像することは、進路選択において大切な思考・判断です。

だからこそ学校のカリキュラムをつくる上でも、未来の変化をしっかりと理解した上で、学校という場をどう設計するか。大学入試の設問がどうなるのかというより、もっとはるかに子どもたちの人生において重要な要素です。

人生を考えるときに、縦軸が1日、横軸の一番右が100年後の図で見ると(スライド30)、学校にいる時間はこの色に塗っている時間だけなんです。残りの空白の部分自分で色を塗り続けなければならないんです。残念ながら多くの方は自分で色を塗り続ける力が乏しく、何のために生きているのか軸を持つ人が少ない。最悪のケースでは途中で、ご自身の人生を閉じてしまう、そういう判断をする人が多いのも日本です。

(スライド 30)

意味を持つ力は、夢や目標を持つ力に繋がる



日本全体の自殺率が下がっているという話があるなかで、すごくショッキングなことですが、ぼくたちの目の前の子どもたちは2010年以降、小・中・高生の自殺率は増え続けています。

学習指導要領の大きな目的は「生きる力」だけけれども、その真逆の状況をぼくたち学校は起こし続けている。これにはすごい違和感があります。だからこそ「人生を捉えた学習の場」を設定しています。

探究コースには3つのミッションがあり、一つ目は「偏差値ではなく経験値を蓄積する」というミッションです。筆記での入試が無い上に、中間考査、期末考査もありません。テストの点数でその子の学習を評価するということは、本校においてはしていません。

2つ目のミッションは「人が集まる意味を捉える」です。通信制高校やYouTubeで世界中の授業や講義を受講できる時代において、人が集まる価値を有効に活用する必要があると考えます。世界中のすべての人が唯一平等といえるのは時間です。1日24時間とその進む早さは平等と言えます。そして、その時間は寿命です。

お互いの寿命を消費しているのか、浪費しているのか、投資しているのかは、その時間の価値に左右されます。わざわざ人を集める場合、その場に「その人の人生にとってどんな時間にできるのか」を意識して学習を設計する必要があります。そして、その考えは3つ目のミッションに繋がりますが、教育効果は人生そのものであり、18歳の進路ではありません。探究コースの説明を聞いた際に、「出口はどうなっていますか」と質問を受けますが、そういう方は教育の本質を捉えられていません。教育の出口はその人が人生最後の瞬間に自分の人生にどのような解釈を行い、意味づけをしてすべてを引き取る「息を引き取る」かになります。18歳を教育の出口と安易に考えている思考は危険です。

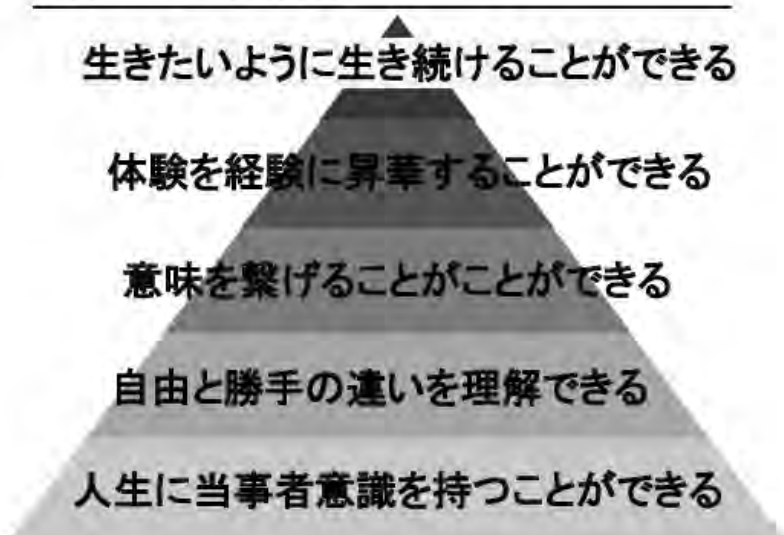
2) 探究コースの教育目標

探究コースの教育目標はこういうことになっています。一番上は「生きたいように生き続ける人を育てる」。あなたなりの人生を想像してやり切ってほしいと思っています(スライド 35)。

最上位目標に到達するには段階があり、この段階を学習課程で意識し、省察することを繰り返して育んでいきます。

(スライド 35)

探究コースの教育目標



3) 機会づくりに PBL

この教育目標を達成するためのプロセスには「出会いと原体験」をきっかけにしてチャレンジできる機会を創出しており、PBL (Project Based Learning) を、実施しています。(スライド 36)。

(スライド 36)

探究コースの学習コアValue Project Based Learning(課題達成学習) Personalized Learning(個別学習)

可能性が最大限に広がる出会いや原体験がある

×

能力を引き伸ばすチャレンジができる機会

情報収集・編集というのもしっかりと考えています。ときに教科書を使わないというふうにもニュースに出たりするけれど、教科書は普通に使います。でも、教科書を使うか使わないか判断するのは大人じゃなく、生徒が判断します。子どもが教科書を使うべきなのか、インターネットを使うべきなのか、図書館を使うべきなのか、人から情報を引き出すべきなのか、どの情報源を活

用し、解釈を通して意味づけし、知識にするのかをプロセスでは大事にしています。

例えば「教科書に書いてありました」「誰々が言っていました」「インターネットにありました」と言ったら、それはあなたの意見じゃないでしょ。ただの情報です。それは知識でも何でもありません。こういうところを生徒たちに理解してもらいます。

(スライド 37)

Project Based Learning(課題達成学習)

目的

人生を自らの手でより良くし続ける力を伸ばす。

学習によって習得を目指す資質・能力

20年先を想像し、10年先を予測し、5年先を捉えて今を決断する力を育む。

経験学習により事実を知り、視座を高めて、無知に気づいて、多角的に情報を収集し、会話・対話・議論を重ねてブラッシュアップし学習する技術を高める。

探究コースの学習はその経験値を積みカリキュラムになっています。

4) 情報収集スキルと判断力の育成

あとは「スキル」ですね。情報を集める時の技術の修得を、どうやっているのかをお話しします。動画をご覧ください。

(動画)

この英語を皆さんは聞き取れましたでしょうか。ここで言いたいのは、個人の能力が低いのをテクノロジーを活用して補填するスキルがあるのか、もしくはそのような思考があるかという点です。技術は日々進化していて、画面の操作で「字幕」を押し、「言語選択」で日本語を選ぶと、オンタイムで AI が聴き取って全部和訳します。英語が聞き取れなくても情報を得たかったらそういう技術の運用さえわかれば、情報も取得できる。

この映像は MIT のアントレプレナーシップの講義です。ぼくたちは日本にしながら、MIT の講義を受けることは可能です。生徒にはこういう判断力をつけさせることも大切だと考えますが、大学入試が前提になりすぎると排除されるスキルです。世の中にある技術を使えば、個人の限界を拡張し、可能性を広げる事実がある。また、そのようにテクノロジーを利用するからこそ、語学の必要性も考えられます。なぜなら、悪用すれば嘘の字幕を出して人を扱えるからです。だから子どもたちがどういう情報ツール、どういう情報源から取得し判断しているのかもアセスメントします。

情報だけではなく、そこに対して自分自身で意味をつけなければ、知識になりません。これからの世の中を考えたときに、どう生きるかを考えるときには、知恵が必要です。

こういった知恵、知識の構造を伝えて、「情報だけではない」ということを重要視したプログラムにしています（スライド 41）。

（スライド 41）

多様な情報源にアクセスし、得た情報を解釈して意見を持ち、自らのアイデアを創り出す



5) 課題達成学習の例

例えばこのような PBL をしました。日本人は世界的に見ても睡眠時間が短いです。この中に昨年 7 時間以上寝た方はいらっしゃいますか？ この会場もやはり少ないですね。日本はこの 50 年で、平均 63 分間睡眠時間が短くなりました。睡眠時間が短くなると、さまざまなことに影響します。その内の一つが生活習慣病です。自分たちが心身ともに健康で人生をやりきるために、テクノロジーの進化がどのように普段の生活に影響しているのかを、日本の課題を通じて自分事として考えるコンテンツです。（スライド 44）。

生徒たちからすると YouTube や SNS が生活習慣に影響し、朝は眠たそうな顔をして登校しています。こういった事実から道具・テクノロジーを活用しているのか、依存しているのかをいろいろな知識・角度から思考するきっかけを学習プロセスに組み込む工夫が必要です。

（スライド 45）。

(スライド 44)

課題**睡眠障害をもたらす現代社会の問題**

出典:公益財団法人 東京都医学総合研究所

(スライド 45)

睡眠への世界的な意識の高まり

- ・世界のトップアスリートの睡眠コーチ導入
- ・睡眠障害が医療分野として登録される
- ・「睡眠負債」の2017年の流行語トップ10入り
- ・平昌冬季五輪の“快眠”支援はフィギュア日本代表の大半が活用
- ・バス・タクシー・トラックのドライバーの乗務禁止事由に「睡眠不足」を追加

カリキュラム（スライド 46）はこのように組みます。先ほどテストがないと言いましたが、学習成果は何かのかたちで出さなければいけません。例えば、企業、大会、もしくは自治体や研究機関への提案、論文として出してみるなど、さまざまな形でアウトプットし、「自分たちの学習を何に発展させられるか」を意味づける思考を育みます。最終的には自分たちで判断し、提出していく、ことを目指します。

先ほどの「睡眠」に対して様々な教科の特徴を理解して関連させ、設計し、アウトプットしていく。これが今よく言われている「カリキュラムマネジメント」とか「教科横断型」と重なるところがあると思います。

(スライド 46)

学習の目的	現代の社会課題への解決策を提案する過程を通じて、コラボレーション能力やコミュニケーション能力を育む	
アウトプット先	NTT西日本オープンイノベーション推進室	
横断教科	教科目録	キーワード
音楽Ⅰ	音や音楽と音や音楽によって喚起される自己のイメージや感情との関わり、音楽の文化的・歴史的背景などとの関わりについて考える	音楽の特徴を捉える
世界史A	19世紀における南北アメリカ大陸再編の動きを多角的に理解する	南北アメリカ大陸再
現代社会	現代社会における諸問題を扱う中で、社会の在り方を考察する	情報化の進展と生活
保健体育	心と体は互いに影響し変化することや心身の状態に気付く 健康についての自己や社会の課題を発見し、合理的計画的な解決に向けて思考判断する	体ほぐし運動 休養・睡眠と健康
社会と情報	・情報化が人間に利益と幸福をもたらしていることについて理解する ・情報化の「影」について、高校生に身近な事例で理解する ・静止画と動画の利用効果について実習を通じて学ぶ	情報社会 プレゼンテーション
科学と人間生活	・光の刺激に対する生物の反応に興味・関心をもつ ・体内時計について理解し、日光が体内時計の調整に役立っていることを考える	ヒトの視覚と光
数学Ⅰ	データの特徴や傾向をとらえるために、データを整理することのよさを認識し、データを度数分布表やヒストグラムを用いて表すことができる	データの整理

時間割ですが基本的に2コマ続きです(スライド 47)。50分で完結させることは困難なので100分設計です。生徒たちが活動する時間が長いので、100分の中でも講義的な時間はほとんどありません。このPBLを設計する時にテーマと横断する教科の相性は配慮する必要があります。例えば火曜日、「物理基礎、科学と人間生活、数1」と続きます。ロケットに関するPBLを行う時に相性がいい教科を配列することが、限られた時間の中で学習を深めることにもなります。

(スライド 47)

時間割

	月	火	水	木	金
1時間目	美術Ⅰ	物理基礎	国語総合	社会と情報	体育
2時間目	美術Ⅰ	物理基礎	国語総合	社会と情報	体育
3時間目	世界史A	科学と人間生活	保健	英語Ⅰ	現代社会
4時間目	世界史A	科学と人間生活	体育	英語Ⅰ	現代社会
5時間目	数学A	数学Ⅰ	総合	国語総合	数学A
6時間目	英語Ⅰ	数学Ⅰ	HR	デザイン思考	英語Ⅰ

中学校や高校は教科担任制なので、教科横断型の学習に工夫が必要です。2コマ続きにしているのは、人が変わることを最小限にするという意図もあります。ただ、人が変わりますが、お互いの専門性を共有し、テーマや学習設計についてフィードバックすることが重要です。

(動画 札幌新陽高校の「数学コース」の授業のようす 睡眠と音楽の関係)

企業が新しいサービスを考えていたりして、それを学習でタイアップすることで、起業に繋がったり、企業側の人事マインドの変化、いわば学歴ではない高校生への価値に気付く瞬間にもなります。PBL 学習にはそれだけの可能性があります。学習のプロセスがお金を稼ぐツール（経験値）にもなります。そういう事実を生めると、奨学金（借金をして）を借りて進学するという概念を崩せるかもしれません。

その他で言うと、SDGs クリエイティブアワードも活用しました。ここでまた動画をご覧ください。

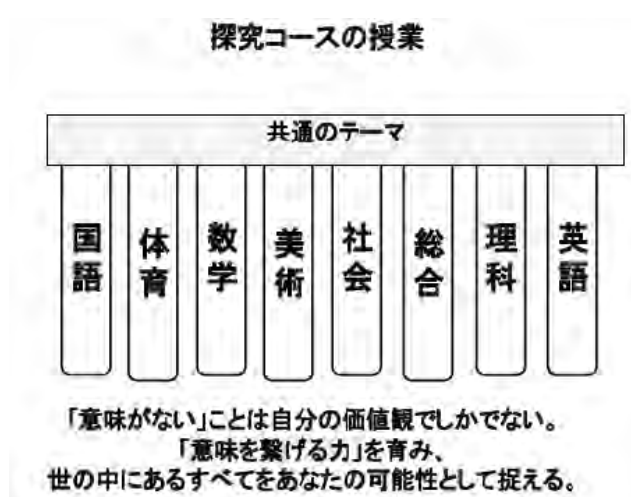
(動画 探究コースの授業)

ご覧いただいた動画にあるようなものを子どもたちは制作し、アウトプットしています。同じテーマのもとで各教科が、その教科では何が当てはめられるかを教員の間で話をしています（スライド 52）。

大事なのは「意味をつなげる力を育む」。これを大事にしています。なぜかと言うと、これは先ほど言った「何のために勉強するのか？」という問いがありますが、それについて「テストのため、入試のため」という話をしたら、多くの生徒たちにとっては納得感のない答えになるわけです。「大学行けへんし」「勉強する意味もないし」とその生徒を取り巻く環境によってはそのように思っている子もいます。

夢、目標、意味は、もともと人からもらうものではありません。自分で持つものです。「何のためにそれをするのか」とは「どう生きたいか」につながるからで、「意味をつなげる力」を高めなければならぬ。

(スライド 52)



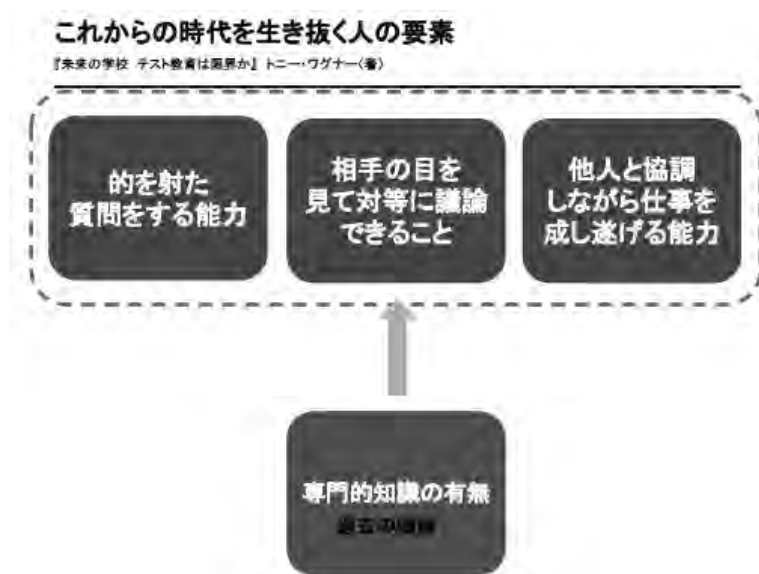
4 人間関係の構築力、協働力

意識しているのは、この場もそうですが、人が集まっているのにこうやってぼくが一方的に喋るのは時間としてはもったいないですよ。これだけ人がいるんですから、どんな力を発揮すれば人間関係を適切に構築できるのか。

先ほどの情報源の話ですが、例えば「目の前にいるぼくがどういう人間で、どんな背景があり、どんな知識を持っていそうだから、こんな質問をすれば自分の課題にとってベストな情報源になるだろう」、そういったことを理解して質問する力が必要です。

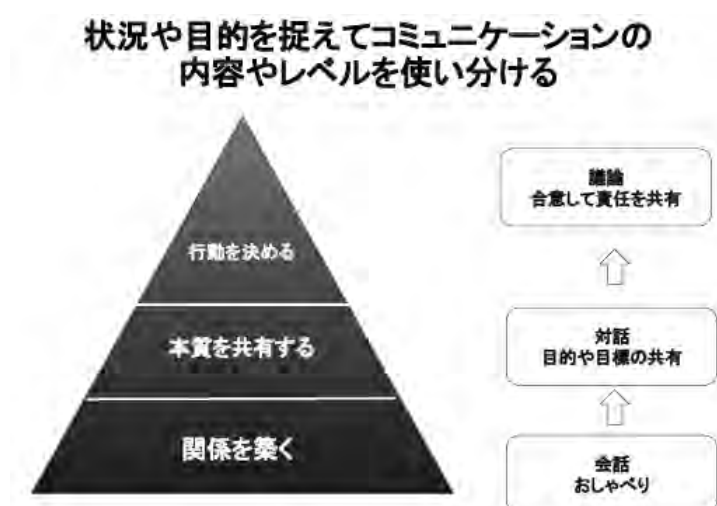
それから日本は独特で、肩書きや年齢、そういったことを前提としたコミュニケーションがスタートしますが、そもそもそうではない。コミュニケーションとはそういうことではなくて、コミュニケーションとは聴くことが前提で、相手の目を見て対等に議論ができるか。それには最大限のレスポンスを相手に持つ力がそもそも必要です。人を承認する力が必要です。肩書きや年齢に左右されない、人を承認する力ですね。そういったことを早い段階から子どもたちは学習の要素としてトレーニングする必要がある（スライド 54）

（スライド 54）



だからこそ「状況に応じて自分がどのようなコミュニケーションをとるのか」ということを考えることもフィードバックします（スライド 55）。おしゃべりするのも重要です。それは初めて出会うときにお互いの人となりや、価値観を探るためにはおしゃべりも重要です。おしゃべりから本質を共有する対話、目的や目標の共有、さらにお互いの責任をシェアする、実行の共有。こういった階層をどのタイミングでどのように行き来するか。それコミュニケーション能力の一部と位置付けて学習の観察ポイントにしています。

(スライド 55)

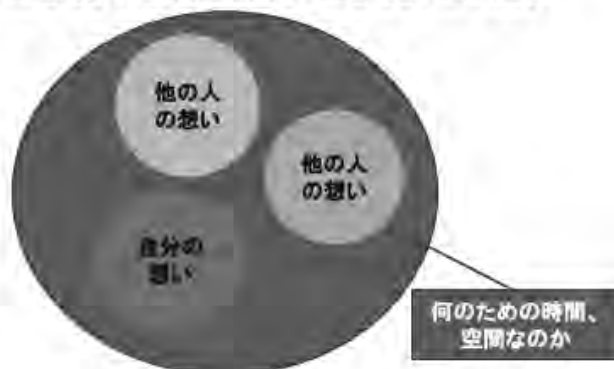


「自分が生きたいように生き続ける」というときに、「なんでも好きなようにやっていいんだ」と勘違いするんですね。大きく違います。ぼくは学校教育を考えると、最低限、彼らが大人になって 30 歳、40 歳、50 歳になったときに、その時代にいる子どもたちにとって「どのような影響を与えられる人になっているのか」を考えて設計しています（スライド 56）。

(スライド 56)

自由と勝手の違いを理解する

「生きたいように生きる」のと「好き勝手に生きる」ことは違う



「生きたいように生きる」のが「好き勝手に生きる。自分のことばかり考える人」では、将来 30 歳以上になったときに、その次の世代や時代の発展に及ぼす影響が大きく変わるからです。だからこそ自由と勝手はまったく違うことを理解するために、PBL というのはすごく有効です。様々なコンフリクトと向き合う経験ができるので。多くの学校はこのコンフリクト、人間関係の軋轢やぶつかりをできるだけ避けようとしています。これは避けてはだめです。合う、合わない、不安、不満があっても当然です。あっていいんです。それをどう解釈して意味付けし、次の自分の思考判断に応答するのが重要です。PBL の途中や最後など、いくつかのポイントで、このスライドのように自分のポジションを客観的に内省するというもやっています。

(スライド 57)



冒頭でも言いましたが、皆さんも、個人の目的意識と所属先・組織への当事者意識をクロスさせていかないと、生涯を通じて学習し続けられないと思います（スライド 57）。生徒たちにはお互いに「あなたも他の生徒にとっては教育効果の環境の一部」ということを理解してもらいます。

（スライド 58）。

ICT や E-learning は「知ることを学ぶ」経験を得るために活用しています。基礎学力の定着を求める人が多いですが、人はそれぞれ認知経路は異なります。それを一つの方法でまとめたり、教授する側のスキルに責任を問うことがナンセンスです。知識を獲得するまでの過程に、「どのような力・スキルセットがあれば得られるのか」というところに気付き、試行錯誤を繰り返す力を育ませたいと考えます。

(スライド 58)

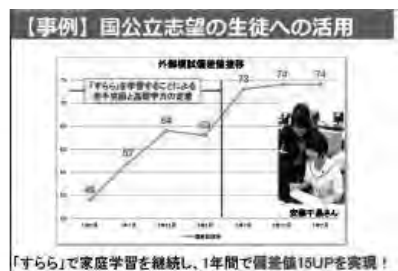
**ICT
e-learningの有効活用**

1,000冊の自由読書



全冊 英語ネイティブの朗読音声付

【事例】 国公立志望の生徒への活用



「すらすら」で家庭学習を継続し、1年間で偏差値15UPを実現！

【解決策】 多読＋多聴で大量の英語をインプット

多読
Comprehensible reading

辞書を覚えずには読めず、やさしい単語を読み、知らないことは辞書で調べ、単語の意味を覚える。単語の意味を覚える。

多聴
Comprehensible listening

やさしい音声をたくさん聞き、単語の意味を覚える。単語の意味を覚える。

期待される効果例

リーディング力向上	リスニング力向上	リスニング力向上
ライティング力向上	スピーキング力向上	スピーキング力向上
読解力向上	読解力向上	読解力向上

最近、テクノロジーは一人ひとりに合った難易度で学習でき、それが個別最適化という人がいますが少し誤解しています。難易度の最適化は公文さんが昔からやっています。テクノロジーだからできることではありません。個別最適化というのは、自己の認識力、目標設定力、時間軸のコントロールができることです。例えば、ダイエットしたいという想いがあったとします。まずは、現状を把握することが必要です。自分は標準体重に照らすとどのような状況なのか。100 kgを超えている人が、ランニングを選択するのは現状把握をする力がありません。その手段の選択はミスで、膝に大きな負担をかけ、継続した取り組みが不可能になる可能性が高いからです。動画アプリで何十分も有名講師の話が聞けますというものがあります。これは、そもそも学習に対してある一定のストレスに耐える力がないと活用できないですね。それがすべての人に当てはまるわけがないです。その子の現状にどのようなツールがベストなのかをちゃんと判断しなければならない。

そしてその先にある目標、例えば「東大に入りたい」「就職したい」「起業したい」、こういう目標によっても手段は異なります。

さらに、どれだけの期間があるのか、時間によっても違う。だから「現状」×「目標」×「時間軸」(スライド 65)で手段を選択する力が重要で、手段だけで個別最適化とはなりません。重要なのは選択できるツールもなるべく多く環境として準備し、子どもたちが自己決定することを繰り返し経験値を積み重ねることが大事です。

個別最適化というのは難易度の話ではないですね。「現状理解から目的の設定ができ、時間軸をコントロールする力」が個別最適化する力です。

(スライド 65)

現状×目的×時間軸



教育効果を考える上で、抽象的な概念ではありますが、「幸せ」ということについても考えます。ハーバード成人発達研究では人間関係を構築する力が幸福度に有効だったり、日本の研究機関でも自己決定が満足度や幸福感に影響するという話があります。これをカリキュラムの中に入れているというのが、PBLをしている理由にもなります。

学校は様々な観点で環境を整備するということが重要です。

環境はカリキュラム、教具、教員など全てです。

学校は様々な環境を活用し、コンフォートゾーンからグロースゾーンを行き来できるような環境を整備することがポイントです。(スライド 68)。

(スライド 68)

やりたいことのためにやらなければいけない事が習慣化される

挫折や失敗から学べる

プロセスを改善・発展させる

修正が前提で柔軟性、適応能力を高める

感情と事実を分けて相互承認できる



その環境を定義するうえで探究コースは「学習科学」という理論を取り入れています。その他にも成人発達理論、自己調整学習理論、性格的特性ビッグ5などを（スライド 69）、観察やデータポイントに活用しています。

（スライド 69）



先ほど、探究コースは筆記での入試をしないと言いました。ですから入学生の中に一般的な基礎学力に大きな幅があります。多くの高校や大学は入学試験で偏差値がある程度同じ人が集まるシステムになっていますが、社会には様々な人がいるので同じ偏差値レベルで学習をすることで身に着けられない力もあると考えます。また、昔は黒板、教科書、ノートなどの教具から、知識の伝達に限界があったため、致し方ない状況があったかもしれませんが、現代のテクノロジーを活用すればそこはクリアできると思います。

重要なのは個人の伸びしろを画一化しないことです。日本は教育を受ける機会が高いレベルで均等だと思いますが、各校種を卒業する際の教育効果は不公平だと思います。この教育効果を公平にするには、やはり学習を設計している側に責任があるので、前例踏襲ではなくどのように改善していくかを常に考える組織になっているのが重要だと思います。

5 探究コースのビジョン「教室から世界を変える」

探究コースのビジョンは、「卒業した生徒たちが世界を変えること」です（スライド 71）。これからの日本は、少子高齢化などいろいろなことで憂えていますね、でも憂えても仕方がない。ぼくたちの生きてく時代はぼくたちがつくればいい。子どもたちがその時代をつくる。

(スライド 71)

探究コースのVISION



**生きたいように生きる力を持った卒業生が
活き活きと生きている人で溢れる社会を実現させる。**

18歳の偏差値や22歳の就職率で学校などを評価するのではなく、人が育つ環境をそもそも変えないと、社会は変わらない。人が育つ環境を変えるというのは様々な社会課題を解決するのに最も有効だと考えます。しかし、今その環境について、さまざまな課題があります。その課題を解決するのは先生だけでは困難です。

各都道府県でICTの導入率に差があったり、ICT支援員などの配置にも差があります。新学習指導要領への対応にも差があります。予算の組み方や使い方にも差があり、そこには有識者や外部のバックアップが必要です。

学校の職場環境を改善するための情報に、学校現場の方がどうやってアクセスできるのか。もしくは、外部の人がどのようにすれば情報を適切に学校の現場に伝えることができるのか、様々な方が当事者意識をもって解決策を実行することが重要です。

学校に関して、最近はネガティブなニュースばかりが流れており、良い部分はほとんど出ません。社会の空気で叩けるものは叩くみたいな流れから、一部のニュースが「学校」と一括りにされて叩かれます。そんな中、日本の教員の自己効力感はどんどん下がっており、TALIS 2018の報告書では、高い自己効力感を持つ教員の割合は参加国平均の半分ほどに留まっています。そうすると、教員採用試験の倍率も下がり、教育現場を目指す人も減少しています。

その中で、本日皆様にお伝えしたいことはカリキュラムのことよりも、様々な逆境はありますが、いろんなことにチャレンジしながら子どもたちのためにやっているそのモチベーションは絶対に落とさないでください。皆さんには教育改革を乗り越える力がある。それだけは絶対に失って欲しくないです。

教室はこれからの社会をつくる場になると思います。大企業とかイノベーターとか言われている人たちより、重要なのはぼくら教員です。テクノロジーをつくるのも人、企業を成り立たせるのも人、ユニコーンと言われる企業をつくるのも人です。その「人」が育つ環境の大部分が学校教育です。我々がすごく重要です。

皆さんの目の前には悩みや不安が確かにあるかもしれないけれど、ぜひそれと向き合い、それをパワーにして、お互いつながりあって、是非一緒にいろんなチャレンジをしたいと思います。我々は教育を通じて世界を変えられます。教室から世界を変えられる。最後のメッセージはこれ

だけです、皆さんがここにわざわざ来てくれて、お互いに時間（寿命）を使った。だからこそ、今日の機会を、ネガティブなニュースに飲み込まれるのではなくて、もっとポジティブなパワーで世界を変えましょう。今日はどうもありがとうございました（スライド 77）。

（スライド 77）

教育とは「教える」ことではなく「人を育む」ものであり、
「教室」は20年後の社会を創る人を育む場所であると考えます。
よりよい社会創りを担う人に育つための出会いや原体験を、
すべての「教室」で創出できるのは教師です。
その出会いや原体験は子どもが自分の生まれた環境に左右されず、
自らの人生を創り出していく原点になります。

質問タイム 進行:産業能率大学 経営学部 准教授 皆川 雅樹

一皆川 突然登場しましたが、質問担当の産業能率大学皆川です、よろしくお願いします。今から質問をおひとりで10個ぐらいつくってください。ではお願いします。

質問① 充足率約103%とは？

一中原 生徒の充足率です。1学年定員280人×3学年が本校の生徒の定員が100%としたときに、今はやっと103%、定員を超えるくらいの在籍数がいるということです。ぼくが着任したときはそれが60%でした。例えば、100人募集をして60人しか入学者がいなかったです。いまは100人の募集に103人いる状態です。

一皆川 では個人で考えたものをグループで共有していただいて、「これを質問してみよう」というものを、ロイロノートを使って投稿してください。ではまずは質問の共有からお願いします。さて、いっぱい出ております。中原先生に選んでいただきます。

質問② 皆さん気になるのは「評価」だと思います。

一中原 評価の具体例をご説明します。

資質能力を4つの項目勤勉性、グリット、レジリエンス、探究力で設定しています。この項目の特性を教科でアセスメントするものと学習時の様子（トレーニングの要素）で観察し記録するものの2つの要素で整理します。

例えば「話し合い」はどの授業でもおこないますよね。そうするとこれはトレーニングの要素になり、全ての学習活動で観察できます。そして教科はコンテンツですよね。教科の専門性からテーマや事象を解釈し、情報→知識→知恵の変化をレポート等のアウトプットやリフレクション内容から教科担任がアセスメントします。何がコンテンツで身につけられて、何が習慣的な学習（トレーニング）なのか、ここを分けてアセスメントから評価に繋げています。

一皆川 次は、評価・ルーブリック以外の質問から選んでください。

質問③ 教科横断をどうやっているか？

一中原 例えばですが、アウトプットのアイデアがあり、ミーティングのときにそれを提案します。その提案に対して、全ての教科担任が「こういう科目が当てはまる。」「こういう解釈はできるのではないか」とみんなでブレストしながら学習マップに落とし込みます。次にそのマップからアウトプットの期日を決めたスケジュールシートに体系化してPBLを可視化、共有します。

例えばこの「オレンジ」という問題があったときに、このように要素を書き出します。還元率・濃縮など、これはどの専門性かと考えます。

これはぼくら教員のトレーニングになり、教員のクリエイティビティが育めますし、その時間は楽しい時間でもあります。

一皆川 ロイロで、皆さんのお手元でそれぞれの質問を見られると思います。皆さんが出している質問にそれぞれの視点があると思いますので、ぜひどんな視点を持っているのかということをご参考にいただけるといいと思います。Session1 中原健聡先生のご講演でした。あらためて大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

産業能率大学 経営学部 准教授

杉田 一真 先生

学修成果を可視化し、
いかに組織的に教育改革をすすめていくか
～産業能率大学の事例から～

- 1 はじめに ～本学の紹介～
- 2 本校での取り組みの経緯
 - ① 3つの可視化 学修成果の可視化
 - ② 学習行動の可視化
 - ③ 教授行動の可視化
- 3 おわりに

学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改革をすすめていくか

～産業能率大学の事例から～

産業能率大学 経営学部准教授

杉田 一真

1 はじめに ～本学の紹介～

産業能率大学の杉田と申します。よろしくお願いいたします。

私が与えられた時間は正味 12 分間です。先ほど札幌新陽の中原先生から大変内容の濃いご講演をいただきました。教室から世界を変える、内側から外側をどう変えるのか、というお話だったと思います。全くその通りですが、私の話は、とはいえ私たちには外からの要請にも応える義務があると言う内容になります。

外からの要請に応えるということでは、本学が長くこのキャリア教育推進フォーラムの中で、アクティブラーニングの推進に取り組んできたこともその一つです。文部科学省では、現在、アクティブラーニングは「主体的・対話的で深い学び」という言葉で表現されるようになっていますが内容的には同じです。

アクティブラーニングは、成果が問われる時代に入ってきています。量の時代から質の時代へ、アクティブラーニングの成果をどのように発信していくか。大学で言えば IR 活動が重視されるステージに入っていくだろうと考えています（スライド 2）。

アクティブラーニングの質的な向上というのは困難が伴います。これまでも、こちらにいらっしゃる先生方と協働でアクティブラーニングを推進して参りましたが、ここから先はさらに手間がかかります。とても各校が独自で手がけられるようなことではないと思っています。したがって、本学では、先んじてひとつの形をつくり、それを共有し、みなさまに参考にしていただきたいと考えました。

ただ、先生方も日頃お感じになっていらっしゃると思いますが、参考資料というのは多くの場合何の役にも立ちません。3 日もすれば全て忘れてしまいます。大切なのはそれを計画に落とし込み、実行にまで持っていくということです。ところがそこには、大きな壁があります。ここをどう越えるかですが、一人で越えようとしてはいけません。山登りも一緒です。一人で登ってはいけません。みんなで協働して越えていく。今回はこの協働を担ってもらえるパートナーを見つけないという思いで、この講演をさせていただいています。お気軽に声をかけていただき、ぜひ計画と実行までご一緒できればと思っています。

(スライド2)

はじめに ～本学のご紹介

- 2

【アクティブラーニング(AL)の推進】

2020年の将来ビジョンとして「実践的なカリキュラムと学習者中心の教育内容が高い評価を得ていること」を掲げて教育改革を進め、早い段階からアクティブラーニング(AL)を推進してきた。

これまでの教育改革において、特にアクティブラーニングを推進し、経済産業省、日本私立大学協会、日本高等教育開発協会などから先進的な取組みとして評価いただいた。

	取り組み例
ALをテーマとしたFDの実施	・アクティブラーニングをテーマにFDを実施。 ・他大学の事例紹介などにとどまらず、ALにおける具体的な教授法等について模範講義を通じて浸透を図る。
初年次教育におけるALの実践	・初年次のコア科目である「基礎ゼミ」において、経営学部全20クラスの担当教員がALを実践。 ・ALの質向上を目的にSA(Student Assistant)を経営学部の基礎ゼミ全クラスに配置。
PBL科目の設置	・企業の具体的な経営課題の解決に取り組むPBL科目を初年次および上級学年に設置。
他大学と共同でPBL型ビジネスコンテストを実施	・他大生との交流を通じて本学学生の成長を促進するとともに、大学として他大学のAL手法を積極的に取り込むことを意図して、立教大学経営学部とPBL型ビジネスコンテストを実施。
理論と実践を組合せたカリキュラム編成	・知識の習得と、技能・態度の向上を同時に達成するため、理論科目と実習科目を組み合わせて、学生の能力を総合的に伸ばすカリキュラムを編成。

【本学のALを評価いただいた例】

- ・河合塾編纂「『深い学び』に学ぶアクティブラーニング」にて、4年間を通じたAL、ALの設計と導入において優れた取組みを行っている大学として紹介された。



- ・経済産業省主催「社会人基礎力を育成する授業30選」に本学基礎ゼミが選出された。
- ・日本私立大学協会・教育学術新聞「教授法が大学を変える」(2015年度版)『変化するアクティブラーニング』で、基礎ゼミⅠ・Ⅱが巻頭でピックアップされた。
- ・基礎ゼミⅠ・Ⅱが日本高等教育開発協会「JAED Good Teaching Award」を受賞した(2016年3月)。

学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改革を進めているか。～立教大学改革の軌跡から

2 本校での取り組みの経緯

① 3つの可視化

学修成果の可視化についてですが、実は本学はひとつの形をつくるために文科省から補助金をいただいています。本学の取り組みは大学教育再生加速プログラム(AP)に採択されていますので、私たちにはその成果を広く社会に発信・共有する義務があります。

APでのお題は、アクティブラーニングの組織的な推進とともに、その成果を外部に発信するスキームをつくれということでした。そこで取り組みを始めたのですが、すぐにあることに気がつきました。それはアクティブラーニングの中心は授業改善ですが、この授業改善と学修成果の間には飛躍があるということです。

授業改善と学修成果の可視化を結びつけるためには、学生の学習行動と教員の教授行動も可視化しなければならないことに気づいたわけです。つまり、①学修成果の可視化、②学習行動の可視化、③教授行動の可視化、の3つをつなげることで、実の伴った学修成果の可視化が実現できると我々は考えました。もうこれだけで今日のお話は終わってもいいくらいですが、一つずつ見ていきましょう(スライド3、4)。

(スライド 3)

1. 取組みの経緯

- 3

【大学教育再生加速プログラム (AP)】

平成26年大学教育再生加速プログラム(AP)採択を機に、科目担当者による授業改善を中心に据えつつ、いかに組織的にアクティブラーニングを深化させていくかについて取組みを始めた。その過程で、改めて学修成果の可視化に取り組むことになった。



大学教育再生加速プログラム(AP)

- (1) 教育方法の改善
- (2) 教育プログラムの改善
- (3) 学習支援の強化
- (4) 学修成果の多面的把握
- (5) 高大接続の強化
- (6) 事業成果の三方発信 (大学、高校、社会人)

【取組概要】

- ・学修成果の可視化
- ・授業改善
- ・組織的なアクティブラーニングの深化 (ディープアクティブラーニング)

「学修成果を可視化し、いかに組織的にアクティブラーニングを深化させるか」を課題とする取組から

(スライド 4)

2. 3つの可視化

- 4

【3つの可視化】

①学修成果の可視化に取り組むはじめてすぐに、授業改善 (Action)と学修成果 (Outcome)を結びつけるためには、②学生の学習行動、③教員の教授行動も可視化しなければならないことに気が付いた。結果として以下の3つの可視化に取り組むことになった。



「学修成果を可視化し、いかに組織的にアクティブラーニングを深化させるか」を課題とする取組から

まず①学修成果についてですが、先ほど中原先生は「主観でいいんです」とおっしゃいました。私たちも同意します。ですが客観も必要です。

かつ、学生だけではなくて卒業生もいます。さらに就職先も大切なステークホルダーです。ここを立体的に可視化することが大切だということに気がつきました。

まず客観的な学修成果の測定として、GPAに加えてPROGテストを毎年実施しています。経年でリテラシーとコンピテンシーの変化を測定して、GPA、リテラシー、コンピテンシーの三位一体で学修成果を可視化する取り組みです（スライド6）。

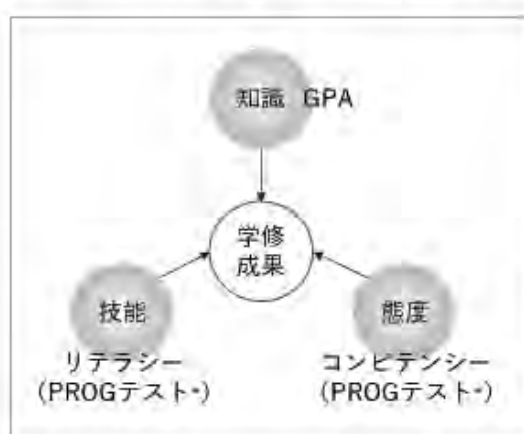
（スライド6）

2. 3つの可視化 (1)学修成果

- 6

【GPA + 技能・態度】

GPAに偏っていた学修成果の把握を、知識・技能・態度の3側面からの把握に改め、学生に対する総合的な学習指導を可能にした。



*PROGテスト
Progress Report on Generic Skills
テストの略。学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発した社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（ジェネリックスキル）を測定・育成するためのアセスメントプログラム。

しかし、これだけでは立体的とは言えません。そこで私たちは卒業生調査も行うことにしました。卒業後に学生たちに調査などをお願いすることはとても大変なのですが、なんとか業務の一環として取り組んでいただきました（スライド7）。

さらに就職先の調査もおこないました（スライド8）。これは就職先が卒業生をどのように評価しているかという調査です。これは高大接続においても抜け落ちている視点かなと思っています。つまり、高校が自分たちの教育の成果を可視化する場合には、大学側が自分たちが送り出した卒業生をどのように見ているのかという点も重要ではないかということです。それと同様に大学でも就職先が卒業生をどのように見ているのかは重要で、そこにはレイヤーを超えた気づきが生まれるのではないかと思います。

(スライド7)

2. 3つの可視化 (1)学修成果

- 7

【卒業生調査】

卒業生に対して①PROGテスト ②アンケート調査 ③ヒアリング調査を実施した。



学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改善を進めていくかー卒業生三大学の集約から

(スライド8)

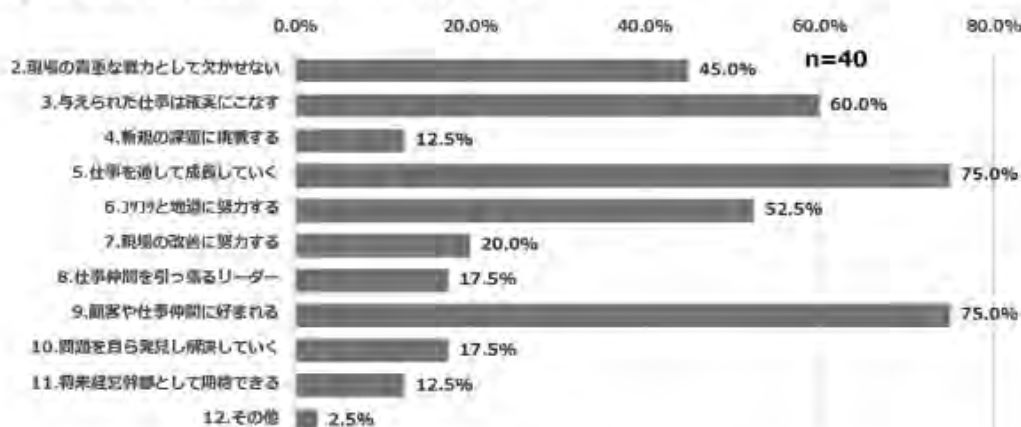
2. 3つの可視化 (1)学修成果

- 8

【就職先調査】

卒業生の主な就職先に①アンケート調査 ②ヒアリング調査を実施した。

Q. 本学の卒業生についてのイメージ (複数回答可)



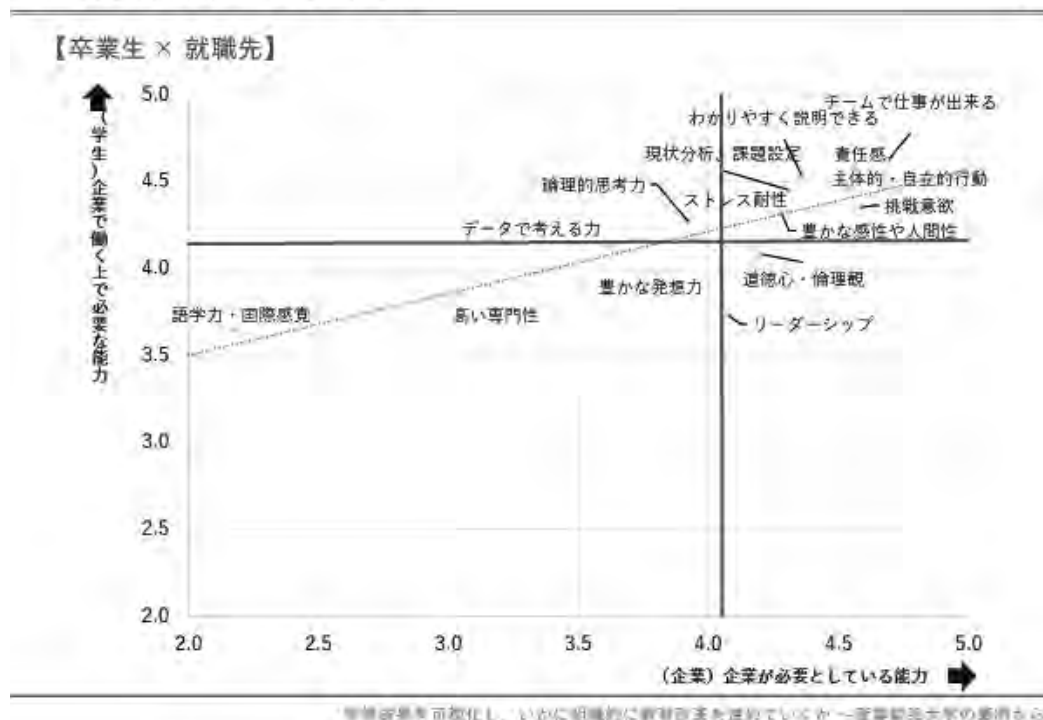
学修成果を可視化し、いかに組織的に教育改善を進めていくかー卒業生三大学の集約から

企業に対してはアンケート調査だけでなく、ヒアリング調査も行っています。そして卒業生調査と就職先調査の結果を対比すると面白いことがわかってきました（スライド9）。例えば就職先では今、「リーダーシップ」がキーワードになっていたりするのですが、本学の卒業生はリーダーシップよりもまず自分の仕事をこなすことに意識が向いていることがわかりました。学生時代もあまりリーダーシップを意識せずに卒業していきます。そうすると、おそらく長い目でみるとミスマッチが起きてしまいます。このようなミスマッチの芽を摘んでいくためには、リーダーシップや計画立案能力を大学の教育中で育成していくことが重要になるとの気づきを得ました。

（スライド9）

2. 3つの可視化 (1) 学修成果

- 9



そこで、本学では全科目の教育を通じて、どのようにリーダーシップと計画立案能力を育めばよいのかを、小グループで検討し、次年度計画に落とし込もうとしています。このようにウォッチがあってファクトが出てくると動きやすい。かつその指摘がピンポイントなので、リーダーシップをいかに育めば良いのか、各科目にどう落とし込んでいくのかが、かなり具体的な話になります。そうすると成果が出やすくなってきます。

②学習行動の視覚化

次に②学習行動の可視化についてです。以前はデータが取りにくかったのですが、現在はITを用いることができます。この変化はビッグチャンスだと思います。例えば、授業外学習時間について、実は学生本人もどのくらい学習しているか把握していません。大学も認識していません。ここを自己認識してもらおうということで、単純に「どれくらい毎日勉強しましたか」「どれくらいのリーディング量をこなしましたか」「いくらライティングしましたか」をインプットしてもら

うようにしました。この取組みは、当初、大学主体で始めたのですが、そのうちに学生の気づきの方が大きいということがわかってきました（スライド 11）。

もちろん大学としても、こうした学習行動データを見て、科目間に差があるとか、学習計画との差がある点などを認識し、それを調整することになります。その根拠となるファクトになっていきます。

（スライド 11）

2. 3つの可視化 (2) 学習行動

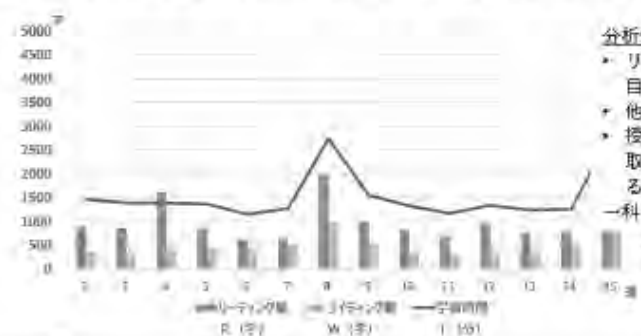
- 11

【授業外学習時間・リーディング量・ライティング量】

授業外期間	出席数 (人)	出席率 (%)	出席 週	全習時間 T (分)	リーディング量 R (字)	ライティング量 W (字)	一冊予習に費やした項目									
							1	2	3	4	5	6	7	8		
第1～2週目	65	80%	2	52.7	913	363	50	10	29		1	1			5	
第2～3週目	63	76%	3	50.0	856	333	43	10	19	1	1				3	
第3～4週目	72	87%	4	50.0	1516	590	43	18	22	1	1	1	1	7		
第4～5週目	64	77%	5	49.2	838	444	44	8	21					4		
第5～6週目	66	80%	6	41.4	618	406	35	9	13	1		2	1	6		
第6～7週目	67	81%	7	45.7	641	521	31	12	16			3		5		
第7～8週目	69	83%	8	48.7	1302	591	43	10	23	1	1	18	2	3		
第8～9週目	65	78%	9	55.8	999	528	49	12	22	1		4		2		
第9～10週目	66	80%	10	47.7	825	338	35	15	19					1		
第10～11週目	69	83%	11	42.7	710	315	47	15	9			1		6		
第11～12週目	61	73%	12	48.2	966	389	43	11	9	2			1	5		
第12～13週目	60	72%	13	44.5	754	363	41	13	9	1	1	2		6		
第13～14週目	60	83%	14	46.2	799	501	44	13	15	4	1			3		
第14～15週目	33	40%	15	101.8	1564	1035	23	7	8			1		1		
計	63.6	77%		55.2	1011.9	498.4	54%	15%	21%	1%	1%	3%	0%	5%		

調査方法

- ・ 担当教員から
入力を強く依頼
- ・ 学生自身が入力



分析例

- ・ リーディング量、ライティング量は概ね目標を上回っている。
- ・ 他授業外学習時間は目標を下回っている。
- ・ 授業外学習課題に対して学生が熟考して取り組んでいない？短時間でこなしている？

→ 科目担当者が改善策を検討

学習成果を可視化し、いかに組織的に学習意欲を高めたいか。授業外学習時間の重要性を

例えば、授業外学習（スライド 12）については、AP の採択を受けて以降、意識的にその伸長に努めてきました。その結果、調査してみると グラフにあるように劇的に授業外学習時間が伸びていることがわかりました。不思議なことに、一旦伸びると減りません。どうしてでしょうか。

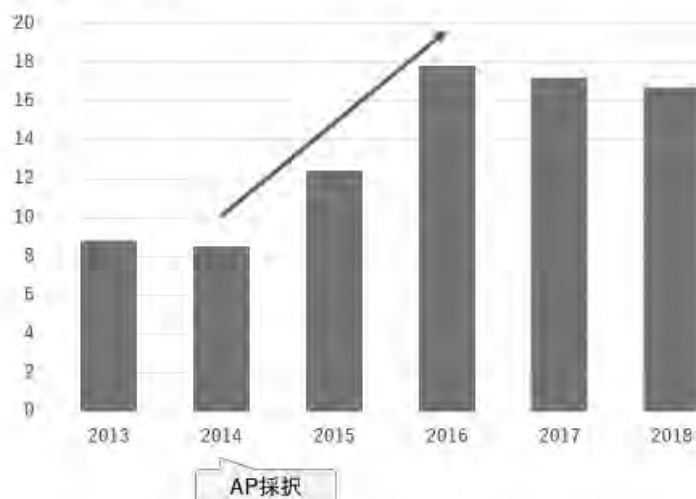
まず授業外学習を強化すると、「産業能率大学はきつい」という評判が立ちます。入試部門からは怒られます。しかしここは我慢のしどころです。ここで我慢をすると、入学してくる学生たちはきついのが当たり前だと思って入学してきます。そうすると出口の姿も変わります。これは一時的痛みです。これによって学習行動は大きく変化しました。教授行動が変わったから学習行動が変わったわけです。

(スライド 12)

2. 3つの可視化 (2) 学習行動

- 12

【授業外学習時間の推移】



学習成果を可視化し、いかに組織的に教育改善を進めているか～授業改善モデルの発展から

③教授行動の可視化

では③教授行動の何が変わったのか。それは評価です。「授業外学習を評価してください」と先生方をお願いしました (スライド 14)。必ず科目の成績評価において、20 パーセントは授業外の学習を評価してくださいと。

(スライド 14)

3. 組織的なALの深化 / 3つの可視化 (3) 教授行動

- 14

【PDCAサイクルに沿った改善】



評価方法	割合	評価のポイント
授業出席	20%	授業中の積極的な発言など態度も含めて評価する
授業外学習	20%	授業外学習で定められたテーマに毎回取り組んだか、またその達成レベルで評価する
小テスト	10%	各回の講義で説明している概念の理解度を確認する
提出課題	20%	～についての情報収集・分析・改善提案力を評価する
定期試験	30%	実施する。～に関する理解度と、事例に対する考察力を確認する

学習成果を可視化し、いかに組織的に教育改善を進めているか～授業改善モデルの発展から

授業外学習を評価するとなると、レポートを書かせるなり、小テストをするなり、可視化の取り組みが必要となってきます。その可視化ツールを開発することによって、授業外学習の質が上がります。単に今までは授業の振り返りのミニレポートを書かせていただけでした。しかし、それはそれで毎週採点するのが大変です。だったら、もっと実を伴ったものにしたいと先生方は考えてくださるようになります。

それからもう1つ、授業を可視化するといっても先生方は自分の授業をビデオに撮って見るというのはなかなか難しい。この点は組織がサポートする必要があります。全授業をモニタリングするのは難しいので、サンプリング調査という形になりましたが、1つの授業の中で、先生方がどれくらいの時間レクチャーをされていて、どれくらいの時間ワークされていて、そのワークの中で個人ワークがどれくらいで、グループワークがどれくらいかを測定していきました。そうすると「自分はグループワークが中心の授業をおこなっています」という先生が、実はグループワークの時間が少なくてレクチャーの時間が長かったりしました。これはありがたいですが、自分では分からないのです。授業改善を、客観データをもとに図っていくことは非常に有益であったと考えています。測定シートなどは全て開発が完了しておりますので、ご興味があれば高校に伺って測定させていただくことが可能です。

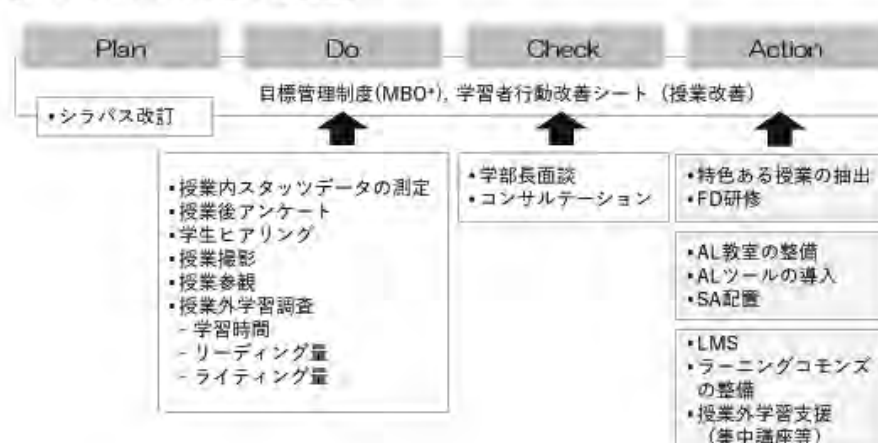
問題は、測定データをいかに活用していくかです。産業能率大学では半期に一度、専任教員は全員、学部長面談を受けることになっています。その際に、このデータが面談資料として活用されます。ただ、学部長から授業をどのように改善すべきかを言われることはありません。先生の方から、自分の授業のデータをこう評価しました、そしてこう改善したいということを宣言してもらっています（スライド21）。

（スライド21）

3. 組織的なALの深化 / 3つの可視化 (3) 教授行動

- 21

【PDCAサイクルに沿った改善】



先生方からファシリティの問題をご指摘いただいたり、他の優れた先生の授業見学をしたい等のご要望をいただいたりします。そうした要望を受けつつ、PDCA を回していくための傾聴の役割を学部長に務めていただいています。それも、単に話を聞くだけでは、実効性が伴わないおそれがありますので、先生方には「学習者行動改善シート」に、どのような狙いで授業をおこなったのか、測定結果に対してどのように自己評価したのか、今後どのような改善をしていくのか、をまとめてもらっています。私も当然書いているわけですが、これが意外に使えます。他の先生方の書いたシートを見るチャンスもありますし、他の先生の授業のビデオを授業研究という形で見ることもできます。授業研究は高校の先生方はよくやられているかもしれませんが、大学ではこれまであまりやられていませんでしたので、先生方に評判がとても良かったです。(スライド 19、20)。

(スライド 19)

3. 組織的なALの深化 / 3つの可視化 (3) 教授行動

- 19

年度	学期	キャンパス	開講日	曜日	時間	教室	担当教員名	科目名
2019	前期	自由が丘	2019年 7月8日	火	4	G230	杉田 一真	会社法入門

1. 今回の授業のねらい

今回の授業のねらいは、学生が以下の理解、及び態度に資するよう授業を展開すること

- 「独占禁止法(真意を偽装しての禁止)」の禁止内容の禁止について、立法趣旨、基本的な法理、判例・実例に関する知識を習得している。
- ブランド内競争、ブランド間競争の概念を理解している。
- 企業競争と競争の関係について理解している。
- 企業が競争を促す際に、競争・競争すべき点を理解している。
- 法律を学習する意義を理解し、さらなる学習の必要性を認識している。

2. 学習者の興味を喚起する工夫

- 授業冒頭に小テストを行い、授業内容を挙げて自ら理解を確かめ、所習を訂正してもらう。
- 授業内容に関連する最近のニュースを事例として紹介する。

3. 学習者の集中力を維持・発展する工夫

- 20分に1度(計5回以上)はワーク(個人/グループ)を入れる。
- 15分に1度(計4回以上)はクラス全体に対して質問を投げかけ、解答や理由を説明させる。
- 講義、議論の経緯等を念頭として行う。

4. 学習者の理解を促し、知識定着を促進する工夫

- 講義、議論等を理解する問いかけをする。
- 授業の最後に確認テストをオンラインで実施し、すぐに採点をを行い、所定基準の未十分点を補ってもらう。

5. 学習者の発展学習に向けた意欲を向上する工夫

- 事例に基づく発展問題に取り組みを促し、さらなる発展学習・学習が必要であることを認識してもらう。

6. その他、学習者の主体的な学習を促す工夫

- 自由な意見を許す(必ずクラスルールを周知する)。
- 学生の意見を尊重しない。
- 学生の思考を助ける私語等の改善行動の注意を喚起する。

7. 学習状況の把握および活用方法

- 授業中に、@テストの開始、ワークシートの記入を行い、授業終了後に確認テストを算出して、学習者の理解度を確かめる。
- 授業が学習として、授業で獲得した知識を固めておいてもらう(ワークシート)を作成する機会を提示する。

8. スタッフ評価データ等に関する自己評価

	A	B	C
評価点① 出席率		●	
評価点② 学生分析			●
評価点③ 私語・私語			●
評価点④ 教員のホスピタリティ	●		
評価点⑤ 教員行動			●
評価点⑥ 利用ツール			●
評価点⑦ 学習者行動	●		
評価点⑧ ① 出席率	●		
評価点⑨ ② 集中力	●		
評価点⑩ ③ わかりやすさ	●		
評価点⑪ ④ 理解度			●
評価点⑫ ⑤ 気づき	●		
評価点⑬ ⑥ 授業内容			●
評価点⑭ ⑦ フラッシュカード	●		
評価点⑮ ⑧ 進行状況	●		
評価点⑯ ⑨ 教員態度	●		
評価点⑰ ⑩ 感想指導	●		

「学習成果を可視化し、いかに組織的に学習者を支援しているか」を定量的・定性的に把握する

(スライド 20)

3. 組織的なALの深化 / 3つの可視化 (3)教授行動

- 20

学習者行動改善シート②

年次	学部	専攻コース	実施日	曜日	時間	教室	担当教員名	科目名
2019	環境	自由が丘	2019年 7月8日	火	4	523	松岡 一高	会社入門

【学修目標】
 企業活動におけるリーダーの役割を理解し、チームで取り組む課題を解決するための能力を育成する。
 ・社会活動におけるリーダーの役割を理解し、チームで取り組む課題を解決するための能力を育成する。
 ・社会活動におけるリーダーの役割を理解し、チームで取り組む課題を解決するための能力を育成する。

9. 授業および学習者行動の改善アイデア

改善アイデア	改善が期待される理由
スライドを印刷して配布するのではなく、学生がより理解しやすいように整理したレジュメを配布する。	☐ 出席率 ☐ 学生評価 ☐ 教員評価 (学習者行動アンケート項目) ☐ 興味 ☐ 理解 ☒ 内容のわかりやすさ ☐ 難易度 ☐ 気づき ☐ 授業内容 ☐ 学習意欲 ☐ 進捗状況 ☐ 参加意欲 ☐ 授業評価
教壇を歩き回り質問応答を行う。	☐ 出席率 ☐ 学生評価 ☐ 教員評価 (学習者行動アンケート項目) ☐ 興味 ☐ 理解 ☐ 内容のわかりやすさ ☐ 難易度 ☐ 気づき ☐ 授業内容 ☒ 学習意欲 ☐ 進捗状況 ☐ 参加意欲 ☐ 授業評価
	☐ 出席率 ☐ 学生評価 ☐ 教員評価 (学習者行動アンケート項目) ☐ 興味 ☐ 理解 ☐ 内容のわかりやすさ ☐ 難易度 ☐ 気づき ☐ 授業内容 ☐ 学習意欲 ☐ 進捗状況 ☐ 参加意欲 ☐ 授業評価
	☐ 出席率 ☐ 学生評価 ☐ 教員評価 (学習者行動アンケート項目) ☐ 興味 ☐ 理解 ☐ 内容のわかりやすさ ☐ 難易度 ☐ 気づき ☐ 授業内容 ☐ 学習意欲 ☐ 進捗状況 ☐ 参加意欲 ☐ 授業評価

10. 授業および学習者行動の改善に必要なサポート

・30分程度は、授業時間外に、質問や不明点を解消できるように、必要に応じて、教員が教壇を歩き回り質問応答を行う。
 ・30分程度は、授業時間外に、質問や不明点を解消できるように、必要に応じて、教員が教壇を歩き回り質問応答を行う。

11. コンサルテーションに対する要望

・本学での授業改善に参考になりそうな科目・担当教員を紹介ください。可能であれば授業参観をお願いします。
 ・授業参観のスケジュールの調整・科目・担当教員のご紹介ください。授業参観のスケジュールの調整・科目・担当教員のご紹介ください。

3 おわりに

学修成果の可視化とアクティブラーニングの深化は連動しています。この両者の連動をいかに深めていくかのポイントは4つだと思います（スライド 22）。

まず1つは、可視化は多面的・立体的に行うこと。これは困難も伴いますから外部の協力も得ながら進めるべきだと思います。

2つ目は、調査は点ではなく線でおこなうこと。恒常的にルーティン業務に含めること。そうしないと負担感が出てしまいます。

3つ目は分析です。ただ、分析に凝り始めると際限がありません。これは、他で確立された分析手法を借用しても良いかと思います。そうすれば他との比較も可能になります。

4つ目は活用です。活用は組織的におこなう必要がありますが、これは内部の組織力の問題が大きく影響します。

以上、駆け足になりましたが、ご清聴いただきありがとうございました。

(スライド 22)

おわりに

- 22

【学修成果の可視化と組織的なALの深化のポイント】

- ① 可視化は多面的に（学生/卒業生/就職先, 主観/客観）
- ② 調査は恒常的に（ルーティン業務に含める）
- ③ 分析は簡便に（一定の分析手法を継続する）
- ④ 活用は組織的に（科目担当者会議, 改善シート, MBOなど）

	調査項目・手法	活用
学生	- 授業出席状況, 課題提出状況, LMS利用状況 - 授業外学習 （時間, リーディング量, ライティング量） - 学生生活アンケート, ヒアリング - GPA, 技能・態度	- 学生面談 - 科目担当者会議
卒業生	- アンケート, ヒアリング - 技能・態度	FD研修 （小グループによる プログラム改善）
就職先	アンケート, ヒアリング	
教員	- 授業内スタッツデータ - 授業評価	- 学部長面談 - 授業評価コメント

学修成果を可視化し、さらに組織的に調査結果を活用しているため、授業改善が実現している

カリキュラム・マネジメントの視点から探究を考える～PART2～

角川ドワンゴ学園 N 高等学校 副校長

上木原 孝伸 先生

未来を予感させる新たな学びの姿

1 N 高等学校の概要

①N 高等学校全体図

②Basic Program

③Advanced Program

④コミュニケーション

2 N 高等学校通学コース

①実践型プロジェクト学習

②教員は生徒の夢の発見と実現に全力を注ぐ

3 N 高等学校の課題と対策

4 N 中等部

5 文字から電話へ、また文字へ

質問タイム (ロイロノートを活用した質疑応答)

未来を予感させる新たな学びの姿

角川ドワンゴ学園 N 高等学校 副校長

上木原 孝伸

1 N 高等学校の概要

ここに N 高等学校をご存知の方はいらっしゃいますか？ 3 年前は全然手が上がらなかったのですが、大変多くの方に知っていただけるようになりました。ただ中身の部分はまだまだ誤解されている部分もあるかと思いますが、できるだけ真面目に、やっている内容をお届けさせていただきたいと思います。

まず概要ですが、学校名は学校法人角川ドワンゴ学園 N 高等学校と言います。角川とドワンゴが元になってつくられている学校です。単位制通信課程という仕組みを活用して、未来の学校をつくろうというのが我々のテーマでした。

今、話題の普通科ですが、N 高等学校も普通科です。いろんな枠の中で高校教育ができるということなんです。

本校所在地は沖縄県うるま市にあります。那覇市から車で 2 時間ぐらい行った果ての島に、伊計本校があります。元々は伊計小学校・中学校があったのですが、市町村合併で廃校になり、その廃校跡地を我々の方で使わせていただいています。開校は 2016 年 4 月で、ようやく一期生が先日卒業致しました。今は開校 4 年目の学校です。生徒数は開校当時 1,574 名でスタートしました（スライド 3）。

（スライド 3）



私は開校前から携わっていましたが、その後生徒は徐々に増えていき、現在 7 月時点で 10,695 名が N 高等学校の在籍生徒数になります。ちょっとだけ計算をしてみました。今、日本の高校生は 297 人に 1 人が N 高の生徒だということになります。驚くには微妙な数ですね。た

だ責任は重いなと思っています。N高をこれだけの数の生徒が選んでくれているわけですから、我々はどう責任を果たしていくのか非常に問われていると思っています。

どんな子がN高に来ているのか、志望動機をそのまま抜粋したものをご覧に入れます。

スライド4の上の生徒は中3のときに自分で会社をつくりました。「その会社を大きくするのに時間がないので、N高を使いながらもっと大きくしていきたいです」という生徒です。

スライド4の下の子は私立の中高一貫校に通っていたけれども、プログラミングをもっともっとやりたいと言うので、そこに時間を費やすためにN高を選択したということです。この生徒は高3の秋に開催された国際情報オリンピックで、銅メダルを獲得して念願の海外大学へ進学を決めています。

(スライド4)

普通の学校の枠にはまらない生徒
私は、2015年5月に「株式会社クリエイティブファンタジープロダクションズ」という会社を設立して、さまざまな活動などをさせていただいているため、御校の「自由さ」と「いつでも勉強ができる」というスタイルが私に合うと思っています。
私は中高一貫校に所属しているため、無条件で高校に内部進学することができたのですが、拘束時間は無駄な部分が多いように感じていて、この時間を自分の興味のある分野での勉強・活動に使いたいと考えていました。将来はMassachusetts Institute of Technology, Stanford Universityといったアメリカの名門大学に入学することを目標にしています。大学卒業後は日本に戻るかはわかりませんが、IT系の企業で(セキュリティ)エンジニアとして働くか、研究職に就くことを考えています。

こんな話をするとフィギュアスケートの紀平梨花さんや、この前ウィンブルドンのジュニアで優勝した望月慎太郎くんもN高校の生徒ですが、そういったやりたいことが決まっているとんがった子が集まってくる高校というイメージを持たれやすいのですが、実はN高に来る生徒のほとんどがこんな子です。「自分の夢をN高校だったら見つけられそう。それでN高校を選びました」と。

この後、具体的にご紹介しますがN高はたくさんの課外授業を経験してもらうことで、自分の夢を見つけてもらう、そういうことに重きを置いている学校です。

それからこういう生徒もいます。「中学になってから学校の在り方や塾での勉強方法に疑問を抱いてプログラマーになりたいと思ってずっと夢中でやっていたら、気づいたら学校に行ってなかった」。

またこういうタイプの生徒もいます。私は全国を回りながらいろんな中3と面談をしていますが、ときには「知識はスマートフォンですぐ手に入る時代に、なぜこれだけのことを覚えてやらなければならないのかわからない」と泣きながら訴えてくる子もいます。私は「いや中学校までの義務教育の内容は覚えた方がいいよ」と冷静に答えていますし、「それは逃げない方がいいよ。でも高校の日本史の教科書が重箱の隅をつつくような知識を使って1点、2点を争うようになっているのはちょっとおかしいのは確かだよ」という話は事実として話しています。

要は勘の良い子どもたちほど気づいちゃったりしているんですよね。「このままの勉強で本当にいいのかな」と。「不安だな」と思って N 高校に通ってくれる生徒、そういう生徒が実は増えていて、それが 10,000 人という数字に表れてきているのかなと思っています。

では、一人女子生徒が報道ステーションで紹介されましたのでその映像をご覧ください。

（映像ナレーション）

高校卒業に必要な授業をいつでもどこでも好きな時間にネットで受けられるんです。パソコンがなくてもスマホで大丈夫。通学時間もなくて自由に時間を使えるんですね。

（3 年生の富樫まりんさん の話）

NPO 団体のオフィスに行くんですけども、投資家の後藤さんという方と話すという普通の高校生では体験できないようなことを、たくさんさせてもらっているなと思います。

上木原先生コメント

高校生だと言うと結構入れてくれるんですよね。こういうビジネスマンの世界は。

（ナレーション）

自分より年上のたくさんの人と会う機会を大切にしているまりんさん。午前中からいろんな場所へ。授業は移動の途中などちょっとした空き時間にカフェで受けます。小テストにもバッチリ合格。

上木原先生コメント

小テストに正解しないと次の動画が見られないようにしてあります。

（映像 ナレーション）

スケジュール帳には予定がびっしり。

（まりんさん）

ひどい時には 1 日 4 回、朝昼夕晩みたいな形で人と会っているのです。

（インタビュアー）

そんなに人と会って疲れませんか？

（まりんさん）

疲れません、人と会うのが好きで逆にパワーをもらえるんです。

（上木原先生コメント）

たまに私にも会いに来てくれます。

(ナレーション)

中学3年の夏から2年間、海外の学校で過ごしたまりさん。

(まりんさん)

ニュージーランドの高校は個性を生かしてくれると言うか自由に時間を使える。自分で時間割を組み立てる学校で。日本の高校に入学するいうときに、やはり自分の時間を有効に使える高校に行きたいというのがあって。

(ナレーション)

経験した個性を伸ばす教育を日本で広めたいそうです。

(まりんさん)

みんなが自分のやりたいことを見つけられる幼稚園にしたいなーと思っています。ネットの高校だからこそネットじゃない部分で自分で全部やっていかなければならないですね、誰もフォローしてくれないんですよ。

自分で動かなければ何も始まらないという状況下でだからこそ、今、アクティブだったんだろうなと思います。本当に充実しています今は。

① N 高等学校全体図

以上のような生徒がN高に通っています。N高の全体図を表にしました(スライド8)。

(スライド8)

N High School 全体図			
	Basic Program	Advanced Program	コミュニケーション
ネット	ネット授業 レポート	N予備校 ◆大学受験 ◆中学復習 ◆プログラミング ◆クリエイティブ◆エンタメ	Slack ネット部活 ネット遠足
リアル	スクーリング	職業体験 スタンフォードプログラム N高 通学コース Vantan	ニコニコ 超会議 ニコニコ 町会議 など

一番左の「BASIC Program」というのが高校を卒業するために最低限に必要な勉強です。ここだけあればN高は卒業できますが、我々がメインに据えているのは「Advanced Program」。高校を卒業してから自分たちの生きる糧になっていくような物を課外授業としてネットとリアル

でたくさん揃えています。一番右の「コミュニケーション」はひとことで言うと青春です。高校時代の青春という部分を、ネットとリアルを組み合わせでどうつくっていくか、をこの6コマに当てはめてこれから説明していきたいと思います。

②Basic Program

まずスライド9の一番左の「Basic Program」ですが、映像授業を見ながら確認テストを解いてレポートを書くサイクルを、繰り返しながらやっていきます。ネットで提出ですので記号問題とか語句問題は全部自動採点されるようになっていて、教員は記述問題だけしっかりチェックするという形になっています。

それから「専用マイページ」（スライド10）を見ながら生徒は進めていきますが、先ほど、まりんさんが「誰もフォローはしてくれない」と言っていたのですが、実はまりんさんは自分でやるからフォローをしていません。でもそんなに簡単にみんな自分ではやらないんです。なので我々は生徒がログインしている時間などは全て分かりますから、その時間を見ながら「昨日よく頑張った」とか「まだやれてないね。今すぐこの電話口でログインしてごらん」とか、そこまでのことを担任が一人ひとりをフォローしながらやっているのが現状です。

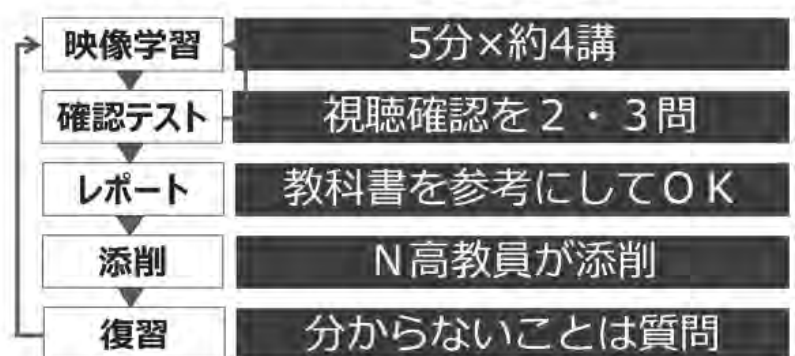
卒業率は98.1%ということで、非常に頑張ってくれていると思います。スクーリングですが、沖縄の伊計本校に5日間スクーリングに来てくれます。年間の授業は映像で生徒たちは受けていますから、教員にとってここでの授業は一期一会の真剣勝負になります。

生徒が家に帰ってからも「英語をもっと勉強したいな」とか「数学って面白いな」と思えるような授業を展開してください」と先生方をお願いしています。

それから沖縄にはどうしても行けないという生徒のために、全国各地にスクーリング会場（8エリア、年間5日間程度）を設置しています。

（スライド9）

Basic Program（高卒資格のための授業）



(スライド 10)



③Advanced Program

続いて「Advanced program」（スライド 15）です、これは映像があるのでご覧ください

(スライド 15)



(映像 ナレーション)

個性を伸ばす学習プログラム。

(先生の声)

- 最高の教育は機会を与えること、チャンスを与えることなんです。
- 日本の 15 歳というのは世界で一番勉強ができるにもかかわらず、自分は何もできないと思っている。このギャップがですね、なんとか埋めていきたいなと。
- いかにして個性みたいなものを出すか。自分なりのスタイルを築き上げるかとか、そういうことを中心にやる時代になってくるのかなぁと思っています。

（ナレーション）

磨き育てることで大きな強みとなる個性。

N 高校は生徒一人一人が個性を伸ばしていける環境でありたいと考えています。その思いから生まれた将来につながる多彩な経験を積める場がアドバンスプログラムです。

「N 予備校」「職業体験」「国際教育プログラム」によってアドバンスプログラムは構成されています。

「N 予備校」ではその道のプロフェッショナルから実践的な学びを得ることができる、多種多様な学習コースを取り揃えています。プログラミング授業、小説創作授業、大学受験対策事業など N 高校だからこそ実現できる充実した学習プログラムを N 高生は 無料で受講する事が出来ます。

（生徒の声）

- コメントが ダーッと 流れて、普通に教室で受けているような感じで、みんなでひとつの答えを出し合ったりとか。
- 予備校の先生方は生放送でいつも教えてくれて、普通の高校生が塾とか予備校に入って受けている授業を家で受けられる。
- 英語が本当に苦手で「この単語何ですか？」とかくだらない質問ばかりしているのですが、その質問にもちゃんと答えてくれるので。
- ゲームサウンドとかすごい参考になって動画の中で説明されていてそれがすごくわかりやすいので。
- プログラマーになりたいなと思っていたので、しっかりと学んで職につなげたいなと思ってます。

（ナレーション）

職業体験では、その仕事のリアルを感じることができることに重点を置いたさまざまなプランが用意されています。「イカ釣り」「刀鍛冶」など、普段、関わることができない世界を日本各地に泊まり込みながら直接体験することができます。

（生徒の声）

- まずリアルな体験ができることが嬉しくて。
- 今までは大人がやっているという印象が強かったのですが、自分にもできることがあるんだって気づくことが出来ました。
- プロの方につきっきりで教えていただいて、自分の成長を実感できたのが嬉しかったです。
- 「こういうのって楽しかった」「こういうのって考えさせられた」というふうに、自分から伝えることができるようになった。成長してるなと感じます。

（ナレーション）

スタンフォード大学で行われている国際教育プログラムへの参加者を、毎年募集しています。2 週間世界中の生徒達と共に授業を受け交流を深めることができます。

（生徒の声）

● スタンフォード大学は本当に面白くて、灘高と慶応とN高とで合わせて10名で行ったのですが、そこで新しい友達ができたり、他の各国から10名ぐらいずつ来ていたので、行ったことのない国にも友達ができたりとか、そういう人のつながりができたのも行ってよかったと思います。

（母親の声）

● 行きたいって言ったことが嬉しくてドキドキしながら出しましたが、「すごく良かったって」帰ってきて、本当にそこからますます行動的になったので、行かせて良かったです。

（ナレーション）

これらのアドバンスプログラムは、受講しなくても卒業可能な、必須ではない学習プログラムです。しかし私たちは、このプラスアルファの学びこそが、将来自分らしく輝くために必要な学びだと考えています。

見ていただいたこれらのプログラムを、全てプロの先生達が生放送で届けています。

N予備校というアプリを使って勉強しているわけですが、このアプリ自体はドワンゴが提供していて、普通の方も月額税別1,000円で使っていただくことができます。

プログラミングの授業は、実はドワンゴが新入社員に向けて半年間行う研修を3年間に引き伸ばしながら、高校生が卒業してすぐに即戦力のエンジニアとして働けるようなカリキュラムに組んでいます。

他にもいろいろありますが、1つ面白いものがあります。「ビリーズブートキャンプ」って覚えていらっしゃるでしょうか？ これは生徒から声が出たんです。「家にずっとこもっているから運動したい」と。それでビリーさんをお願いしたら「ぜひやりたい」と言うことで、アメリカから毎週生放送で「ビリーズネットキャンプ」ということで届けています。そんな遊び的な要素も入れながらやっています。

どんな形でその生放送授業を行なっているのか、システムについてご紹介します。パソコンでもタブレットでもスマホでもいい、見ていただくとコメントが出ます。

（映像）

「英語にはなぜ自動詞他動詞があるんですか？」

これはいいコメントです

（上木原先生コメント）

即質問に答えます。2つ目はアンケート機能、そしてクイズ機能

（映像）

穴ぼこに入るのは「important」「unimportant」「big」「small」さあどっちでしょう？では順番に 1234 です、押してください。

（上木原先生コメント）

押すとアンケート結果が集約されます。

（映像）

ありがとうございます、① 33 ②33 ③11 ④22 なるほどここに固まりましたね。じゃあ、ちょっとお話をしましょう。

（上木原先生コメント）

そして最後に挙手と生添削という機能もあります。

（映像）

では3分くらい時間を取って皆さんの答えを募ってみたいと思います。皆さんの挙手をお願いします。どうぞ。

（上木原先生コメント）

そうすると右上に「手を挙げる」というボタンがあります。これは連打すると少し当たりやすくなります。で、カメラを起動して自分の答えをパシャッと撮って、送信と押したら日本全国のN高生に自分の答えが伝わります。

（映像）

僕はこれには8/10をあげてもいいと思います。とても良くできています。逆にどこで何が2点足りないのか。それは、ここが抜けちゃっているんですよ。

さて。私自身はずっとチョークを持って授業をしていた人間ですので、映像授業なんかには絶対負けないと思ってやっていました。でも生放送で双方向で教室という空間をこれだけ再現されると、脅威だなと自分自身はやはり感じましたし、それがN高で働かせてもらおうと思った直接的なきっかけになったのも事実です。

要は1人の1番いい先生がいれば、知識を教えるということと言っても、100万人同時に教えることができる時代がもうそこに来ちゃってるということです。それもレベルをいっぱい分けることも可能なので、実際にレベルで授業を分けています。

「ベーシック」「スタンダード」「ハイレベル」と全部授業レベルを分けた上で（スライド16）、1年目にやって初めて気づいたのですが、中学校レベルの内容が分からない子が結構いるぞと。そこで「中学復習講座」をつくり、その下に「ゼロから英語」「ゼロから数学」というのをつくりました。そういう形で、いろんな授業のレベルを分けながら授業の生放送をやっている

て、そこで少しずつですが光の当てる角度を変えて輝き始めるという生徒が実際に出てき始めています。

(スライド 18)



④コミュニケーション

それからコミュニケーションですね。こちらの方も映像を見ていただきたいと思います。

(映像ナレーション)

新しい仲間とつながる毎日。学習を充実させるだけでなく、仲間と感動や体験を共有できる機会を創出することも高校の大きな役割だと考えています。N 高校はネットの高校という特色を生かし、生徒同士の親交がより深まるよう、学校を上げてさまざまなコミュニケーションの場を設けています。学校内の連絡ツールとして使用されているのが、Slack というコミュニケーションアプリ です。ダイレクトメッセージや通話のやり取りだけでなく、Slack 上でホームルームが毎日行われたり、チャンネル機能を通して趣味の合う友達を探し、仲を深めたりすることができます。

(生徒のコメント)

- 先生がキンコンカンコンと鳴らしてきて、なんだろうと見るとホームルームが始まっています。
- 人と接するのが苦手という子も、Slack だったら文章だったらもうバンバンお話ししてくれて。
- やっぱりどうしても言いづらいこととか、文面じゃないと言えないなということも Slack だったら言える。
- いろんな子たちに出会って感化されるものもあります。

(ナレーション)

N 高校では部活動もネット上で行われています。将棋やサッカーゲームなどネット上で行える種目を取り上げ、大会にも参加しています。特別顧問として各界のプロを呼び、直接指導を受ける機会も積極的につくっています。

（先生のコメント）

夢というのは体を動かすだけじゃないというのもわかってほしいと思うし。で、そこから高校卒業してサッカーに携わった仕事をやっていくというのも可能だと思うんですよね。

（プロのコメント）

強くなるというのは、本当にプロが見ていても難しいんですよ。灘高の生徒に将棋で勝つというのも、教えている人としてとても嬉しかったですね。将棋を通して楽しみ方を覚えてもらいたい、ということもあります。自分で楽しみ方を発見すれば、仕事でもなんでもある程度活かせると思うので。

（ナレーション）

ネット遠足という独自の取り組みも行なっています。オンラインゲーム「ドラゴンクエスト 10」の世界の中で友達や先生と集合し、一緒に旅に出ることで親交を深めます。

（ナレーション）

高校生活の一大イベントである文化祭。N 高校の文化祭は日本最大規模のイベント「ニコニコ超会議」の会場で開催されます。生徒たちは企画から参加し、フードコートやバンド演奏などの活動を行います。

（生徒のコメント）

- N 高校に入ってから勉強もするけど、ニコニコ超会議に参加して楽しい事もできるから。
- みんなで会ってイエーイとハグしたりして楽しいなあと思います。

（先生のコメント）

- ネットとリアルが両立しているから、遠い地方でもこのイベントに行くんだとなる、とそこでもまた友達ができるとか。

（ナレーション）

生徒へのアンケートでは、87.2%の生徒がN 高校に入って新しい友達ができたと答えました。

（生徒のコメント）

- 友達の輪がでかくなっていると目に見えて感じています。
- 友達もできてるし、バイトも始めて社交性が身に付いて明るくなったね、とよく父に言われます。
- 気軽に悩みとか聞けるし。
- 何でも話せる友達とかができるとやっぱり楽しいから。

（ナレーション）

ネットの高校だからこそつくれる人のつながりがある。ネットだけでもリアルだけでもない、両方のつながりをつくれる場がN高校にはあるのです。ここには青春がある。

余談になりますが、秋田豊さんが指導しているサッカー部。秋田さんはすごく熱血指導で、いつも Skype で繋いでやっていたのですが、「こんばんは」と言ったら「声が小さいからやり直し」と。もっと大きな声で「こんばんは！」とやらせていたんです。そんな中でゲームが好きだからとちょっとサッカー部に入ったという男子がメキメキと力をつけて、最終的にはアジア大会で優勝しました。その彼は今どうなっているかというと、コナミからスカウトを受けてプロの e スポーツプレイヤーとして活躍しています。そういう道もあるんだということを示しています

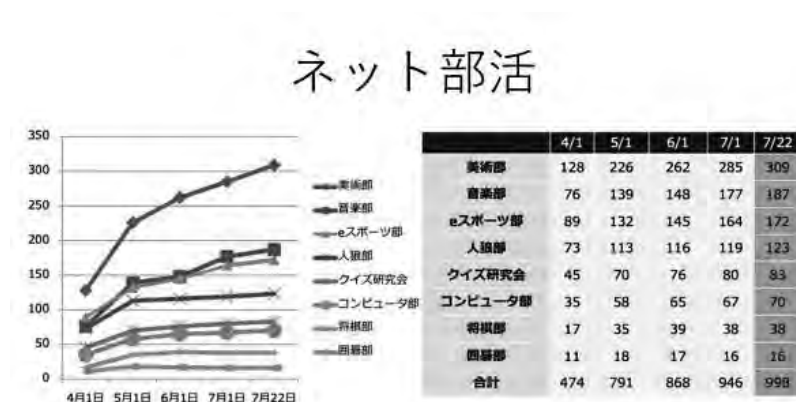
我々のコミュニケーションツールは、Slack というものを使っています。簡単に言うとビジネス用チャットツールです。使った理由は 2 つあります。1 つは IT 企業を中心に Slack を使っていない企業はほとんどないです。つまりもうそろそろ Slack が一般化されるのは間違いない。Slack が使えるよということが、その子にとっての武器になるということがあります。もう 1 つはビジネス用なのでもし仮に不適切な発言があった場合、管理者モードでサッと消せます。

なので、SNS でありながら管理ができるということ。我々の目的は Slack でどんどん失敗してほしいということなんです。そして社会に出たら SNS で失敗しないようになってほしい。そこら辺のリテラシーまで教えて行きたいといった思いもあって、Slack 導入しています。

Slack の利用状況は現在 25%。低いのではないかと思いますけれども、実は Slack で友達ができるとどんどん LINE や Twitter に移行してしまうのです。最初に友達になるきっかけとしてスラックがあって、あとはホームルームなどで使ってもらおうという感じです。

それからネット部活です（スライド 24）。美術部はどんどん部員が増えていて 7 月現在 309 人部員がいます。たぶん、日本の高校の美術部で一番大きい美術部だと思います。本当にそれぞれの場所ではマイノリティだった子どもたちが、N 高校という 1 万人の枠の中ではすべてマジョリティになれる。こんな趣味はないだろう思っているでも 5 人くらいは見つかります。そういうことが出てくるというのが、ネット時代のおもしろさかなと思います。

（スライド 24）



美術部は2週間に1回プロの先生に添削してもらっています（スライド25）。これが人気で、生徒の書いた絵に対して「こういう角度をこうした方が良いよ」というアドバイスを受けて、実際にプロとして活躍できそうな生徒はスカウトを受けて、少しお仕事をさせてもらったりということもあります。

（スライド25）



それから、NPO 法人カタリバさんがやっている「マイ・プロジェクト」をN 高校でも積極採用していて、Zoom（ズーム）というアプリを使いながら39プロジェクト57名でプロジェクト管理をしながら取り組んでいます（スライド26）。Slack も同時に使って「楽しみ！」とか「頑張ります」とか「緊張する」とかいろいろコメントしながら、マイ・プロジェクトを一人ひとり自分のやりたいことを追求していく。昼間から追求する時間があるので、それをしっかりと頑張ってくれています。

（スライド26）



文化祭としては、「ニコニコ超会議」と言う15万人が集まる日本最大の文化祭とされているものです。ここの1ブースを使って、N 高校生は自分たちの文化祭をやっているということ

す。普通にフードブースをやったりとか、今年は令和が始まった年だったので官房長官に来ていただいて一緒に写真を撮ったりもしました。N 高生だけで 4,950 人がこの文化祭に来てくれました（スライド 30）。

（スライド 30）



ということで、「ネットで高校生活を実現し、友人もできる」ということが 1 年目である程度手応えがありました。まだまだ未完成ながらも、そんなときに生徒アンケートを取りました。そうすると生徒から意外な言葉が返ってきたんです。「N 高校に通いたい」と言われたんです。元々学校に対して違和感を持った子どもたちが集まってきた N 高でしたが、やっぱり友達ができて「つながりたい」という気持ちが湧いて、N 高で通える場所が欲しい。我々はそれについて、ものすごく議論しました。

だって、ネットの高校で通える場所というのは矛盾ではないですか？ この矛盾にどう向き合うのか。「つくるのかつくらないのか」をまず一から話し合いました。でも、せっかく通うんだったら、通うというのはどんな意味があるのか？ 通わなくても高卒資格が取れてしまうんだったら、通って何をすればいいのかと。いろいろと悩んだ結果、「通わなくてはできないことをやって、ゼロベースで高校に通うとはどういうことかを再設計してみよう」ということで始めたのが N 高校の通学コースです。

2 N 高等学校通学コース

最初は実験的に、東京の代々木と大阪の心斎橋の 2 か所でスタートしました。通学するという場所ができたことによって、N 高校を選択肢に加えてくれる生徒が増えまして、現在 13 キャンパス通学コース 3 年となっています。来年 4 月にはさらに 5 キャンパス増えて 18 キャンパスになります。

今は大体通学コースで合計 1,600 人ほどいます。でもネットコースには 9,000 人ほどいて、N 高校はあくまでもネットコースが主です。その中に通学できるチャンネルを増やした、というのが N 高の通学コースだと理解して頂きたいと思っています。

①実践型プロジェクト学習

実践型プロジェクト学習で何をするか？ いろいろあるのですが、2 つをテーマにしました。1 つは PBL です。これは通ってもらって取り組んだ方が効率もいいし学びも多い。N 高なりの PBL をどうやってつくっていくか？ 実は開発するときには、札幌新陽高校の中原先生にもアドバイスをいただきました。

この図は N 高の通学コースの時間割です（スライド 38）。朝の 2 時間で PBL を徹底的に毎日やっていこうとしています。3 時間目にコース資格のための BASIC プログラムを毎日やって、4、5、6 時間目はそれぞれやることは決まっていますが、個別最適化した学習をそれぞれのレベルでそれぞれのニーズでパソコンに向かってやって行くというのが 4 時間目以降の時間割です。朝の 2 時間を使って産学連携の PBL をやっていこうというところで、映像を見ていただきます。

（スライド 38）

		月	火	水	木	金
	9:30 - 9:45	朝礼・日誌記入				
1限	9:45 - 10:35	プロジェクトN	N予備校	プロジェクトN	プロジェクトN	プロジェクトN
2限	10:45 - 11:35					
3限	11:45 - 12:35	Basic Program	Basic Program	Basic Program	Basic Program	Basic Program
	12:35 - 13:15	昼休み				
4限	13:15 - 14:05	基本 選択	英語 英語	英語 中国語	英語 中国語	英語 中国語
5限	14:15 - 15:05	基本 選択	プログラミング 英会話	プログラミング 中国語	プログラミング 中国語	大学受験・中学復習 中国語
6限	15:15 - 16:05	基本 選択	プログラミング 英会話	プログラミング 中国語	大学受験・中学復習 中国語	N予備校 / 進路
	16:05 - 16:15	終礼				
7限	16:15 - 16:35	Nゼミ				

朝2時間を使い、産学連携した実践型プロジェクト学習を行い
想像力・企画力・プレゼン力・ITリテラシーを養う

（映像ナレーション）

好きと社会をつなげるプロジェクト学習、実社会へつながる授業。実践型学習のプロジェクト N 個人で取り組むものからグループで行うものなど、さまざまなプロジェクトを通して自ら課題を考え解決策を発見・発表する力を身につけ、実社会で生き抜くために必要なことを学びます。

生徒のコメント

●自分の意見をちゃんと話さないといけない、ということがあるので、即座に自分の意見をまとめて人に話すというところでは、学ぶことが多い。

このような形でプロジェクト学習を行っています。通常と違うのは教員とは別組織で PBL の開発チームを学校法人として持っています。そのチームがさまざまな会社と連携しながら PBL の開発をして現場にそれを下ろして、現場がその授業を実際にやってみてフィードバックをして、もう一度 PBL の開発チームに戻す、そんな形でつくっています。

2018 年の去年 1 年間はこんな形でやりました（スライド 41）。それぞれの能力や姿勢を見ながら、技術については Adobe のソフトを自然にいつのまにか全部使えるようになってきたという状態に持って行きたい、というのがありました。それからいろんなプロジェクトをしながら、特別講演としていろんな先生に実際に教室にきていただき、その様子を中継して 13 キャンパスをつなぐ。質問などは sli.do（スライドゥ）というアプリを使いながら受けるという形でやってまいりました。

（スライド 41）



一部を紹介します。「SCRAP（スクラップ）」というリアル脱出ゲームの会社があります。その会社の社長に来ていただいたときに、「リアル脱出ゲームをやってみよう」ではなく「自分たちでリアル脱出ゲームをつくろう」となりました。その方はとても熱い人で「なぜそこから脱出しなければならないのかその理由から考えよう」と、そこから始まるんですね。「ストーリーはすごく大事だからそんな簡単に、はい脱出しますよというのではみんな夢中になれないよ」とそこから教えてくれます。Adobe のフォトショップやイラストレーターを使いながら、折り曲げたら謎が解けるようになっている仕掛けなどを、設計してつくっていくようなことを 1 か月かけてやってきました。

他にも日本テレビの「みんなのドラマ」というアクティブラーニング用の教材があります。これはどこの学校でも使えるのでトライしてみてください。

我々はこの「みんなのドラマ」という既成のものを元にして、違うバージョンを自分たちでつくる、つまりドラマを自分たちで制作するプロジェクトを立ち上げて、演技も自分たちでやる、スマホで自分たちで撮影する、Adobe の プレミアやラッシュで動画編集する、ということをや

って、実際に現役官僚の人に来てもらっているいろんな質問をして、経済産業省の人もぶっちゃけのトークをしてくれました。

「実はプレミアムフライデーはあんなはずではなかったんだ」とか、さまざまな話をしてくれて、生徒たちもすごく食いつきが良くて「表面だけではわからないな」と。実際に聞いてみると、いろいろな悩みがある中で政策を決めているんだと体感してくれました。

そしてキャンパスの中でこのドラマの優勝者を決めて、そのキャンパスの優勝者同士が今度は日テレの人とかスクラップの人に来てもらい、コンペで優勝作品を決めます。

実際に Zoom（ズーム）を使いながらカメラの前で話す、というスリリングな機会を毎月提供してくれています（スライド 44）。

（スライド 44）



②教員は生徒の夢の発見と実現に全力を注ぐ

それから2つ目です。教員は生徒の夢発見と実現に全力を注ぎます。2時間目までのプロジェクト授業では、先生はファシリテーションをおこなっています（スライド 46）。

（スライド 46）

		月	火	水	木	金
	9:30 - 9:45	朝礼・日誌記入				
1限	9:45 - 10:35	プロジェクトN	N予備校	プロジェクトN	プロジェクトN	プロジェクトN
2限	10:45 - 11:35	Basic Program	Basic Program	Basic Program	Basic Program	Basic Program
	12:35 - 13:15	昼休み				
4限	13:15 - 14:05	基本 選択	英語	英語	英語	英語
5限	14:15 - 15:05	基本 選択	プログラミング	プログラミング	プログラミング	プログラミング
6限	15:15 - 16:05	基本 選択	英語	英語	英語	英語
	16:05 - 16:15	朝礼				
7限	16:15 - 16:35	Nゼミ				

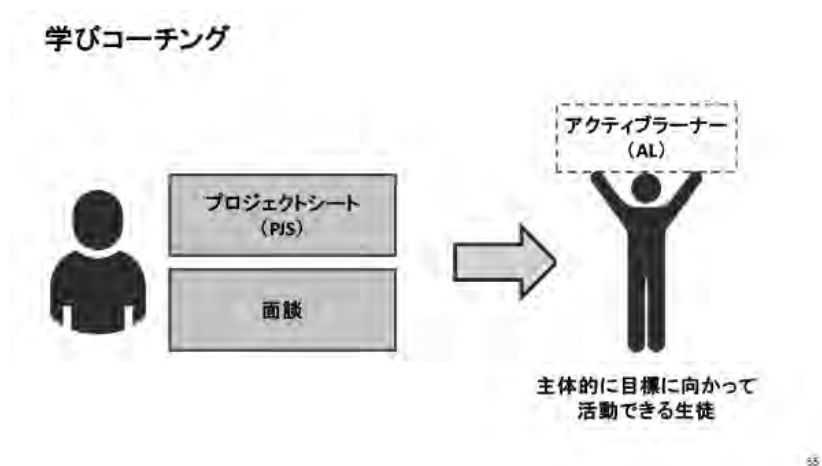
3限目以降は個々の課題をPCによる映像授業を中心に実施
担任は順次コーチング面談にあたる

ただ3時間目以降は生徒たちは映像を見て授業展開していくので、その間、先生は何をしているかと言うと、基本的に一人ずつ生徒を呼んでずっと個別面談をします。

毎月、少なくとも2か月に1回は30分ずつの面談を必ずします。そして進捗状況とか、今、悩んでいることを聞き出しています。プロジェクトシートというものをつくって、クラス担任とワンオンワンミーティングをしながら「人生の目標を見つけていきましょう」ということに力を注いでいます。

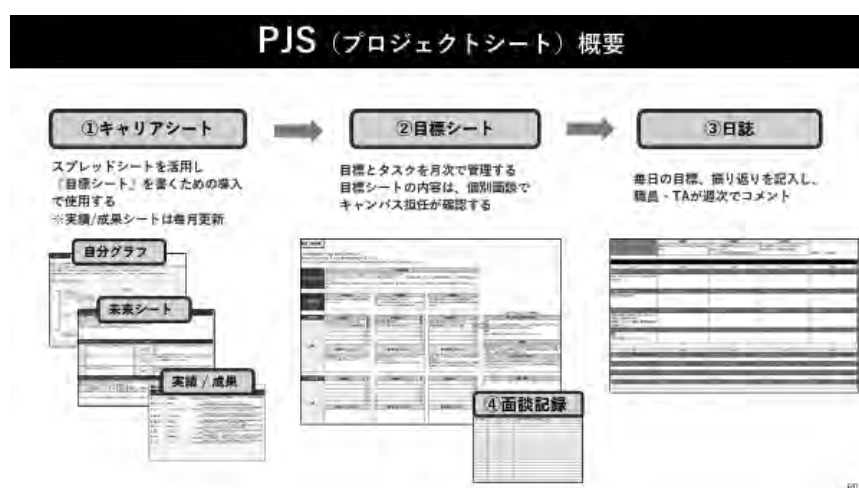
このプロジェクトシートと面談で、その生徒がやりたい夢が見つかった場合は、アクティブラーニング、ちなみに普通はアクティブラーニングと言いますが、我々はアクティブラーナーと呼んでいます。それを先生から認定してもらえると4時間目以降の時間割が完全にフリーになります。つまり自分が好きなものに夢中になってやってもいい。中には「大学のゼミに行きたい」と言って大学に問い合わせゼミに行く生徒もいます。そんな自由な活動ができます（スライド48）。

（スライド48）



プロジェクトシートはキャリアシート、自分の人生のプラン、未来シートで自分の実績を書きつつ、目標を10年後、3年後、1年後と書いて、そのために毎週何をするかといったことを書いて、その上で日誌を毎日書き入れます。だから朝と帰りはまず日誌を読む、というところから始まり、終わります。最終的には先生は週に一回必ずコメントを残す。そういった指導をしているところです（スライド49）。

(スライド 49)



プロジェクトシートとはこういうもの（スライド 50）で、面談はモチベーションアップの機会（スライド 51）です。そしてアクティブラーナーになると 4 限目以降は自由に組み立てられることになります。なぜそうしたかと言うと、最初、自由にさせるとやはり YouTube を見て遊ぶんです。そこで「何で YouTube を見るの？」と聞いたら、「僕は映画監督になりたいから YouTube を見る」と言いました。それは教育としては本末転倒です。目的意識をちゃんともって YouTube を見ていたら、それはいいんですけど。そこは「ちゃんと大人を論破するだけのロジックがあって、それができるんだったら自由にしていよいよ」としたことによって、生徒たちもアクティブラーナーを獲得するために頑張ることにより、自分たちで目標を定めていくようになっていく。そういうベースに今はプロジェクトシートがなっています。

(スライド 50)

①プロジェクトシート (PJS) とは？

自分のやりたいこと(目的・目標)を決め、
その目的・目標を実現することをサポートするツール



(スライド 51)

②面談とは？

モチベーションをアップさせる機会。
面談担当者は、生徒の目標達成への伴走者。



57

経済産業省から、去年「未来の教室と EdTech 研究会第 1 次提言」が出ていて、そこに「未来の学校の先生はどんなものか？」ということが書かれている項目が 10 項目ぐらいあって、それがとても印象的でした。もしよかったら検索してください。その中で 8 番目に「先生の役割」という項目があります。教える先生、教えずに「思考の補助線」を引く先生、寄り添う先生。先生の役割が多様化しています。一斉講義をせずに、そういう関わりをする先生が増えていきます。こうしたことが実はもう示唆されていて、N 高校はそこに沿ってできるだけやれることはやっていくと考えています。

3 N 高等学校の課題と対策

N 高の良いことばかり言いましたが、まだ 3 年が終わったところなので課題だらけです。保護者アンケートをずっと取っていますが「N 高に対する満足度」が少しずつ上がってきています（スライド 61）。

(スライド 61)

N 高の課題**保護者アンケート/N 高に対する満足度**

2016年度
71.4%



2017年度
81.1%



2018年度
83.0%



課題はこの3つです（スライド 62）。

- ①学習に対するモチベーションの維持
- ②生徒間のトラブル
- ③将来の進路をきちんと描けるか

（スライド 62）

N 高の課題と対策

1. 学習に対するモチベーションの維持
 - ・生徒それぞれの夢に向かうための動機づけ
2. 生徒間のトラブル
 - ・ネットコミュニティ開発部の設置
 - ・slackで情報を共有しタコソバ化を防ぐ
3. 将来の進路をきちんと描けるか
 - ・保護者への情報提供 大学受験対策
 - ・就職や専門学校進学に向けてのサポート

まず1つ目のモチベーション維持は結構苦勞します。入学してすぐは、生徒は結構やってくれますが、やはり通信教育はだんだん落ちていくじゃないですか。我々はビッグデータを取りながら「どうやったクラスが一番レポートの進捗が保てるのか」を取ったんです。そうすると、レポートを出さなくなった11月、12月ぐらいに必死で電話をかけている先生のクラスは大して伸びていないんです。なぜか？ それは電話に出てくれないからです。やってないから電話に出ませんよね。一方レポート進捗がいいクラスがどうだったかというと5月、6月の架電数が多い。つまり、何の用事もないのに「頑張っているね」と電話をしていたクラスは、レポートの進捗がずっといういんですよ。「これはどうしてかな」と生徒に聞いたところ、「頑張っているねと1回言われたら裏切れないと思ったから」と言うんですね。本質だなと思いました。生徒からすると、できたと思ったときにタイミングよく褒められたという経験が、クラスのレポート進捗率を上げていくということがわかったので、こういう手書きのもの（スライド 63）をつくってPDFにしてメールで送るんですよ。「あなたのことを見ていますよ」ということが、通信教育にはすごく大事なことでこの3年間で痛感しました。

（スライド 63）



あとは、やっていることはネット三者面談です。ひとり1台パソコンを持っているので、Zoom（ズーム）を使いながら、お母さんと本人と先生と話をする機会を設けています。

それから②「生徒間トラブル」ですね。この辺の生徒指導というものも我々にはあります。ここで、私のメールボックスを見てもらおうと思います。実は「通報ネット」というものがあります。学校に対していけないことをしている生徒がいたら通報してくださいと。1万人の監視者がいる状態でネット通報がきます。「チャンネル内で他のユーザーを不快にさせるような発言を確認したため」、とあったのでURLを覗きに行くと、実際にそれをやっている。そうすると生徒指導部とコミュニティ開発部が連携して生徒指導をする。沖縄の先生、東京の先生、大阪の先生が連携して進めていきます。結構地道ですがやはり学校なのでそこは責任を持ってしっかりやっていきます。

さらに、ネットリテラシー教育なども講師に来ていただいてやっています。

③の「将来の進路」ですが、一番怒られたのは「保護者に対して進路の情報提供がない」ということで、1年目はとても言われました。ちゃんとメールは送っていたんです。「N高新聞」というものでした。でも「来ていない」「見てない」と言われるので、あきらめて紙を年に4回送りました（スライド70）。ユーザーに届かないことでユーザーに腹を立てても仕方がない。ユーザーがメールではなく紙で求めているならそうしようと。そうすることで10%くらいポーンと上がりました。そこはユーザーが何を求めているかによって決める。こちらのプロダクトアウトで決めるのではなく、マーケットインで決めなくてはならないと思います。

（スライド70）

保護者通信（紙）



それから「大学受験をしっかりしたい」ということについては、「ネット特進専攻」（スライド71）というN高らしくない取り組みかもしれませんが、進捗を共有しつつ年に11回の個人面談というかたちで、取り組んでいます。

(スライド 71)

ネット特進専攻



- (1) 進捗共有 (Slackで毎日)
- (2) アシスタントコーチ (現役大学生) によるグループ面談 (週1回)
- (3) 特進専攻コーチによる個人面談 (月1回)
- (4) 一人ひとりに適した効率的な学習計画作成をサポート
- (5) 記述問題の添削や質問相談など、Slackでサポート

どこの大学に何人合格した、という類の高校ではないと私たちは思っていますが、ただ、信用していただくにはこの部分も大事だとしますので、実績を重ねていければいいと思っています (スライド 72)。

(スライド 72)

2019年 大学合格実績 (一部抜粋)

国公立大学	2018	2019	私立大学	2018	2019
九州大学	1	1 (1)	慶應義塾大学	1	8 (7)
筑波大学	1	2 (2)	早稲田大学	1	2 (2)
電気通信大学		1 (1)	上智大学	1	1 (1)
信州大学		1 (1)	明治大学	1	3 (2)
宇都宮大学		1 (0)	立教大学	1	3 (2)
名古屋市立大学		2 (2)	法政大学	1	11 (10)
室蘭工業大学		1 (1)	青山学院大学	1	3 (3)
			キリロム工科大学	1	1 (1)

※2019のカッコ内は現役数

N 高生にはいろんな体験をしてもらいたいという想いをこめて、「高校時代に長期でお金をもらいながらインターンシップを経験し、将来のキャリアを考えていく」という取り組みを始めています。もちろん N 高生歓迎という会社が対象です。実際にはスライド 74 の会社等にインターンシップに行っています。そしてインターンシップに行った生徒はそのまま会社に就職できるんです。でも面白いことに我々の思惑とは反して、ここにインターンシップに行った生徒達は大学に行きます。なぜかと言うとインターンシップ先の先輩たちに「君にはそんなにも力があるんだから、就職はいつでもできるから一回大学に行った方がいいよ」と言われてしまう。そうすると余裕の大学ですね。「就職のための大学」ではなく「自分の探求のための大学」に行こうということになり、工学系に進む生徒が多く、また経営系に進みたいという生徒も多いです。

(スライド 74)

インターンシップ実績



ほぼ全てをさらけ出しますが、1期生の卒業生の進路決定です（スライド 75）。

左が全日制高校。中央が通信制高校。右側がN高校で、特徴的なのは専門学校他に進む生徒が多いことです。大学と専門学校を比較したときに専門学校を考える生徒が多い。それが特徴です。でもやはり多いのは「進路未定」で16.8%います。ここについては「あえてギャップイヤーを持つ」と考える生徒もいますので、そういう生徒がどうなっていくのかを追いかけていたいと思います。

(スライド 75)

卒業生の進路決定率



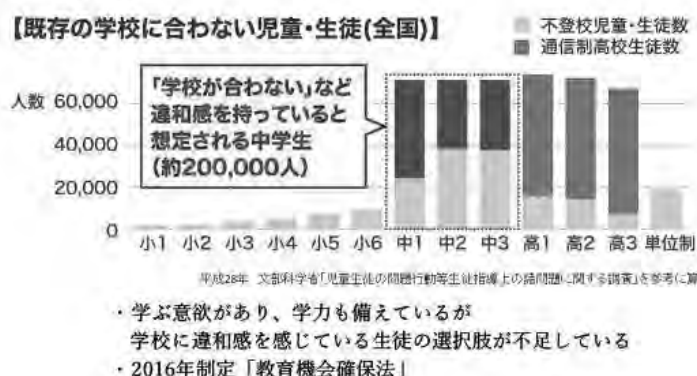
4 N 中等部

最後になりますが、N中等部を2019年4月に立ち上げました。これは実は一条校ではありません。所属している中学校の校長先生の許可を得てN中等部に通うということで、東京秋葉

原・新宿、大阪の江坂の3か所でやり、291名の生徒がN中等部に入っています。立ち上げの動機は単純です。「N高生を見ていて、この子たちを中学生のときから預かることができたらしめとともっと可能性を広げられた」、という単純な思いでつくっています。設立の背景はスライド77です。学ぶ意欲はあるがその場所がない。そういった子どもたちに機会を与えたい。2016年度に「教育機会確保法」という法律が制定されたことで、N中等部は運営をしています。不登校傾向のある中学生は毎日新聞WEB版によると全国で33万人の規模になります。

(スライド77)

設立の背景



カリキュラムは通学コースとほぼ一緒ですが(スライド79)、力を入れているのは「21世紀型スキル学習」、ライフスキルというものです(スライド80)。自己認識、コミュニケーション、対人関係、ストレス対処、こういったものが不得手な子供達が増えているので、本当は大人もこれを学んだ方がいいようなことですが、中学生の間にしっかりやっておけばN高校に入学してからの生活に役立つ。そこで大学の先生とアセスメントを取りながら開発を進めています。特に効果的なのはコミュニケーション、そして情動対処、アンガーマネジメント。怒りっぽい子は6秒数えて感情を鎮める、いったものです(スライド81)。

(スライド79)

主なカリキュラム



(スライド 80)



(スライド 81)

ライフスキルアセスメント

トレーニングの結果すべての項目に変化が見られ、自己肯定感、自己有用感の向上が実証されている

項目	1回目	2回目	変化	変化率
意思決定	4.10	4.23	0.13	3.3%
問題解決	3.82	3.99	0.17	4.5%
創造的思考	3.66	3.94	0.28	7.7%
批判的思考	4.03	4.28	0.26	6.4%
効果的コミュニケーション	3.51	4.20	0.69	19.6%
対人関係	3.79	4.40	0.61	16.2%
自己認識	3.25	3.45	0.20	6.2%
共感性	4.17	4.36	0.19	4.6%
感情対処	3.22	3.73	0.51	15.8%
ストレス対処	3.13	3.68	0.55	17.6%
10項目平均	3.76	4.03	0.27	7.2%

46

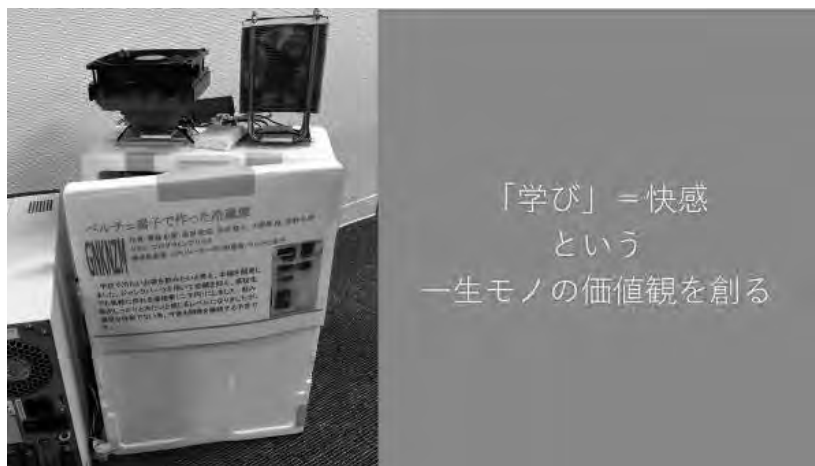
5 文字から電話へ、また文字へ

「手紙や文通から電話へ、そしてメール・SNSへ」文字から電話へ、また文字へと時代の流れとして感じています。文字によるコミュニケーションは、結構、社会の中で重要になっていると思います。このように技術の発展とともに元の形に戻ってくるというのはよくあると思います。「寺子屋・松下村塾」という一対一の教育から明治以降の集団型の教育、そして情報化時代に再び一対一の教育に戻りつつある。ネットという技術を使いながら一対一のコミュニケーションをとるということに、実は戻りつつあると思って運営しています。

あくまでも「ネットやICTは手段で、それを目的にはしない教育をしよう」というのが我々の一番の願いです。先生の役割は「聞き出す」「引き出す」「夢中にさせる」、この3つにだんだん集約されていく、ということをN高の教員を見ていて感じます。またN高校の教員は「それをしたい」と言って入って来ることが多いです。

私はN高に入ってから、生徒から教えられることばかりなんです。「プログラミングクラス」というプログラミングだけやり続けたいという生徒ばかりのマニアックなクラスがありまして、そこに遊びに行くとすごい刺激を受けるんです。教室には標語がいっぱい貼ってあります「バグを憎んで人を憎まず」とかね。面白いんでいつも遊びに行くんですけど、そこに四角い発泡スチロールがあったんですよ。「この発泡スチロールは何？」って聞いたら「冷蔵庫をつくりました」（スライド85）と。「何でつくったの？」って聞いたら「お茶を冷やしたいからです。先生に言っても買ってくれなかったので、自分たちでペルチェ素子でつくりました。これはジャンクパーツを使ってるから2千円でつくれるんですよ。見てください、Slackでオートにできるんですよ」。私は「はあ？・・・」です。でも私はいじわるなんで「それってゴールなの？」って聞きました。彼らは「ゴールを決めないでモノをつくったらダメですか？」と。私は「ごめんなさい」って言いました。

（スライド85）



やはり目的のようなものを我々はつい考えます。「これで成績上がるの？」そういう短期的なことを言ってしまうがちです。でも彼らはつくりたいからつくった。その副次的なものとしていろいろなことを発見した。「イノベーションってそうやって起こるでしょ」と説得されました。「学べるって面白い」「快感だ」と彼らには残っている。その一生モノの価値観を持ち続けたら、人生百年時代でも生き残っていけるような価値観ができるんだなと思っています。

まだまだN高は未完成です。でも「1つだけ、N高の価値はなんですか？」と聞かれたら、「多様性を認めることができた」ということです。この3年間では、まだこの価値しかないと思っています。だから多様な生徒が生きる場をしっかりとつくっていきつつ、個別最適化した教育をさらに目指します。私の話は以上です、ありがとうございました。

質問タイム 進行:産業能率大学 経営学部 准教授 皆川 雅樹

一皆川 上木原先生ありがとうございました。質問担当の皆川です。ではまず2分間で、おひとりで質問を10個以上つくってみてください。そもそもの質問、ささいな質問、何でもいいと思います。振り返りがてら質問をつくってください、その後共有したいと思います。

質問① 私がパッと浮かんだ質問です。「私はいまからN高校に通えますか？」です。

一上木原 高卒の資格を持っていますか？ 持っていたら無理です。入学したいって大人が多くて問い合わせをいっぱいもらっています。で、高卒資格を持っていない人はすごく喜んで「やった一、俺、高卒資格ない」って。高認（高等学校卒業程度認定試験）とか大検で取った方は、入学できるんですよ。高卒資格がないから。

これだけの内容が学べて、ネットコースは学費が就学支援金適用時は3年間で20万円弱なんです。ネットコースはとても安いんです。普通の学校でプログラミングを習おうとするとともっとかかりますね。ネットコースは公立高校とあまり変わらない金額ですが、通学コースは学校法人がやっている私塾という扱いになるので、いわゆる県の助成金などは全く適用されないんです。なので普通の私立高校に支払うような金額になります。

一皆川 ではそろそろロイロで共有していきます。ロイロに書く質問を絞っていただきたいと思います。お願いします。

質問② N高のNとは？

一上木原 一番聞かれるんですが、「N」とはNETとか、NEXTとか、NECESSARYとかいろいろあるんですが、これは自分で決めてくださいということなんです。要するに「自分のNってなんでしょ？」。よく整数n番目とかって言いますよね、色をつけないという意味で、「角川高校」って言ってしまうと、やっぱりそういう色がつくじゃないですか。ではなくてN高校という本当に自分の色に染めてほしいし、学校は「こういう生徒であれ」ということを言うのはいやなんです。つまり生徒自身でNを決めてほしいという意味で「N高校」と名づけました。

一皆川 他はどうでしょうか？何か気になることはありますか？

質問③ カウンセリングシステムとは？

一上木原 カウンセリングシステムは、学校カウンセラーを2人入れています。実際に悩みがある場合はそのカウンセラーに聞けるんですが、聞き方はSlackかテレビ電話を選択できますが、8割くらいはSlackを選んでます。つまり「文字でちょっと気軽に聞いてみたい」という生徒が多くて、文字自体でけっこう解決することがあったりして、意外にカウンセリングって文字でやることの効果があると感じています。

質問④ 開校時と今の入学してくる生徒の違いは？

一上木原 最初の生徒たちは、「自分たちがN高校をつくるぞ」という、なんて言うのかな、学校に対して期待しているというよりは、学校にモノを申しながら自分たちでつくっていこうという、そんな感じでしたね。

今入ってくる生徒たちは、N高校がこの3年間で、おかげさまで実績が出ているので「N高校は何をしてくれるんですか？」という感じで入ってきますね。

だからちょっと生徒の層が変わってきているという感じはしています。そういう部分で目が厳しくなっているなど正直感じています。

一皆川 「何をしてくれるんですか？」という、そこに対してはどう思いますか？

一上木原 やはり進路の部分が一番大事ななと思っていますので、3年間のグランドデザインを考えながら、進路ガイダンスで全国各地を回ったり、オープンキャンパスツアーのようなもので大学を見て回ったり、我々がN高校をこうしていこうという能動的な取り組みをどんどん増やしているという感じですね。

質問⑤ N高校の先生になりたいときは？

一上木原 N高校の先生になりたい人はどんどん応募してきています。N高校のサイトから中途採用に応募してもらったらいいいと思います。

質問⑥ 未来の教員の必要は無くなるか？

一上木原 知識を教えるティーチングの部分は、もう減ってきていると感じています。だから生徒のメンタリングの方に教員は振っていくのかな、と。文部科学省はこの前、実証実験を始めていて、教室で授業をしている先生が教員免許を持っていれば、その周辺にいる先生は免許がなくても授業として単位を認めるということを始めています。これが始まっちゃったら、一番いい先生が授業をして、チューター的に入っている人はもう教員免許がなくてもいいことになっちゃいますね。そういうところが面白くもあると思っています。

質問⑦ 学校として生徒の希望に応えられないことは？

一上木原 たくさんありますよ。いっぱい。だから全員を受け入れるというよりは、N高校はこれだけのものを揃えています、それに当てはまる生徒で、これでようやく救えたな、という生徒が出てくる。これで救われた生徒の総和ができるだけ100になればいいなと思っています。でもうちでは救えない、救いようがないというタイプ、家庭というよりはやっぱり本人のやる気が無いと通信制は難しいですから、その意味ではそこの子を救うための部分はまだ我々にはできていないというのが実感としてあるので、まだちょっと努力が足らんなというところですよ。

質問⑧ 全日制高校に対してどう思いますか？

一上木原 すごく難しい質問ですね。そうですね、全部がN高校になったらいいな、なんてまったく思っていないです。N高校というのは、普通と言われる部分、まあ角度の問題ですね、ここからわあ〜ってこぼれちゃう子がやはりいるんですよ。それはレベルの高低ではなく、真ん中の枠から外れる、もしくは自分から外れたいという子で、そういう子たちのたまたま受け入れる場所になったのかな、と思います。

「ようやく胸を張って『通っています』と言える通信制ができました」ということを言ってもらえるのがすごくありがたいです。我々は開校したときからずっと、1つの項目を必ずアンケートの最後に聞いて、「N高生であることを誇りに思っていますか？」を、必ず最後に付けています。

この意味は、今までは胸を張って「ぼくは通信制高校に通っています」とは言えなかった。でももちろん通信制高校に通っている中にはすごくがんばっている子もいる。けれど、そのことは自分の中の引っかかりにもなって、「チャレンジできない」という子がいっぱいいた。もともと通信制高校を運営していたメンバーが、角川ドワンゴにこの企画を持ち込んだんです。角川ドワンゴ側も「そういう子たちが胸を張れる通信制高校を僕たちだったらつくれるかもしれない」とスタートしたという経緯があります。だから我々にはできるだけ、「今の普通」という枠に苦しめられてしまった子たちを拾っていけるようになればいいなと思っています。

我々が大事にしているのは、ひょっとすると世の中で落ちこぼれと言われているかもしれない生徒たちが、本当に落ちこぼれかどうかはわからない。私自身も「先生」と呼ばれていますが、ある部分については生徒の方がずっと優秀ですね。そういう生徒たちが生き生きと伸びていく場になるのが我々の願いです。全日制の学びの中でしっかりと伸びていける子はたくさんいます。それはそれでいいと思っています。日本の教育ってめちゃくちゃよくできていると私は思っています。全然否定する気はありません。小中学校の義務教育をバカにする生徒には叱ります。「日本の義務教育で生きてこられた。こんな幸せなことはないぞ」って。我々は通信制高校として全日制高校と一緒に生徒を伸ばしていけたらいいなと思っています。対立構造のようにしようとは全く思っていません、それを理解いただけたらありがたいです。

一皆川 時間がきましたので、ここで質問は終わりにしたいと思います。上木原先生ありがとうございました。

立命館宇治高等学校

酒井 淳平 先生

総合的探究の時間とは何か

—研究指定校での1年間の取り組みを終えて—

- 1 はじめに
- 2 本日の内容と目標
- 3 なぜ本校で「探究」なのか
- 4 カリキュラムをデザインする
- 5 現場は会議室のようには進まない
- 6 どのような授業なのか？ それは問いを立てる授業
- 7 1年間の成果：生徒と職員それぞれ
- 8 今年度の取り組み
- 9 総合的な探究の時間とは何か？

総合的探究の時間とは何か―研究指定高での1年間の取り組みを終えて―

立命館宇治高等学校

酒井 淳平

1 はじめに

立命館宇治中学校・高等学校の酒井と申します。よろしくお願いします。まずタイトルをご覧ください。

「総合的な探究の時間とは何か」。

このタイトルを見ると、さも本校が答えを持っているかのような誤解を与えるかもしれません。正直なところ本校は、私たち教員自身が探究をしているその試行錯誤の過程にあると思っています。ですから本日はここにいらっしゃる教員の皆さんと一緒に、探究の時間、もっと言えば高校教育を一緒により良いものにつくっていかねばと思ってお話をさせていただきます。

まず私の自己紹介からさせてください。私の教員生活は最初に小学校からつまずいた生徒たちに高校の単位として数学Ⅰを教える、今で言う通信制高校のはしりでしょうか、そこでの教員から始まりました。その後、立命館中・高ではSSHの担当などをしていましたが、立命館宇治に来てからキャリア教育に取り組んできました。もともと数学の教員が専門でして今日は探究をテーマにしてお話をしますが、私は探究が専門の教員では全くありません。

さて早速ですが今日一番言いたいのはこれです。「HowではなくWhyが大切」。本校が文部科学省の「総合的な探究の時間」の研究開発学校に指定されていることもあってか、よく聞かれるのは「探究はどうやったらいいのか？」です。

しかしこの「How」の部分って必要でしょうか。私は「How」ではなく、大事なことは「Why」だと思っています。「なぜ探究をするのか？」皆さんはどう思われていますか。「大事だと思う」何かがあるからここに来られているのだと思います。

では「なぜ皆さんの学校では探究に取り組むのでしょうか？」

おそらくこの答えを考えると、皆さんの前に具体的な生徒実態があり、その生徒実態に根ざした探究の必要性が出てくるのだと思います。私はこの「Why」ところこそが大事だと思っています。この点をはじめに強調させてください、その上で今日は「総合的な探究の時間とは何か」について話をしたいと思います。

2 本日の内容と目標

私の学校での立場は高校2年生の学年主任です。そして研究主任です。学年運営と探究のカリキュラム開発の責任者をやらせてもらっています。その立場から、「なぜ探究なのか」、そして「どんなカリキュラムを組んでいるのか」、「ここまでの成果と課題は何なのか」ということについて話をしたいと思います。

本日の目標は下の2点です（スライド7）。この1番と2番について何か持ち帰っていただければ

ば嬉しいなと思っています。

(スライド 7)

今日の内容と目標

内容

- 1、なぜ探究なのか？
- 2、探究カリキュラム
- 3、ここまでの成果と課題

目標

- 1、探究についてWHYの視点で考えることができる。
- 2、自分が学校でできることなどに気づく。



「なぜ今探究なのか」。ベネッセの出された冊子にこう書かれていました。大きく 4 つあります (スライド 8)。

(スライド 8)

なぜ今「探究」なのか？

- ①時代の変化? (答えのない問い/大きな変化)
- ②入試の変化? (習得では新入試が乗り切れない)
- ③新学習指導要領? (探究という科目設置)
- ④ブーム??? (①～③の結果何となく探究)
(実話あり!)

「①～③は未来を拓く探究 (導入編・実践編) ・ベネッセ」より

1 つ目はこういう時代だからこそ、答えのない問題に取り組まなければならないからこそ探究が必要だということです。

2 つ目が入試の変化です。いわゆる知識の習得だけでは新しい大学入試を乗り切れないということから、探究に注目が集まっています。

3 つ目が新しい学習指導要領。総合的な探究の時間の設置に限らず、「探究」という言葉がたく

さん登場しています。

4 つ目は私が新しくつけ足したことです。1 から 3 までの結果、探究がブームになっているのではないかと思います。

私はキャリア教育をやってきましたので、ふと思う時があります。私が取り組んできたキャリア教育も一時ブームでした。それと今の探究がすごく似ている気がして仕方がありません。なぜかと言いますと「何かしろ」と上から言われます、すると形が優先されませんか？「課題研究をやったら Ok 」とか「インターンシップをやったら OK」とか。そして「忙しくなる」という感覚を持ちます。

探究もキャリア教育も特定の教科でやるのではもちろんありません。そして、なぜかイベントや課題研究をやったら OK という誤解が広がりやすいです。そんな余裕はないと喧嘩になるところも同じかもしれません。

それからいろんなレベルがあって、授業でやる探究、キャリア教育と学校全体とは当然違うフェイズですが、ここがごちゃまぜに語られやすい。

そして「評価が課題だ」と言われます。

これら全てはキャリア教育で言われてきたことと同じであり、今再び探究で言われていることです。

ただ次の 2 点は重要だと思っています。1 つ目は学校改革の起爆剤になるということ。もう 1 つはこれからの教育づくりを考える上で欠かせない視点になるということ。これもひと昔前のキャリア教育と探究の同じ点だと思っています（スライド 10）。

だとすれば、キャリア教育の歴史から学ぶとすれば、探究は学校を変えるということです。キャリア教育をやって生徒が伸びた学校はすごくたくさんあります。またキャリア教育もいろいろ言われながらも徐々に浸透し、気がつけばここ 10 年で学校教育の中に根付いています。私の出身は京都府の公立高校ですけども、私の高校生時代にはなかったようなことが今、普通に行われています。

いろいろ言われながらも徐々に浸透はするんです。ということは探究も同じだと思います。探究で生徒が伸びる学校がたくさん出てくるでしょうし、気がつけばその結果として徐々に浸透すると思っています。だからこそポイントは「目の前の生徒の実態と生徒の少し先の将来を見据えることができるかどうか」、そして「学校全体で取り組むことができるかどうか」。間違いなくこの 2 点だろうと私は思っています（スライド 10）。

（スライド 10）

探究は学校を変える！

(キャリア教育の歴史に学ぶ)

キャリア教育によって生徒が伸びた学校は多い！！

(例を上げればきりがありません)

徐々に浸透し、気がつけば学校教育の中身は
大きく変わっている

(自分が生徒のときにはなかった取り組みが全国で普通にされている)。

ポイントは

探究も同じ！？



生徒の実態と将来を
見据えられるか？
学校全体で取り組めるか？

R
REITSUENJIN

3 なぜ本校で「探究」なのか

①「探究」の位置づけ、生徒を生産者に育てることが重要

次に「なぜ本校で探究なのか」ということについてお話しします。

本校では生徒を「お客さまから生産者にする」ためには探究が大事だと考えています。

お客さまというのはお金を払って「何かをもらう」、「何かを与えてもらう」だけの受け身な存在です。一方生産者は何かをつくり出す側です。自らの発見、気づきから行動し、自分から取り組んでより積極的に動きます。キャリア教育の文脈においても、生徒をお客さまから生産者に育てることが大事です。

探究は生徒自らの興味関心、課題意識から始まるので、私たちは全く一緒だと思っています。ですから、私たちの学校ではこのように探究を位置づけています。

②本校での「探究」の流れと問題意識

本校の探究は「コア探究」と呼んでいるのですが、探究実施までの流れについて話します。本校は 1994 年度に学校法人立命館と合併し、学校が大きく変わりました。そして 2013 年度からキャリア教育を授業として始めました。これは文部科学省の指定を受けながら、取り組んできました。

その後「次のカリキュラムを考えよう」ということで 2017 年の 1 月にカリキュラム委員会がスタートしました。これは中堅教員がチームとなって次のカリキュラムを考えるという委員会だったのですが、そこに私も委員として加わっていました。

ここに集まった 7 人の教員は同じ問題意識を持っていました。そこが、本校における総合的な探究の時間の始まりでした。その後、新カリキュラムがスタートして、結果として文部科学省の研究開発学校として総合的な探究の時間のモデルづくり、本年度からは WWL の一部としておこなっています。

カリキュラム委員会 7 人の教員が共通して持っていた問題意識についてお話しします。実はこう

いう問題意識がありました。スライド 14 の左側の絵を見てもらいたいのですが、本校に限ったことではないと思いますが、ここ数年生徒が非常に真面目で素直になりました。その反面、受け身になったようにみんなが感じていました。

ただ真面目で素直な生徒達ですので、おそらく課題を与えればやるんです。でもその悪循環でいいのかな、という思いが私たちにはありました。真面目で素直でちょっと受け身になっている生徒たちだから、課題を与えれば教科でも部活動の練習でもやろうとします。しかしその結果生徒はより受け身になり、さらに色々なことを処理しきれなくなって左側の絵の子供のようにグラグラしてしまっている（スライド 14）。

この状況に対して、さらに課題をオンしていく、クラブの練習を増やす、課題の量を増やす、その方向性でやっても生徒はガクッと崩れるだけではないか？ 今必要となることは核となる部分を育てて、それはマインドとスキルですが、そこを育てることによっていろんなことにもっときちっと取り組める生徒を育てるべきではないか？ これが私たちの共通した問題意識でした。

（スライド 14）



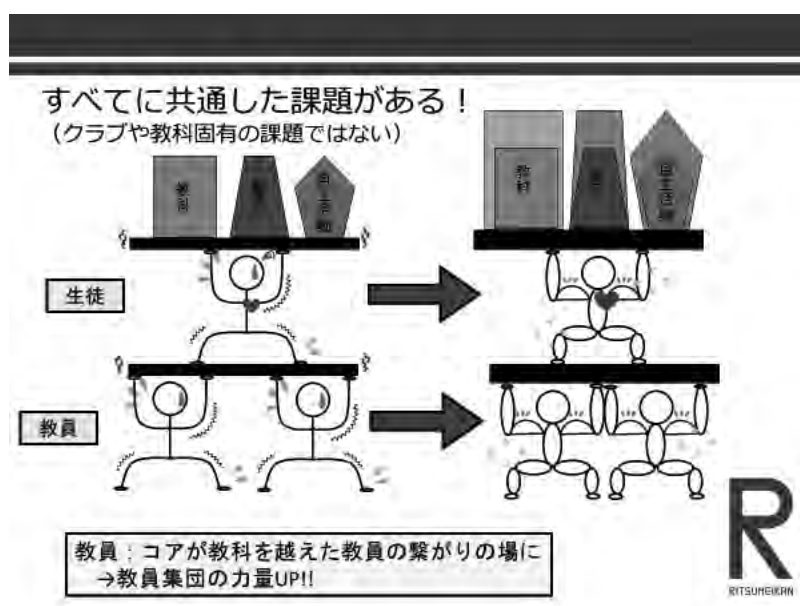
③教員の問題

もう1つはスライド 15 の下の教員の図です。

このような生徒の状況は、実は教員も同じではないかということを私たちは話し合いました。つまり、私たち教員も忙しくなって横のつながりが薄くなり、皆が必死ですが生徒のことを支えきれなくなっている。

新しいカリキュラムをつくるのであれば、私たち教員もちゃんと横のつながりをつくって力をつけて、生徒をこれまで以上に支えられる教員集団にならなければいけない。そんなカリキュラムができないか？

（スライド 15）



おそらく、それは総合的な探究の時間を使うのが一番良いのではないかな。

そんな考えから校内で使う名称としては「コア探究」、文科省的には「総合的な探究の時間」としてカリキュラムを開発しました。ですから「教員と生徒のどちらも根っここのコアとなる部分を育てる」これが私たちの思いです。

ただ、これは所詮カリキュラム委員会だけで考えたことですので、本当に生徒実態に合っているかどうか全教員に調査しました。

教員アンケートをまとめると結局、皆が思っていることは一緒で、「育てたい生徒像は自ら学び行動できる生徒」だったのです。本当に皆が同じことを考えていることがわかりました。であれば、今の生徒の現状はまさに「お客さま」なので「自ら動ける生産者にする」必要がある。

そしてそれはもちろん学校全体で取り組むべきものですが、探究とキャリア教育をカリキュラムの核と位置付ければいいのか。そんな考え方でカリキュラムをつくりました。これが現時点での本校がなぜ探究をするのかの答えになります。

4 カリキュラムをデザインする

次にカリキュラムのデザイン（スライド 21）ですがこんなふうに考えました。大きく 3 つの考えでカリキュラムをデザインしています。

1 つ目はテーブルクロス理論です。文科省の長田調査官が名づけられたのですが、テーブルの上にクロスがかかっていてどこか一点をつまんで上に引き上げると、その部分は当然持ち上がりますが、その周りも上がります。おそらく総合的な探究の時間もそうだろうと思ったのです。探究の時間で育てる一点を決めてそこを上げ、そこを中心に周りも上げていこうという考えです。

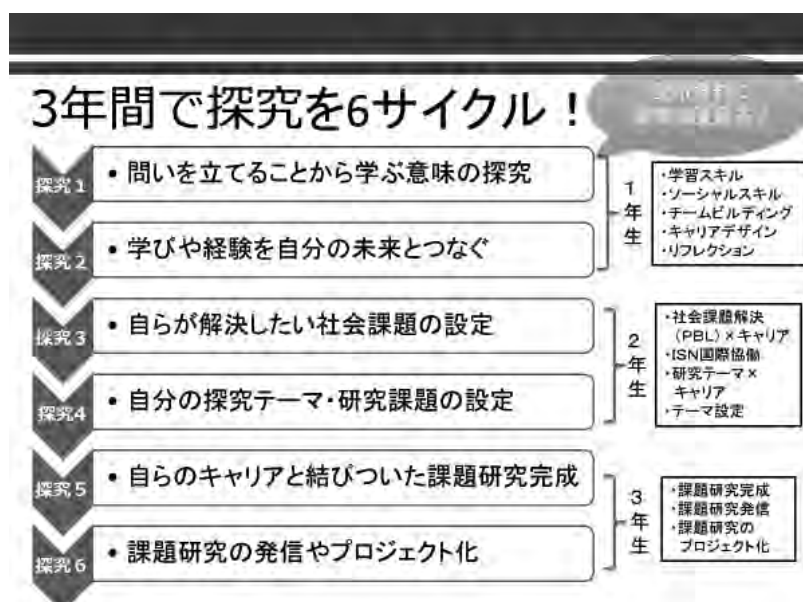
2 つ目は探究のサイクルには繰り返しが重要だろうと考えました。そして一番の起点である「問いを立てる」ということについても練習が必要だろうと考え、問いを立てるというところから入りました。

3 つ目は本校は立命館大学への内部進学が多いので、3 年生の 2 学期 3 学期を使って課題解決

の実践、社会への発信がゴールになるべきだという考え方です。

スライド 21 にあるように 3 年間で探究を 6 サイクル回しています。もし仮に外部への進学が中心の進学校でしたら、その学校の条件に合わせてもっと早くに完結するカリキュラムを組んだと思います。

(スライド 21)



5 現場は会議室のように進まない

ここまでカリキュラム開発の話をしてきましたが現場は甘くありません。例えば昨年度から探究の授業に取り組んでいる 20 代教員は「正直なところ探究なんてしなくなかった。実家に戻って実家近くで教員をしようかとさえ思った。」と言っていました。会議で決まったからといって、みんなが前向きに取り組みを始めることができるわけではない。本校も例外ではなく、偶然高 1 担当になった教員で取り組み始めました。

ただ現場は甘くないということについて私が思うことが 2 つあります。

1 つ目は、私たちがごく普通の教員集団でクラブ活動重視だったり、家庭の事情で残業が難しい、週末が厳しいというメンバーがかなり多く含まれていました。だからこそ、汎用性のあるプログラムが出来つつあるのではないかと思います。無理をしすぎると続かないのではないかと思います。

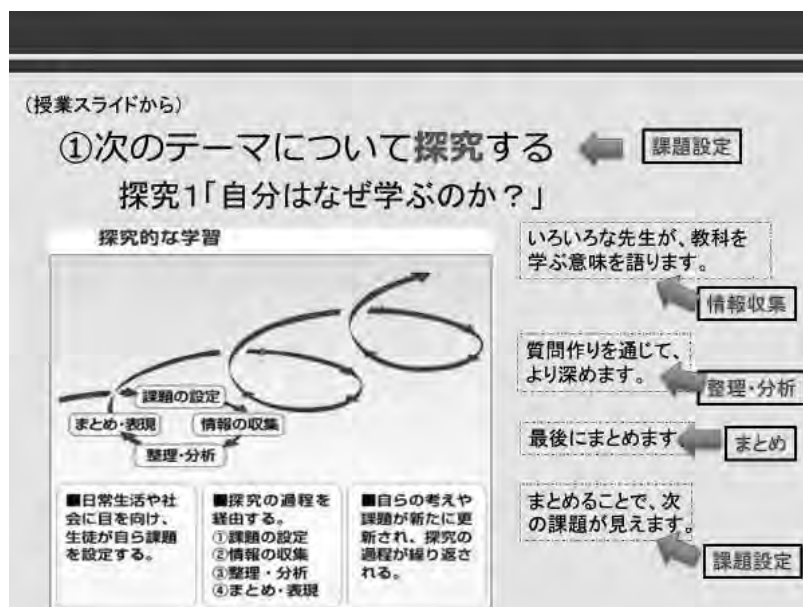
2 つ目は、こちらがより重要なのですが、与えられた条件の中で仕事をするのがプロであり、教員は成長するということです。教員は集めるものではなく一緒に成長するものなのです。新しいことをするからいいメンバーを集めようという、その発想が間違っているということです。

6 どのような授業なのか？ それは「問いを立てる授業」

さて本題に戻ります。「問いを立てる授業」について少し紹介します。

問いを立てる授業では、「自分がなぜ学ぶのか」を探究テーマとし、教員がローテーションでクラスを回る形で授業を進めていきました。それはスライド 29 のような形です。

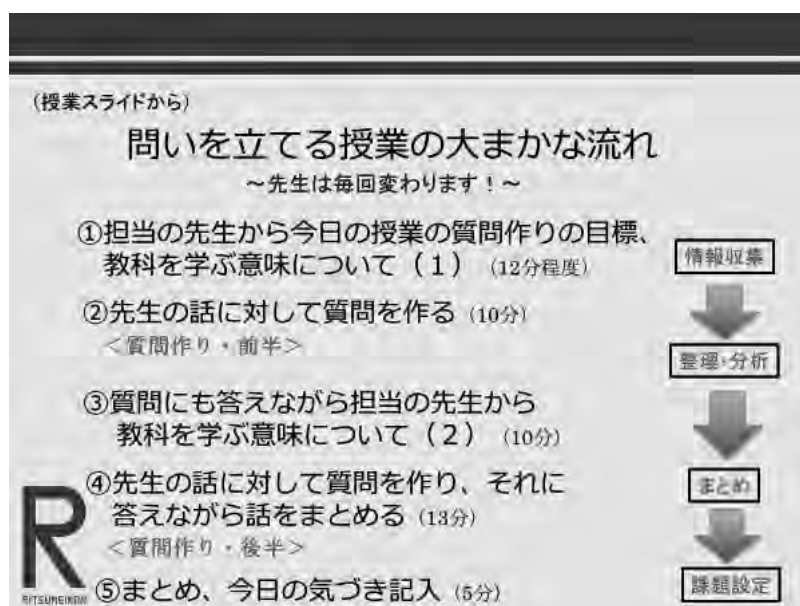
(スライド 29)



問いを立てようと思ったら、当然コンテンツが必要となります。何かがあるからこそ問いが生まれるからです。私たちは結局、問いというよりも「質問づくり」と呼ぶことになるのですが、そのコンテンツを私たち教員が語る「教科を学ぶ意味」にしました。ですから1時間の授業を図のような流れで組みました(スライド 30)。

担任団7人と学年主任である私とで8人いますので、8人が7クラスをぐるぐる回る形で教科を学ぶ意味について20分ぐらい語りました。それに対し生徒が問いをつくる。それに対する質疑応答を含めて、学ぶ意義を深めていくという形で授業を進めていきました。

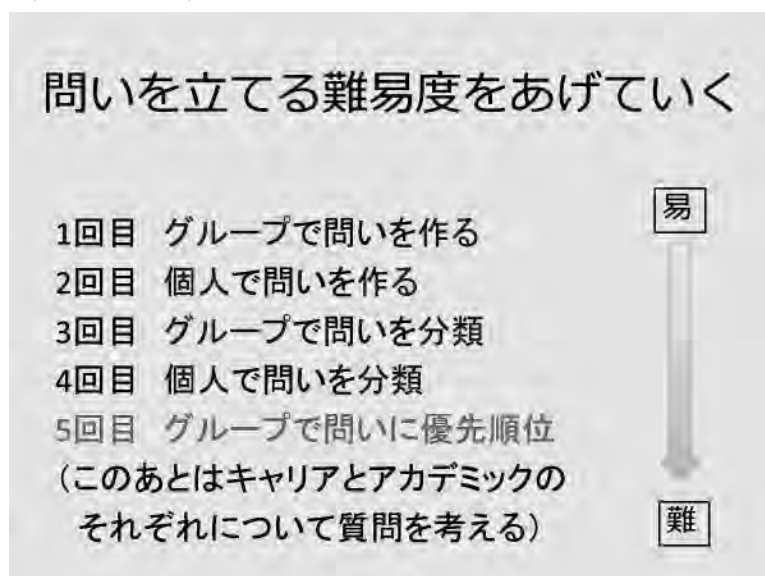
(スライド 30)



問いを立てる授業で、同じことを繰り返すだけではレベルが上がリません。

「今日は数学を学ぶ意味を聞いた、来週は英語を学ぶ意味を聞く」というように学ぶ意味を聞く教科は変わっていきませんが、問いづくりについてはスライド 31 のような形で徐々にレベルを上げていきます。初めは質問づくりさえ慣れていないので、「グループでいいからたくさん問いをつくらう」から始めます。そこから始まって優先順位を設定したり、キャリアやアカデミックの分類をしながら、問いづくりの難易度を上げていきました。

(スライド 31)



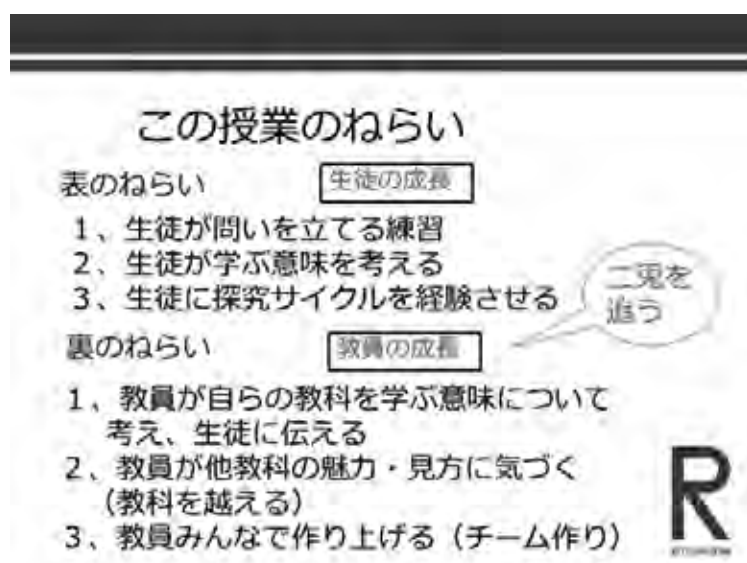
「どうやってこんな授業の実施が可能になるのか」と思われるかもしれません。私達は「担任会議」という場を使いました。本校では毎週水曜日に会議がありますが、高 1 は毎週担任会議を行いました。私は学年主任ですので会議の進行をします。他の議題をできるだけ圧縮して後半はコア探究についての打ち合わせにしました。そしてコア探究の打ち合わせでは基本的には①前回の授業の振り返りを行い、②次回の授業のスライドを確認する、ということをしていきますが、こ

の「問いを立てるという授業」の期間中は③各教員が教科を学ぶ意味を順番にプレゼンしました。

これによってすごく教員が鍛えられました。私は高1の他の担任の先生達の前で、「なぜ数学を学ぶのか」について20分プレゼンをしました。他の教員も同じことをしました、これは生徒にプレゼンをするための練習の場にもなります。さらに他の教科の学ぶ意味を聞いて、初めて違う視点が理解できたりもしました。教員同士が他の教科を知る場としても大変有意義でした。

もちろん、この授業の1番の狙いは生徒の成長です。でも、同時に2番目の狙いとしては教員の成長があり、①教員が自分の教科を学ぶ意味について考え生徒に伝えること、②は教員が他教科の見方・考え方について気づくこと、③は教員全員でつくり上げること、これらが裏の狙いとしてありました（スライド33）。

（スライド33）



ここにいる皆さんが、もし自分の教科を学ぶ意義を語るとしたら、20分間でどのように語られるでしょうか？

今年、私たちは高校2年に上がりました。次の高1の教員がこの夏に授業の準備を始めています。私達は夏に準備がしきれなかったので、秋になってバタバタしてしまいましたが、今年の高1の担任団はすでに準備を始めていて頼もしいと感じています。

7 1年間の成果：生徒と職員それぞれで

①生徒の感想

次に1年間を終えての成果についてお話しします。生徒の感想については次のスライドに書いてあるので読んでいただけたらと思います（スライド35）。

（スライド35）

生徒の感想 (多かった声)

- ・とても有意義な授業だった。先生たちがなぜ各教科を学ぶのかを伝えてくれたので、改めて教科を学ぶ意味を考えた。なぜ学ぶのか、なぜ働くのかはこれからの将来で必ず大切なことだから、考える機会があつてよかった。
- ・今こうやって1年間を振り返ってみるとこれからの人生で必ず必要となってくるようなことを身につけることができていたことに気づきました。

なぜコアの授業があると思いますか？コアとは何ですか？

- ・良い大人になるために社会に出てもやっていける人になるためのコア
- ・コアは自分の中心となるものを強くするためのもの

R
KITSUMEIKU

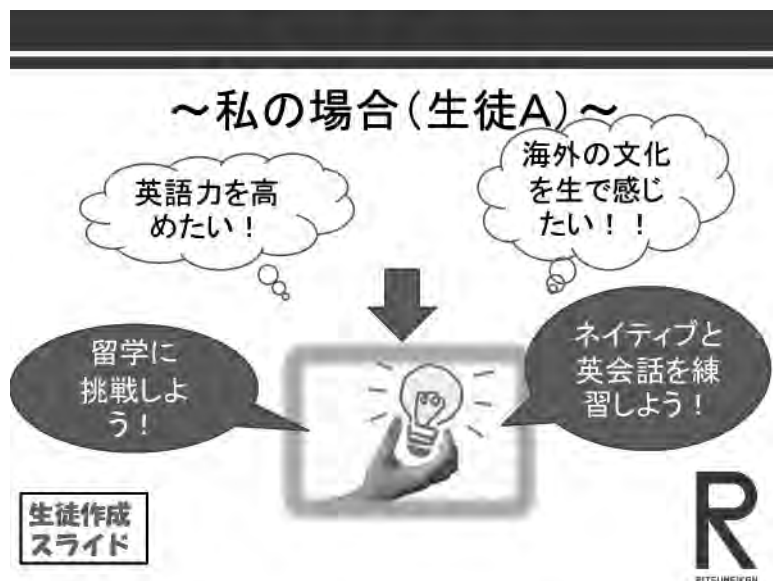
紹介したいのは次のことです。2 か月前にオープンキャンパスがあつて、生徒がコア探究の学びについてプレゼンしました。生徒がつくったスライド（スライド 36）をご覧ください。「探究の授業が与えてくれたもの」というテーマで、ある生徒はこう言っていました。

（スライド 36）



「興味があることに挑戦しようという強い勇気をもらった」。彼女（生徒 A）は「コア探究の授業を通して今したいことは何かを常に考え、これを頑張りたいということを考えた」と言っていました。コア探究はキャリア教育の内容も含んでいるのですが、彼女は常にそのことを意識していたと語っていました。そして彼女は、「自分は英語を高めたい」「海外の文化を生で感じたい」と、そんな自分に気づいたので「よしそれでは行動しよう」と考え、「留学に挑戦しよう」「英会話を練習しよう」となって、昼休みには積極的にネイティブ教員と話をするようになりました（スライド 37）。そして3 か月間の交換留学プログラムに挑戦することも決めました。

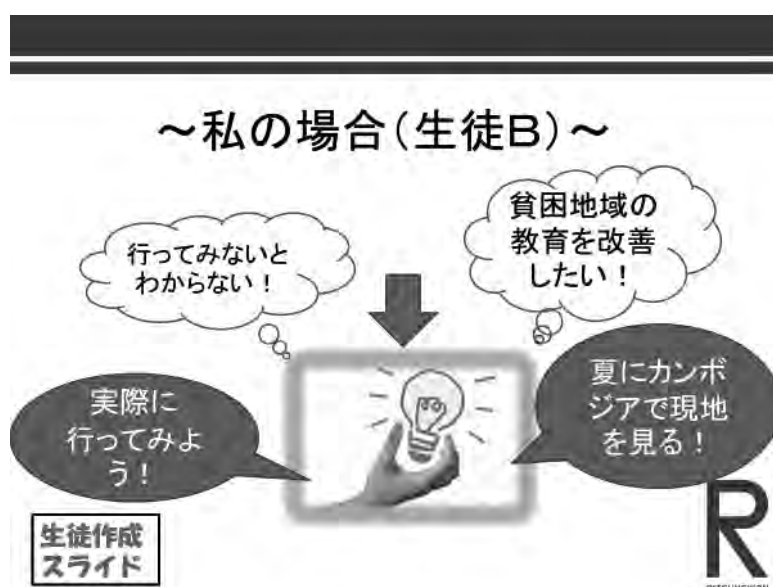
(スライド 37)



また別の生徒(生徒B)はこんなことも言っていました(スライド 38)。

高校2年生は地域課題について取り組んでいることもあってだと思いますが、「行ってみなければわからない」ということをコア探究で学んだと。彼女自身は「貧困地域の教育課題を解決したい」という夢があるのですが、では「どうしよう?」ということで、ロータリークラブのカンボジア研修に参加することを決めてこの夏渡航しました。

(スライド 38)

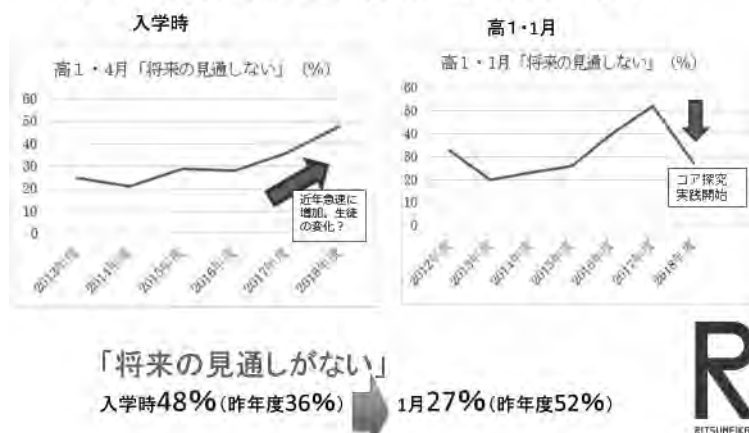


このような形で、生徒たちはコア探究を受け止めてくれています。それから将来の見通しがない生徒が激減したという成果もあります(スライド 39)。

しかし一番大きな成果は教員の変化です。

(スライド 39)

将来の見通しがない生徒が激減！



②職員の変化

まず1番目に授業の練習ということ。担任会で次の時間のスライドや授業の進め方について共有するときに意見を言い合いますが、これが自分たちにとってもすごく学びになっています。

2つ目はマインドセットという面で良かったということです。

3つ目は教員が風通しの良い学年団をつくることができたことです。

4つ目は教科を学ぶ意義を語ることを通して、自分の教科を教えることについて深く考えたということです。(スライド41)

(スライド41)

教員の変化！ 【学習する組織の実現！】

- ・生徒にとっても教員にとっても、有意義な授業だったと思う。特に、教員には、アクティブラーニングの手法を用いた授業の練習になったと思う。
 - ・コア探究は、わたしは「なぜ学ぶのか、どんな自分に育ってゆくのか」という意識が育めばよいと思っておりました。その成果と効果があったと思います。
 - ・教員同士が毎週の打ち合わせで顔を突き合わせて会話することが出来たので、ものすごく「風通しの良い学年団」を作ることが出来たのは大きな収穫。
 - ・問いを作る題材として、各教員が学びの意義を語る授業は、とてもよかった。改めて「理科を学ぶ意味」について考え、まとめることができた。
- R
RITSUMEIKAN

こうした教員の変化こそ、私たちが1年間で得た一番大きな成果だと考えています。

でも実はもう1つ、もっと大事なことがあります。ある教員は「生徒も思考の部分では個人差が大きくて、退屈そうにしている生徒が多かったり、考えることを放棄している生徒がいたりしてやはり準備が大変だった」と書いていました。そして「コア探究などしなくても各教科の観点で進めればいいのか」とも。

しかしこの教員は、「コア探究は教員にとってどうでしたか？」という質問に対して、「上手に展開できる自信がない回は正直気が重かった」（スライド 42）。そして教員自身の変化は、「苦手な内容にもチャレンジし最後まで逃げなかったこと」と書いていました。

（スライド 42）

これも大切なこと！？
いろいろな教員が存在する！

ある教員の総括

- ・ 思考の部分では個人差が大きく、退屈そうにしている生徒が多かったり、考えることを放棄している生徒もいた。
- ・ 1コマの授業に対する準備としては非常に労力が必要で、全教員が集まる必要があるなど時間的な制限も負担。
- ・ 本来、各教科でおこなっている学び方を丁寧に指導すれば、必要性は低くなるのではないだろうか。

不安に寄り添うことも重要。

土台は学年というチーム作り！？

➡ **コアは教員にとってどうだったか？自分の変化は？**

- ・ 上手に展開できる自信がない回が多く、正直気が重かった。
- ・ 苦手な内容にもチャレンジし、最後まで逃げないこと。

RITSUMEIJI

私はここが大事なことだと思います。

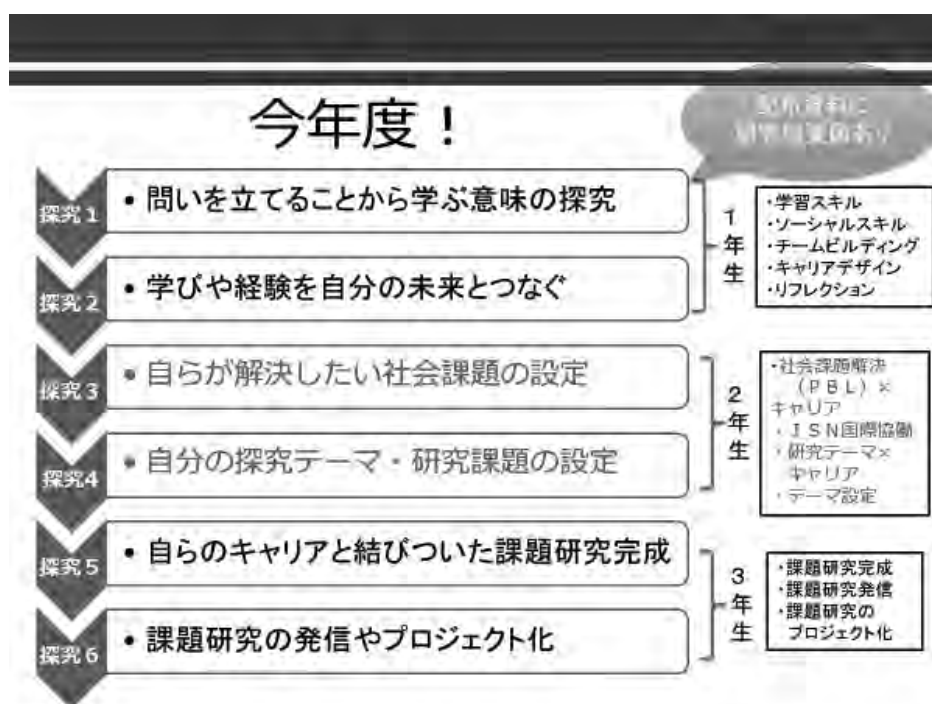
私たちは教科の専門家として教員をしているのです。「探究をやれ」と急に言われて、いきなり前向きにできるほうがおかしいと私は思っています。誰だって不安だし不安なことから自分を守りたくなる。これは当然のことだと思います。だから不安にはちゃんと寄り添って一緒にやっていくことが大事であり、そして寄り添うには学年の担任団というチームが一番適しているのではないかと思います。

8 今年度の取り組み

こんなことを私たちは1年間をかけて学んできました。今年度（スライド 44）について最後に4点ほどお話しします。今年度はスライドの課題設定のところに入っています。

今年度のトピックは4つあります、①PBL型の校外学習、②担任会のひとコマ、③高1での実践、④課題、それぞれ説明します。

（スライド 44）



①PBL 型校外学習

まず PBL 型の校外学習ですが、本校ではクラスごとのバーベキューをおこなっていましたが。悪くはないのですが、全部お膳立てされていてあまり教育効果は期待できません。ですから、今年度からバーベキューを止めて地域課題発見型のプログラムに組み直しました。

京都府の北部は多くの課題を抱えていると言われています。そこで、北部にフィールドワークに出かけるというプログラムにしました。ただ単発では意味がありません。まず高2に進級する前から宇治市について学び、高2に進級してからは事前学習で京都府北部について学び、フィールドワークから帰ってきてからは北部の魅力化について考え、そして最終的には学校の地元である宇治の魅力化について考える。現在ここまでしています。つまり取り組みと取り組みをつなぐことが大事だということです (スライド47)。

校外学習では学年を3コースに分けました。当然3人の教員が必要です。そして3コースで一番頑張った教員は、先ほどコア探究の振り返りのところで一番不安を語っていた教員でした。このことを通じて、教員は日々成長しようとしているということを感じました。

(スライド47)

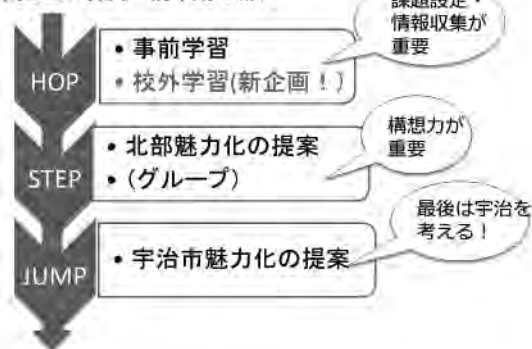
1、PBL型校外学習

～取り組みをつなぐ重要性！～

昨年度のストーリーは続く、

校外学習のコース設計で
最も頑張ったのは、

高2コア探究・前半期の流れ



R
RITSUMAKU

②担任会のようす

次に本年度の担任会のひとコマについてです。たとえばこんなことがありました。

宇治市の魅力化についての授業を検討していたときに、今年から加わった教員は「これでは自分ごとにならない」で終わったのですが、昨年度からいる教員は「自分事になるように役を設定したらいいのではないかと語り、結果的に宇治市の課に所属する形でこの学習をすすめました。昨年度の1年間で私たち教員が力をつけていることを確認できた瞬間でもありました。

また、こんなこともありました。生徒はある事柄を見たときに、「こども福祉課」の目線と「観光課」の目線とでは見方が違うことを、あまりわかっていませんでした。それに気づいたある教員が、あるカフェを題材にして「こども福祉課の視点から見たらどうか」「観光課の視点から見たらどうか」という形で題材をつくってくれました。

さらに本年度は進路サポートを使っているのですが、ある教員は「生徒が自分の置かれている状況がわかっていない」と考え、授業の導入段階で進路などに関するアンケートを実施しました。その結果すごく授業が良くなりました。

これらは私が知らないところで起こったことなのですが、1年以上時間をかけてやってきて、教員の中でコア探究が徐々に自分ごとになって来ていることを示していると思います。

③新高1チームは昨年度をバージョンアップ

次に3つ目です。私たちが高2に上がったので当然あらたな高1のチームができています。本年度の高1は昨年度よりもバージョンアップされた形でコア探究が進められています。

④山積みの課題

課題は多数あります。例えば課題研究のテーマ設定です。どこまで生徒に委ねていいものか、実は今もまだ議論の最中です。高3をどうするのか、カリキュラムマップができていない、3学年コア探究を回せるのか、コア探究を出来ない理由はいくらでもあげられるのです。しかし忘れてはいけないことがあります。

私は校内研修でこのように言わせてもらいました（スライド53）。

「教員の最も大事な仕事は何だと思いますか？」

私は、それは生徒を育てること以外にないと思います。先ほど「お客さまか生産者か」という話をしましたが、教員にもお客さまも生産者もいます。「お客さまの教員」というのは教えてもらうことが当然だと思い、育つための方法を自分で考えようとせず評論だけを行います。一方「生産者の教員」というのは自分で学び、学ぶ場があれば自分から参加します。生徒が育つための方法を自分から考えます。

「自分自身がお客さまなのか生産者なのか？」教員自身が誰よりも問われています。お客さまの教員は評論家にはなれても生徒を育てることができない（スライド 53）。ここが一番大事なところだと思います。

できない理由はたくさんあるのですが、生徒の成長が一番大事であり、そこに向かって「何ができるのか私たちが考えること」、ここが私たちに問われていることだと思います。

（スライド 53）

校内教員研修で問いかけたこと

教員の最も大事な仕事は何？ ➡ 生徒を育てる

＜お客さまの例＞ ～してもらう～	＜生産者の例＞ ～何かをする～
・ 教えてもらうことが当然と思う。 ・ <u>生徒が育つための方法を自分で考えようとしない。評論はできる。</u> ・ 与えられたことはできる。 （自分からはしない） ・ 何のために取り組んでいるのかわかっていない。	・ 自分で学ぶのが当然と考える。 ・ <u>生徒が育つための方法を自分で考える。</u> <u>自分から学び、実践できる。</u> ・ 自分から取り組む。 ・ 取り組むことの意味を分かっている。 ・ 誰かのためになる価値を産み出す。

自分はお客さま？ 生産者？

評論家は誰も育てることができない！



カリキュラム開発についてはスライド 54 のように二兎を追う研究開発と ISN2.0 への参加とがあります。

（スライド 54）

カリキュラム開発の方向性



二兎を追う研究開発

- * 育つ対象
 - 生徒／教師
- * 日本の教育作り
 - 探究モデル／2030年へ
- * 意識すること
 - 汎用性／独自性



ISN2.0への参加

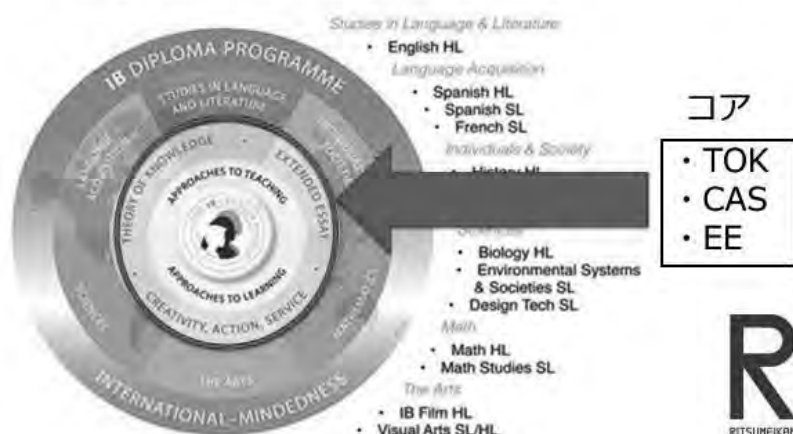
OECD+文科省のプロジェクトとして、国際協働での課題解決PBLに挑戦!



そして明らかにしたいことは教育課程の核（コア）です。本校は IB 教育を導入していますが IB のカリキュラムは各教科だけでなく、真ん中にコアと呼ばれる部分があります(スライド 55)。そのコアには TOK (theory of knowledge)、CAS (Creativity, Action, Service)、EE (課題論文)。これらは言ってみれば「問いを立てるような授業」と「社会貢献する授業」と「課題研究の授業」、これらが核として存在しています。その外に各教科があります。

(スライド 55)

IB教育にはコアがある



日本のカリキュラムにも必ずコアはあると思っています。おそらく日本の教育の場合は、コアになるのは「総合的な探究の時間」と「特別活動の時間」だろうと思っています。そして IB 教育のコアは、 TOK も CAS も EE もエッセイもそれぞれ専門の教員がいます。しかし日本の教育においては、これまでの歴史的な事を考えてもこの核となる部分をチームでつくっていくのがい

いだろう。これが日本型なんだろうと思います。

私たちの「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発においては、日本の教育課程のコアの部分を何とか形にしたい。これを意識しながら取り組みを進めています（スライド 56）。

総合的な探究の時間については文部科学省の指定を受けているので、報告書をつくっています。必要な方は連絡をいただければお送りいたします。

（スライド 56）



日本型コアを形にすることが重要！

(仮説)

- 1、コアは必要。
総合と特活が要
- 2、日本型コアは
おそらくチーム
(IBコアは専門家が担当)

次の教育は生産者として創るもの！

報告書必要な方は連絡してください

R

9 総合的な探究の時間とは何か？

それでは「総合的な探究の時間とは何か？」という最後のテーマに戻ります。

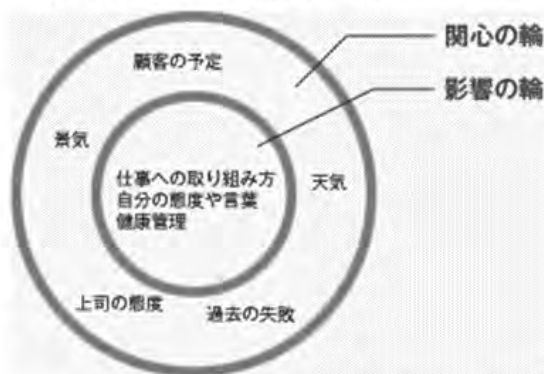
私は今こう考えています。1 つ目は総合的な探究の時間は教員や教育課程をつなぐ核となるもの、コアだと思っています。もうひとつ、これからの時代にますます大事な学びということです。

これはあくまでも私の答えですので、皆さんご自身で考えていただきたいと思います。

最後になりますが、では「何をするか」というときに「影響の輪」というのが大事になってきます。スライド 58 のように 2 つの円があって、中が「影響の輪」、外が「関心の輪」です。

（スライド 58）

影響の輪 (自分ができことに注目)



Franklin Planner Japan Co.,Ltdのページより

- ・自分ができること、やりたいこと、やるべきことは？
(影響の輪)

「影響の輪」は自分で変えることができます。例えば「仕事への取り組み方」とか「自分の態度」とか「自分の健康管理」。これらは自分でどのようにでもできます。

しかし「外の関心の輪」というのは、自分が関心を持っているのだが自分ではどうしようもないことです。例えば明日の天気、景気、校長先生が何を言うのか。これらは自分では変えられないことです。しかし変えられないけれども、自分に大きな影響を与えるかもしれません。

自分が何をするかを考える際に大事なことは、この「影響の輪」を考えることです。

私の場合、高2の学年主任なので学年に関係することは、基本的に自分で決めることができます。これは「影響の輪」です。しかし学校全体の方針はもちろん関心はありますが、自分だけで決めることはできません。これは「関心の輪」になります。

私にとって、学年で何をするかということが影響の輪の中心になります。ここに注目することが大事なのです。外側の関心の輪のことばかり考えれば愚痴にしかなりません。

必ず自分にできることはあります。「担任だからできること」、「進路部長だからできること」、「管理職だからできること」。それぞれにあります。そこについて考えることが次の一歩になるんじゃないかと思います。

これで私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました

三重県立四日市商業高等学校 校長

鈴木 達哉 先生

キャリア教育・アクティブラーニング・探究
高校教育にもたせたもの

特別ゲスト 前 岐阜県立郡上高等学校 校長 服部 弘幸 先生

講 演

- 1 私とフォーラムの関わり（なぜ名古屋で産能大のフォーラム？）
- 2 私の考える「キャリア教育」
- 3 「キャリア教育」への現状認識
- 4 地方での人材育成
- 5 これから取り組みたいこと

リフレクション

キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらせたもの

講演**三重県立四日市商業高等学校 校長****鈴木 達哉****一進行 酒井淳平先生**

最後のセッションとなりました。このセッションは巨匠 2 人を迎えております。タイトルは『キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらせたもの』です。

ちょうど 20 年ごろ前です、自分が教員になった頃から「キャリア教育」が言われ始め、時期が変わって「アクティブラーニング」、今は「探究」。一見ブームが変わっているように見えてしまうんです。もしかしたらここ数年で教員になった方は「アクティブラーニングが流行っているな、あれ、次は探究になった。そういうふうに使われているかもしれません。でも、やはりその中には一連の流れがあるんです。そこで、その時代にずっと先端で授業をされてきた鈴木達哉先生と服部弘幸先生をお招きしまして、2 時間のセッションにしたいと思います。よろしくお願いします。

セッションの進行は、まずは鈴木先生にご講演いただきます。その後「ロイロ」を使いますので、少し「ロイロ」の説明をします。そして少し各自の振り返りの時間、服部先生のスピーチ、お二人の対談、その後にお話しを受けての質問づくり、質疑応答、こんな流れで 2 時間を進めたいと思います。

まずは鈴木先生の講演ですが、私から先生を紹介させていただきます。

鈴木先生には 8 年ほど前、私がキャリア教育の担当をしていた頃に文部科学省の研修で知り合いました。鈴木先生が講師で来られていました。いまだに覚えています。文部科学省の研修ですから 1 泊 2 日でしたが、けっこうカチッとしたお話が多かったんです。そして最後の最後に鈴木先生の分科会があり、先生が言われたのが他と全然ちがっていたんですね。多分その頃鈴木先生は教頭になったなられた頃だと思うのですが、「キャリア教育が進んでいると言われてはいるけれど、この研修で言いたいのは、現場ではまったくそんなことはない」とリアルにお話いただきました。その後「自分はやりたいことがあって、仲間と一緒にやりたいことをしたかったから、それで管理職になった」、と強く言ってくださいました。その時、「ああ、こういう管理職の先生っているんだな」と思ったことを覚えています。鈴木先生は三重県の地で本当に、いろんなことをされてきた先生ですが、実は今年度末で退職ということをお聞きしています。校長としては今年度がラストとなりますので、最後の講演ということを含めてお話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

講演 鈴木達哉先生

こんにちは。私もパワポは使えるんですが、先ほど酒井先生がおっしゃったように 20 年前からこういうふうにしちゃべくりでやってましたんで、最後になるのもう一回原点に返ろうと思い、レジメと話だけでやらせていただきます。

産能のフォーラムは非常に時間に厳しいので、1 分でも惜しいです。あの時計でちょうど 40 分ということになっていますが、酒井先生から頂いた時間の中では「40 分 + α 」と書いてあったんで、本当はどんだけしゃべってもいいんでしょう。でも、それは許されないだろうなと思うので、あの時計で 35 分までには絶対に終わりたいと思います。

いやー、めっちゃ緊張してきた。さっきですね、昼休みに酒井先生と渡邊先生と一緒にご飯を食べてたんですわ。そしたら 2 人が「疲れた」「疲れた」って言って、「何でかな?」と思いましたが、今ここに立ってわかりました。めっちゃ緊張しますよ、そうでしょ。だって皆さんの中にはこっちの講演者の側にいても不思議じゃない方がいて、それなのにそっち側でずっとこんな目をして見てるんで「こわいなあ」というのもありますね。それとね、ひとつ言い間違えると突っ込まれます。先ほど酒井先生が「50 代の教員というものは」と言われたのに対し、渡邊先生がすごい突っ込まれました。その言い間違いも避けなければならないので、そういうすごいプレッシャーの中で始めます。よろしくお願いいたします。

1 私とフォーラムのかかわり（なぜ名古屋で産能大のフォーラム?）

お手元のレジメに沿って始めますが、「そもそも産能のフォーラムが名古屋で開催されているのは何でか?」という話から進めたいと思います。

実は私、生意気にも 2 冊ほど本を出しまして、この本は 2011 年のあの東北の東日本大震災があった年の 6 月に発売されました。これを産業能率大学の林さんが手に取ってくださったようです。私はちょうど教頭会議で大分の由布院にいました。そしたら突然、全然知らない番号から電話がかかってきて、どうやら私の本を読んでもらったようで、8 月に自由が丘で産能のフォーラムがあるんやけど「来ませんか?」という感じで、お誘いを受けました。そして行かしてもらいました。そしたら「これだ!!」っていう感覚があったんですね。もちろん林さんもぼくの本を読まれて「同じだな」と思われたんだと思いますが、私自身もその時のフォーラムに参加して「これは考え方がまったく一緒やん! キャリア教育を大事に考えてるのも一緒やん!」と思いました。

キャリア教育というと、「どこでも一緒や」と思われるかもしれませんが、実は全然違うんです。私自身もいろんなところに勉強をしに行きますが、しっくりこないことの方がむしろ多いんですわ。「それちゃうで」って。ごめんなさい関西弁で、つい。そういうのが多いんですが、産能のフォーラムは本当にピッタリだったんですよ。それで自分のコンセプトの 1 つとして「地方の人材育成」というのがあるんですが、「これを自由が丘、東京だけでやとったらもったいないな」と思ったんです。本当は私は三重県だけがよければいいので、他の県はどうでもいいんですが、さすがに「三重県でやる」というと恐れ多いので、「せめて三重県から教員たちがやって来れる距離の名古屋でやってくれませんか?」とお願いして、翌年から河合塾の名古屋の千種校舎を借りま

して、名古屋フォーラムが始まったということなんです。

だから私自身のキャリア教育に関しての考え方と、このフォーラムを貫く考えというのは、おそらくマッチしているんだろうと思っています。

その内容は何かと言いますと、レジメに書きましたように、これもまあ仕方がないとも思うんですが、1999年に文部科学省から出たキャリア教育の考え方は、単に職業教育という色合いがものすごく濃かったと私は思っています。でも「それはちゃうで、違う」と20年前の初期の頃から実は思っていました。

例えば当時は「雇用される力」とありましたが、私は「いや仕事だけじゃない、ちゃうぞ」と思っておったんです。レジメに書きましたが、キャリア教育は職業教育だけではないと思っていました。そして、それは何かと言うと「生きる力の育成、特に社会で生きる力の育成」だと思っていました。もうちょっと前まで私はずっと進路・進学ということで、進路指導主事として進学校を経験してました。でもそこでやっていると限界があるんですね。当初は別に違和感はなかったんです。でもやっていて「ちょっと違うぞ。大学に入ってもその先どうすんねん」と。そういうこともありました。

それは津高校におったときです。ぼくは小論文をやらせていました。生徒に志望理由などを書かせていたんですが、そのときにものすごく顕著だったのは「この子は伸びるよね」と思っていて実際に伸びている子、それから「一生懸命やっても伸びないんだよなあ」という子、この両者のどこが違うんだろうと。サンプルとしては少ないんですが、伸びない子は共通して、大学に行くところまでしか話が進んでいないんです。その先をどうするのか、それがなくて、これはやっぱりもう「生きる力の育成、特に社会で生きる力の育成」の方向が正しいんじゃないかと思ったのがひとつです。

では私のキャリア教育が何かと言うと、おそらく今日ここに来ていらっしゃる方と同じ考え方ではないかと思いますが、私は①資質能力育成ということ。②それから進路あるいは人生そのものを、生き方そのものと考ええるということ。③プラス市民性、市民教育。そういうものが基本的にキャリア教育だと思います。もちろんその中に職業というものも入ってきますので、職業教育というものを絶対的に否定するわけではないんですが、あくまでも、さっき言った3つのコンセプトの中で結果として出てくるものが職業だと思います。今回この話をさせていただくことになりましたので、自分の書いた2冊の本を読み返してみたいんですよ。もしかしたら、自分の考えがだんだんずれてきているんじゃないかな、という心配もあったもんですから読み直してみたいんです。多分大丈夫です。そのものは変わらないです。

さて、酒井先生や渡邊先生はこれからの未来を語らないかんですが、でも私は紹介にあったように今年で最後なので、今日は歴史を語ればいいだけなので、そういう意味では気がラクなんです。ぼくは今日は遺言だと思っています。私にはまだちょっとだけ先がありますので遺言なんですが、服部先生はすでに辞めていらっしゃるのダイイングメッセージ、そういうものとして二人の話を聞いていただければと思います（笑）。

2 私の考える「キャリア教育」

2 番目の項目になります。私の考える「キャリア教育」ですが、こちらの本に書いたものと、それからもう 1 冊の本はアクティブラーニングについて書いているので若干違いますが、キャリア教育の授業版がアクティブラーニングと考えていますので、内容は全然変わりません。

①『進学校のキャリア教育』の目次から

そこに書いてある言葉を読んでいただくと、例えば進学校のキャリア教育では、「日常生活・進路指導を通じたキャリア教育」「学校行事・部活動を通じたキャリア教育」「授業・教科を通じたキャリア教育」という目次です。実際に書いたのは 10 年前ですが、その 10 年前から私の考え方は変わっていません。たぶん渡邊先生の話も酒井先生の話も同じコンセプトで貫かれていると思います。

②『実践アクティブラーニング』の目次から

それから実際にアクティブラーニングの中でも、同じように普通科高校、進学校でのキャリア教育がありますが、

①進学校こそキャリア教育が必要だという考え方。

②アクティブラーニングはなぜキャリア教育なのか。

③自分のコンセプトの 1 つである地方人材の育成のために。

さらに言うと④キャリア教育とアクティブラーニングをみんなでやろうよ。

そういうところと言うと、全く自分の中でブレはないと思いました。

③キーワードから

キーワードとしましても、「大学はゴールではない」、それから「キャリア教育で横ぐしを通す」という表現をしています。いろんな活動を見直してみれば、別に教員の仕事を増やさなくても、つまり「キャリア教育」というのをそれまでの仕事に ON しなくても、普通にできる。それを「横串を通す」という表現を使っています。あるいは企画に魂を込める。今日のそれぞれの先生方の分科会での話は、それは要するに魂を込めたものになっていると思います。

それから「日常のキャリア教育と非日常のキャリア教育」。挨拶ひとつとっても掃除をひとつとってもキャリア教育はできます。これは「キャリア教育という横串を通す」ということにつながります。

それから「少しずつみんなでやる」「仲間をつくる」「世のため人のため」「高い志」。これは私が授業の中で実践しておりました、いわゆるアクティブラーニングという面で申しますと「論理コミュニケーション」というものでやっておりました。

「バトンタッチの精神」。私は進路指導部長をやっていたのですが、そのとき高校生を卒業させますが、浪人する子もいます。「その子が次に自分の行先を決定するまでは、まだ自分の生徒である」という感覚でやっておりました。

それから「地方分権」「外部連携」「ジェネリックスキル」「ノブレス・オブリージュ」これは「高貴なる義務」という意味ですが、特に進学校の子供たちはそういうことが必要だからと考えておりました。さらに言うとも「中高大接続」ということ。

多分、今やっていることと変わりがないと思います。もちろん今やられている方々、分科会で発表された方々は、私らがやっていた原始的な状況からすると、すごく進んでいるし洗練されているし素晴らしいし、もう企画書を見てもすごいし。「おれ、時代がよかった、もう今の時代やったら通用しなかった」と思いながら聞いとったんです。キャリア教育のとっぴじめのときだったので、こういった概念的なことで何とか行けたんだろうなと思います。

キーワードでさらに続けます。「一人ひとりを大切にしましょう」「誰も置き去りにしない」。それから逆に言うとも「高い志」「世のため人のため」。そういう中での「主体性」「共生」「自立」などを中心に考えておりました。

「資質能力」というのが社会で生きる力というものを向上させる。そしてそのための「経験・思考・行動」が大切です。さらに言うとも「個に視点を置くために」「個の力を伸ばすために」「接続と連続性」。例えば小中高大、ときには幼稚園も含まれると思いますが、そういうものが連続性・接続性をもって考えていかないとダメですよ。聞いてもらっても「なんやんそれ、誰でも言えるやないか」という話ですよ。

ただ、今日、私は歴史を語りに来たので。当時はキーワードに上げたような考え方は世の中には全然なかったんです。全くなかった。例えば高大接続を言うなら、大学の先生の出張講義とかあるじゃないですか。今はもう当たり前ですが、私がやり始めた頃いろんな大学に連絡しても、「何ですかそれは」「なんの話ですればいいんですか」「なんで行かなあかんのですか」と大学から言われました。自分の同じ学校の先生にも「なんでわざわざ大学の先生を呼ぶの?」とも言われました。でも実際にやると、生徒の目の輝きが違ってくる。その結果として生徒のモチベーションが上がれば、自分が主体的に勉強していく、自分で力を伸ばしていこうという意欲が変わるな、そういう思いでやっておりました。

こういうことで私は、県外の方は分からないかもしれませんが、津高校、川越高校、いわゆる三重県の進学校と言われるところでやってきたんです。先ほど酒井先生に言われましたけれども、自分はキャリア教育を三重県内で流行らせようと、推進したいということでやってきました。今もやっているんですけど、三重県の若手研究会といって、若い先生ではない人もいるんですが、それをつくって勉強会をやってきました。そういう中で「できるだけ仲間をつくりたい」「同じ考えを共有する人ができるだけ多くなしてほしい」、そういう思いでやってきたのが、それまでのところですよ。

④管理職経験が自分のキャリア教育を広げてくれた

現在の勤務校である四日市商業高等学校ですが、「これらの管理職経験が自分のキャリア教育の幅をひろげてくれた」と書いてありますが、私自身はその当時は思っていなかったんです。神戸高校はいわゆる進学校ですので、教頭として進学校に呼ばれたと思っているんですけども、このとき「自分はその道でいきたいなあ」と思った。特に進学校のキャリア教育は自分のテーマですので、その路線でやっていきたいなあと思ったんですけども、校長として初めて行ったのは西日野にじ学園、特別支援学校でした。まったく経験がない。いわゆる知的障害を持つ子供たちだ

ったんですが、どんなふうに対応していいのかわからなくて、本当に未知の領域でした。それでも3年間おらしてもらって自分自身の考え方ですが、勘違いされると困るんですが、これはあくまで学力ということだけです。人間的に上や下や、というつもりではないことを、本当にここだけは勘違いしないでくださいね。

例えば学力的な部分で言うならば、そのトップ。自分がどちらかというをやったのは、津高校のときに何を言ったかという、「お前らは三重県をつくっていけ。リーダーとして」。というようなことを言ったんです。要はリーダーシップ教育ですね。トップを対象にして、だからこそ「あなたたちが三重県を支え、引っ張っていき、そうでない子らもなんとかせいや」と。ノブレス・オブリージュは、そういうところから出てきた言葉です。でも、特別支援の子とつきあう中で、このみなさんの中でどれくらいの方が行かれたかわかりませんが、行かれた方はわかるとは思います、彼らはすごく素晴らしいんです、本当に。ある意味、我々ができないことを持っている子がいっぱいいるんですよ。特に勤勉であるとか、誠実であるとか、本当にこれはかなわんと思う子がいっぱいおるんです。

でもこれからAIの時代になってくる。そういう時代に、その勤勉であるとか誠実であるということだけでは通用しない世の中になるんだろうと思います。

それと、これは嫁に言われたことですが、こう言われました。「例えば掃除をやるときに、『ここを掃いて、このゴミを放ってきて』と私たちは言う。そのときに『なんでそんなんを私がやらなあかんのか』という子に、『神様や他の人は世の中をよく見とるんや。真面目にやっとな子は人がちゃんと見とってな、社会でも通用する子になるんや』というふうに言うよ。そしたら、AI時代になったらそういう子はこれからもういらんわけ？」と言われました。「あ、そうやな」と。そういう子も含めて探究活動をしろという話なのかもわからないんですが。もちろんできるかもわかりません。

実は県内のいわゆる教育困難校に勤めていた先生方に来てもらって、アクティブラーニングやキャリア教育の話をしたんです。「アクティブラーニングやりましょう」「キャリア教育やりましょう」と。でも、例えばぼくが行ってたような学校では、頭でわかるので、「ここ掃けよ」「挨拶しろよ」と一回言えば生徒はできるんです。でも、授業ひとつとっても何ひとつとっても、たぶんできるようにはなるんだろうなと思うけど、教育困難校の彼らの場合は、それはすごい労力があることなんですよ、ということ言われたんです。それも正解だと思います。ということを考えると、「学力的に上位の子だけを相手にしていればいいのか？」ということを考えさせられました。

四日市商はハッキリ言って、自分のテリトリーです。そのテリトリーの中でやっとな分については、3年間おらしてもらったんですが、やっぱり生徒はすごい変わりました。ただ自分のキャリア教育の中では「全ての学校」「全ての生徒」「全ての子どもたち」がキャリア教育を受けなければいけないという思いがあるもんですから。

これは3年ほど前に言わせてもらったんですが、この研究会には、素晴らしい研究があります、素晴らしい実践があります。素晴らしい先生方もいて、そういう意味で言うとスーパーティーチャーなんでしょう。そもそもこの場に来ているということからして、そんだけ意欲があって、力を持っているということだと思います。たぶん数多くの研究会やセミナーがある中でこの会を選ばれたというのもセンス的にすばらしいと思いますし、そういう中でフォーラムに参加した先生

方が、「じゃあこのフォーラムで言われていることをやっていけばいいんだ」と思うかもしれませんが、でもそんな学校ばっかじゃないんですよ。

私が四日市商でやりたかったのは、とにかく普通の先生がやれる、誰もができるものでなければいけない。素晴らしい実践があつてそれが 100 だとするならば、ぼくは 30 でもいいと思う。そのかわり 30 でいいからみんながやってほしい、教師全員にキャリア教育をやってほしいという思いがあります。こういう思いでやってきました。

⑤これからの普通科高校の探究はすごく工夫が必要になる

四日市商業に行きまして、全高等学校の中の 72%を占める普通科高校が現時点で実践するのはしんどいと思いますが、四日市商業は（初めての専門学校、始めての実業学校だったんですけども、）いわゆる課題研究、「探究」をすでに実践しているんです。だから例えば、うちがやってるようなのを見てもらうといい。なぜそれがいいかというと、誰でもできるサンプルだからです。ただ、工業も一緒かもしれませんが、商業は先生が多いんです。うちの課題研究で言うならば、2 コマの課題研究の時間で延べ 14 人の先生が担当できます。普通科ではできないですね。これをどうするかは現実問題として考えていかなければならないと思います。

1 人の先生が週に 1 コマで探究活動を、しかも授業でやるということは教員全員がやらなければならないということです。では、どういうことがその中でできるか、どういうことをしていけばいいのか。例えば地域連携で言うと、今は一部の学校がやっているだけです。対応できるんだと思いますが、これがみんなが企業に向けて活動していったら、地域にいつてしまったら、本当に対応できるんでしょうか？

先ほどの大学の出張講義の話ですが、ぼくらは導入が最初だったので三重大とやってもみなさん来てくれました。でも三重県下で「こんなことやとるで」とみんなが三重大とやろうとしたらすぐパンクです。実際にパンクしたので三重大は「もう派遣しません」という話になりました。だから実際に普通科高校がこれから先やっていこうとするならば、すごい工夫をしなければならんじゃないか。その答えは今の私にもありません。

そういう意味では学力の上位 10%あたりをターゲットにしていた過去の自分の考えというのは、これからの時代にどうして行けばいいのか。そういうことを考えながら自分自身これからやっていきたいと思っています。

3 「キャリア教育」への現状認識

①「キャリア教育」の普及は全国で 30%？

今説明してきたような意味でのキャリア教育は「どうなっているか？」というと、これはあくまでも私の推測でしかないんですけども、実際にいろんな学校に行つて話をさせてもらつて、キャリア教育の認識は確かに広がったと思います。

しかも、こうやってセミナーをやつて全国の素晴らしい先生方に来てもらつて、話をさせてもらつて、キャリア教育は全国にすごく広がったと思いますよ。産業能率大学のセミナーは地方都市としては名古屋が初めてですが、来週は他でもやるし、全国でこういうセミナーをやるようになりましたよね。ぼくたいがい行かせてもらつてるんですが、最初に行つたところなんて、それぞれの地域では素晴らしい先生がいらしていると思うのですが、アクティブラーニング一つとっ

でも「アクティブラーニングって何ですか？ わからないので今日ここにきてみたんですけど」という方がいっぱいいました。でもその先生方のレベルでは「アクティブラーニングって何？」「キャリア教育って何？」ということは今は無いと思います。少なくとも学校で「全くキャリア教育の認識が無い」という所は無くなっているんじゃないか。ただ、「実践しているかどうか」となると、資料に書きましたように普及としては30%ぐらいじゃないかと思います。

② さまざまなフォーラム・シンポジウムのおかげでキャリア教育はかなり普及

さまざまなフォーラムやシンポジウムのおかげで、高いレベルでキャリア教育はかなり進んだと思います。先生方もそれぞれの学校で実践している。あとはそれをどうやって広めるか、ですよ。

3年前の名古屋の会場でもぼくは言ったんですが、四日市商業高校でキャリア教育については言いましたが、「アクティブラーニングをやってほしい」とか「アクティブラーニングをこうやってちょうだい」といったことは全く言っていません。もちろん個人レベルでやっている先生がおります。10人ぐらいの先生はやってる。ぼくは四日市商の弱点は、探究活動の実践はあるんだけど、その理論、「こういう力をつけさせたい」「こういう人間を育てたい」という部分が弱いと思っています。これがあれば活動そのものはすごくいいと思う。それでも、そのような理論を元にやっている先生もいて、その実践の授業を受けた生徒はけっこう力がついています。特に「課題研究」を3年生でやっていて、3年生の最初の頃と卒業前を比べるとものすごく力がついたことがプレゼンを見るとわかるんです。だけでももちろん生徒全員が同じレベルでやっているわけじゃないので、力がつかない子もいます。一方で、生徒側もやっぱり受け身で、先生が黒板に書くものを写してテストで100点取るのがいいと思っている。あるいは、そういう「プレゼンがあるから学校に行きたくない」という子もいるんです。だから、理論的にすばらしい授業もあって、一方で昔ながらののんびりした授業をする先生もいて、力をつけたいので集中して頑張る授業もあって、そういう子が「ゆっくりできる時間というのがあってもいいんじゃないかな」というぐらいの、それこそ「ゆっくり、無理をしない」というのが今は正解じゃないかと思っています。

③ 異なった認識と遅れたままの学校の存在

このことは私の認識と異なる認識とで、それはどちらが正しいのかはわかりませんが、自分が考える市民性を中心としたキャリア教育ということで言うならば、その認識は違うよねという学校が多いと思います。あるいは、「その学校での流れをなんとかしたい」と思っているけど進められない、立ち遅れたままの学校の存在はかなりあるんじゃないか、というのが私の認識です。

④ AIの時代にみんなが幸せに暮らすには？

もう今はひとことでAIの時代と言われますが、その中で、例えば本校で言うなら就職活動事務系みたいな子が多いんですよ。8割ぐらいが事務系だし、それも実際に本当にいけるんです。ただ企業側からすると「事務」という求人はあるんですが、実際に事務の仕事をしていればいいということではなくてもっとコミュニケーションを使う、例えば銀行では単に入金、出金という預貯金のことだけではなくて、おじいちゃん、おばあちゃんと話をして「こんな商品があるですよ」と説明して理解されるような「きちっと信頼関係を築けるような能力が絶対に必要だ」と言

われるんですよ。だから勤勉、誠実だけの人間は社会の下層になってしまうんでしょうか？ 先ほどのうちの嫁の話じゃないですけども、そういう可能性だってあるんじゃないかな、というのが私の認識です。

4 地方での人材育成

私は、地方分権制が必ず来ると思っているんです。というよりも、そうでないとやっていけないし、日本そのものが立ちいかないんじゃないかと思っているんですよ。これまで地方の公立の進学校でだいぶ浸透していたと思うのは、地方で育って、大学ないしは社会に出るときには地方にいないで都会に行ってしまう。なぜなら「地方には仕事がないから、地方ではお金が儲けられないから、生産性がないから」ということで出て行ってしまう。今までそういう流れのなかで「東大に入学は何人や」ということで地方から都会に生徒を出していたんですが、その子らはもう地方には帰ってきません。それでいいのか？

今日の分科会での話にありましたけれども、今そういう子を戻すためにいかに故郷に対しての教育をやるか。すごい大事だと思っているんです。例えばいろんな自分の見聞を広めてほしいので東大に行ってもらっていいんですよ。高知大学にも行ってもらってもいいですよ。いろんなところに行ってもらって、そしてその子らがすぐにじゃなくても U ターンして、あるいは I ターン、J ターンでもいいです、それらを視野に入れながら高校での教育ができればいいな、と思っています。

5 これから取り組みたいこと

①地方の人材育成

冒頭で話がありましたが、私は今年で一応定年です。やる気はあるんですが授業をやって、部活指導をやって、というのは自分の中ではもうできないなと思っています。私はもう授業から 10 年離れています。勝手に課外授業をやったりということはあるんですが、今日の大村先生、鈴木先生の話聞いていてもこれはすごい、絶対にようやらんわと。それで逆に自分はコーディネーターをやりたいと。こないだも普通科の高校の先生と話していたんです、「令和 4 年（2023）から総合的な探究の時間が入ってきたやん。探究活動はなにやんの？ 授業しはんの？ どうすんの？」「ええ。困りましたね（ため息）」これで終わりです。これは探究活動を全然やってない立ち遅れた学校の話じゃないですよ。かなり進んでいる学校でも、一部の子にやるのはできるんです。でも生徒全員やろうとするときにどうするの。これは本当に考えてもらわないと。

だって、カリキュラム、教育課程は変わりますけれども教員の人数は増やしてくれないですよ。うちはそれでも商業なので課題研究に 14 人の先生をつけているんですよ。それを 1 人でやるんですよ。さあどうするの、というのはもっと真剣に考えられてもいいんじゃないか。

私の考えとしては、もうちょっとレベルを落としてでもみんなができるという方向性でやる、その中でもさらにやりたい子はまた今と同じようにレベルを上げてやっていく、そういう方向性でもいいんじゃないかと思います。その代わり探究的思考の授業はみんながやってほしい。どんな子もそういう経験を積ませてほしい。このように思っています。

でもそのために「学校の先生がコーディネーターをプラス ON してもう一つやりなさい」というのはしんどいと思うんです。私はそういうコーディネーターの役割を担えればいいなと思って

いるのが1つです。それから若手の先生を教育するというのもやりたいなあと思っているんですけど、これは三重県の若手研究会には「もう来るな」と思われているかもしれませんが、お邪魔していらんことをひとこと、ふたこと言うことで、続けていきたいと思っています。

②「キャリア教育」の普及

この「普及」というのは何かと言うと、立ち遅れている学校でキャリア教育を受けてない生徒がいるってことを、ぼくはすごくマイナスに感じます。30%でもいいからやってほしいと思っているので、「無理のない程度にこういうことをやってくださいね」ということを全国に伝えたいと思ってここに立って喋っているんです。地方の人材育成、キャリア教育の普及、この2つができたら嬉しいです。ただ私も食べていかなあかんので、ボランティアでやるわけにはいかないので、どこかでやらせていただけたところがあればお声掛けいただけたとありがたいですが、どうなるかわかりません(笑)。来年の今頃は「私は無職です」ということになっているかもわかりません。ま、60歳までやれましたんで、そうならってもしゃあないなと思っています。

ここからはまた服部先生のお話と、対談ということでさらにプラスアルファのお話ができればいいと思っています。とりあえず時間通りに終わります。ご清聴ありがとうございました。

キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらせたもの

三重県立四日市商業高等学校
校長 鈴木 達哉

前 岐阜県立郡上高等学校
校長 服部 弘幸

ファシリテーター
立命館宇治高等学校
酒井 淳平

一 酒井

では服部先生から3分～5分のスピーチをいただきます。その後に私から3つほどのテーマを用意したので服部先生と鈴木先生に順番にお話いただこうと思います。

一 服部

みなさんこんにちは。私の言葉はダイイングメッセージですので（笑）、聞き流していただきたいと思います。

最初に自己紹介をいたします。岐阜県美濃市生まれで、野口五郎の出生地と同じです。彼とは1回だけ一緒にボール投げをしたことがあります。もうひとつ、印象を残していただくために。東海三県にはNHK総合夕方に「まるっと」という番組をやっておりまして岐阜では「まるっと岐阜」というタイトルです。更に月に1回、「まるっと郡上」というのをやっています。そこでは俳優の近藤正臣さんが郡上を紹介いたします。3月に郡上高校の放映がありまして、30分ぶち抜きでずーっと私が紹介して歩いて映っていたもんですから、放映中に私の携帯が鳴りまり「出すぎじゃあお前は！」って先輩の先生からすごく叱られました。近藤正臣を紹介した服部でございます（笑）。

さて、鈴木先生との出会いは、やはりキャリア教育です。今から10年ほど前にキャリア教育の一環として「社会人基礎力」の養成というのが少し流行り始めたときです。いい講演をしてくださる東海地区の大学があって、講演を依頼し連携を結びました。同じころ同様な連携をされていた鈴木先生（既に津高校の教頭先生になられていましたが）、大学が出したパンフレットに2人で顔写真入りでメッセージが出ていました。そして、産業能率大学との出会いは、このセミナーの仕掛人、林さんが私と同じ美濃市の生まれで、あるセッションで東京赤坂で出会いました。出会いとは恐ろしいものでございます。

さて私はずっと岐阜県の教育に携わってきました。進路のことばかりやっていました。岐阜県立古城高校という地域連携キャリア教育で最近クローズアップされている高校に3年、そして地元の県立高校に11年間、可児高校に12年間いました。可児高校では学年主任を3年間、そして進路指導部と進路主事やっていました。私が赴任したころは東大合格ありきであった学校で、3年生になると模擬試験が30回もありました。赴任してすぐにその異常さに違和感を感じて、心がしんどくて、「こんな学校でいいのか、偏差値だけでいいのか」というのを言っていた記憶があります。

その後小・中学校の兼務教頭を、進学校の教頭、次は工業科と商業科を併設する学校で副校長、最後に農学科と総合学科と普通科が併設される学校で校長を務めました。いろいろな経験をさせてもらい、もう何も怖くはありません。（笑）あとやれたらいいのは生活科学関係と水産関係です

ね。(笑)

このような経験の中で、学校には必ず課題があって、それらを越えて一生懸命先生方が子どもを育てているかというのを学んできました。それぞれの学校で、それぞれの課題がありますから、解決法と言いますか「うまくいかないかなあ」と考えていました。例えば、最後の郡上高校は、先生方が平均20時間近く授業を持っていらっしやって、諸会議を開き、何故かを考え、最終的に教育委員会にお願いして学科改編や、先生を増やすことに奔走しました。また、その前の商工併設の学校では国公立大学への進学を希望している子どもたちに、どうすれば彼らが合格するかと、生徒の頑張りをアシストすべくの仕組みを考えていました。

一酒井 質問① お二人にお聞きしますが、この20年ほどを振り返って、今でこそ偏差値だけでいいのかということところにも一定の理解は得られていると思います。その背景にキャリア教育やアクティブラーニングがかなり広まっていったというのがあると思いますが、お二人からみて、キャリア教育・アクティブラーニング・探究といった、流行りというか、流行するキーワードが高校にもたらしたものは、いったいどんなものだったと思われますか？

一服部 バブルの頃を思い出すと、偏差値アップ、そして点数を取らせて「大学に入れてなんぼ」という指導でした。いまだ脱し切れていない普通科高等学校は多いと思います。専門学科の高等学校においては、推薦・指定校推薦を使ってニーズに合わせて、進路指導よりも、まあなんとか結論を出すというのが状況じゃないかと思っています。

ところが受け入れる側の大学では、入試を受けに来た生徒・入学した学生に対してどうも違和感がある。特にいわゆる偏差値が高い大学では「同じような輪切りの生徒しか来ない」という違和感に対し、多様な学生がほしいということでAO入試や小論文入試が行われたんじゃないかと思っています。

文科省はキャリア教育を1999年に、その後、内容を2003年頃に改訂し、充実した人生を送るための、子どもたちを育てるための教育を高等学校でやりなさいと制度改革しました。そしてキャリア教育は徐々に取り入れられていき、農業科だとプロジェクト学習、工業科と商業科はすでに課題研究が導入しましたが、普通科はキャリア教育という言葉がなかなか理解されずに、言葉だけが動いていた。小学校・中学校はもっとひどくて、いまだに職業教育が続いているわけです。

普通科の先生のなかにも、キャリア教育という言葉を受けて、鈴木先生のように「これだ」ということに対して労を惜まず、生徒を社会につなげるために一所懸命取り組まれる先生方が登場されて、キャリア教育が活発化したと思っています。

ところがです、高等学校は学びの方法がほとんど変わっていない。そこに、ちょうど10年ぐらい前に、産業能率大学を中心として「アクティブラーニング」という言葉が躍った。そのアクティブラーニングという言葉に興味を持ったのは、おそらく全国の400～500名の先生じゃないかと思うんです。「生徒を主体的に学ばせなきゃいけない。新しいことを受け入れて教師が学んでいかないといけない」と思った先生方が、アクティブラーニングという言葉で自分たちの授業を変えようとした。つまりアクティブラーニングの向こう側にあったのは、生徒の主体性と学

ぶ教師であったと思うのです。

10年ぐらい前から約7～8年かけて新指導要領の内容をどうするか深い論議がなされました。キーワードは「主体性」。その主体性を増すために「特別活動」と「評価の3観点」であるというように提案されたんじゃないかと思います。

私が管理職になった8年前、こんなに高校教育の世界が変化するとは思わなかった。アクティブラーニングは、思考力・判断力・表現力を引き出すための自然の指導です。

今後は、ますます主体性を学ばせる教育は進化していくというか、変わっていくと思います。とても期待しています。

一鈴木 では私から。またここにいて皆さんの目が怖いですね。めっちゃ真剣な目なんで。まずはさっき酒井先生から、「キャリア教育、アクティブラーニング、探究がもたらしたもの」と言われ、そこに「流行り」「流行」という表現が使われましたが、ぼくは、これは流行り・流行ではなくて必然の流れだと思っています。それは自分がキャリア教育を深く考えていったら、授業だけを抜きにして考えることはできなくて、絶対授業でもキャリア教育をなすべきで、それはアクティブラーニングという形になっていた。だからキャリア教育をするってことは当然アクティブラーニングになるだろうと。それが次の段階で探究活動になる。これがある程度、日本の教育の改革では、完成形になるかな、と思います。後は、手法としてこれからどうやっていくか、ということを考えればいいだけで、ぼくはこの流れは基本的に賛成です。

ついでに言いますと、私自身はキャリア教育をやり始めて、当然アクティブラーニングに流れ着きました。そして「一人ひとり」というところを考えていくと、「コーチング」に考えが至り、「コーチング」を取り入れようということになっていき、さらにキャリア教育、ないしはアクティブラーニングを進めていくと、探究活動になる。いわゆる大人化するというと、探究活動にいくだろうと。その次がESD教育で、そう言ってる間に「ああ、SDGsが来たな」というところ。たぶんこれがある程度の完成形だろうなと思っています。流行というよりも、当然そういう流れになってくるんじゃないかなと思っています。

実はここでちょっと敬意を表したくて、鈴木建生先生がいらっしゃいます。ぼくはずっと鈴木先生とお付き合いさせていただいて、先生は常に私の一歩前を進んでいらして、「キャリア教育、アクティブラーニング、ESD」というものをかなり前から言ってもらった。そしてコーチングについては日本でも有数の先生です。同じ地域に鈴木先生がいてもらえることはありがたいし、これからも一緒にやっていけたらありがたいと思っています。以上です。

一酒井 質問② お二人が現場で、また管理職としていろいろされてきた経験から、学校変革をする、そこまで大きくなくても取り組みを進めるうえで、大事にした方がいいことについて、お聞かせください。

一服部 これは、私の過ごした教師生活をお話しすればいいのでしょうか。進路ばかりやりながら、学校が変わるたびに、それぞれの学校に赴任した時に感じる「おかしいな」とか、「こうしたら子どもたちのためになるのに、逆行することをしている」といった違和感を感じたとき、その違和感がおそらくその学校が抱える課題であると思ってきました。

例えば、年間30回の模試をやっていた可児高校と言いましたが、システムは非常にスマートな学校です。8時15分から学校が始まって、17時半になると子どもたちを追い出します。下校が遅れると「遅下校」と言って、部活が1週間禁止になるとか、学年集会を開き生徒を叱るとか、教師にとっても「働き方改革」を進めているシステムでした。模試を30回やっている現場に目を向けると、3年生になって授業についてこれなくなった子たちは置き去りにされて、0点のオンパレードです。でも卒業させてしまうのです。生徒は荒れています。本当は学校では楽しく学びたいのに受験中心の指導でどうすることもできない。赴任してすぐ担任になったんですが、「こんな教育をやっているはいけない」、「自分の学年は30回も模試はやらん！」と言って全部削りました。(笑)他にも理由もないのに集会が毎週月曜日にある。放課後の教室が汚い等「おかしい」と思うところはみんな削りました。進路部会では「こんなことをしていたらとんでもないことが起きるぞ」と話していたんですが、赴任し数年で現実になりました。これらの体制が大きく反省材料になったのか、教訓として生かすというか、教育そのものが何であるかということ語る一つの材料となって、私は「自分の学年はこんなことせんぞ！模試を少なくする！」といったことが現実化されて、他の学年も現実を見据えた模擬試験の回数となりました。いや他校よりも少なくなったと思います。学年主任の時には、机の上に勉強道具を置いて帰る「置き勉」をなくすことや、過去現在未来を考えた話、偏差値という言葉ができる限り出さないような指導をしました。各務原西高校の教頭の時、先生方に危機管理意識が全くなくて、雷がゴロゴロと鳴ったとき「すぐに放送をかけてください」と言っても、だれも動かない。「何を教頭は言っとる？」という感じでした。「もし、雷が落ちて人が死んだらどうするんですか」、「そんなん、落ちへんわ」。そういったときにたまたま学校は、県から2年間にわたり2億円余りというお金がついて外壁の塗装工事をしました。そのときに職員室の改造も事務長に掛け合ったんです。ぐちゃぐちゃな職員室、学校ができてからほとんど30年間動いていなかった荷物を「捨てよう！」と先生方に言いまして、「そんな、捨てんでもいいがや」、「いや、先生こっちのプリント見てください、15年前のもですよ。捨てましょう」(笑)と。窓際のロッカーを取り除いて、床を5センチ上げたO Aフロアにして、先生方の間をなるべく風通しがいい職員室にしました。ブツブツと言われました。「こんなことせんでもいいし」って。でも少し時間がたつと先生方はちゃんと子どものことを語るようになったんです。生徒のことを言うようになるんです。

違和感があるときに、それぞれの立場で何かをしてみることが、必要だったんだと思います。商業科・工業科に行ったときに、商業科に進学クラスが作ってあってそのクラスの一期生が20名あまりいたのですが、指導あぐねている先生方に対策として、小論文と面接をポイントを押さえて指導するのならば生徒は伸びる。いまの言葉で「思考力」・「表現力」・「判断力」を育成する指導をしよう、というシステムづくりをしました。すると前年度まで国公立合格者が0名だったのが10名合格するようになり、工業科にも「進学グループ」という名称で岐阜大学工学部を目指し生徒たちのカテゴリーを設置しました。

郡上高校では学科改編し、単位制をひき、先生の数を増やしました。赴任するそれぞれの場所で、感じた違和感を解消するような取り組みしていけば、学校が少しづつ変わっていくんじゃないかと思います。ただし、なかなか急には変わりません。学校という組織は。

その郡上高校では学科会議をして、単位制の農業科と普通科の2学科になりました。学科間で履修の乗り越えができるようにしました。また、普通科は3クラスしかなかったので、「今後は文系、

理系に分けちゃだめだ。これからは文系・理系に分ける時代じゃもうないから」と。「文理混合でそれぞれの進路に合わせて主体的に科目を習得する制度をとる。例えば、難関大学や医学科を狙うトップの子たちには文理混合でクラスをつくり、進路に合う進路指導をすればいいんだから」、ということにしました。でも最近ホームページを見たら、新しい1年生は文系と理系になっていました(笑)。モノ言う人がいなくなると元に戻ってしまうのかな。少し悲しみを覚えながらも(笑)、誰かがそれを覚えていてくれて、言い続けていてくれたら、きっとみんなの見本となるような未来の学校ができたんじゃないかと思います。

もう1ついうと、私は「無駄な考查をやめたらいい」ってずっと言っていたんですよ。例えば冬休み。26日から冬休みになって、年明け5日に出勤する子どもたちに対して、なぜ課題テストをやるのかと。先生方だってテストをするのは大変ですよ。子どもたちに宿題・勉強をさせなきゃいけません。テストをやったら先生方は採点がありますよね。で、それをやってどうなのと。前時代的な進路指導って残ってますよね。私は「そんなの止めちまえ」って言ったんですけど、おそらく戻るだろうな。一応こそそこそと今年度の年間計画で課題テストを消したんですけど、新しい年度には入っていたんですよ(笑)。「何のために」という言葉を持ち続けないと、なかなか学校は変わっていかないなと思います。

一鈴木 私は2つありまして、1つは、無理をしないこと。朝から皆さんがおっしゃっていますね。無理をしてきた人間から言いますと、もう今ではそもそも無理です(笑)。出張講義なんかでも、「なんでこんなやるのぉ」と言われながらも、やってみたら、先生がすごく変わりますんで、やってみて結果出して、あとから人間がついてくるという無理やりのやり方をやってみましたんですけど、今はもうやるが多すぎるんで、もうそういうのは無理です。だから、無理を押してやったら先生方が反発をくらってゼロになってしまう。マイナスになってしまいます。だから私はさっきも言いましたように、100をめざすんじゃなくて30でいいので無理せずにやってもらうのがいいんじゃないかと思います。

それからもう1つは、それでもスピード感をもってやりたいなと思う先生がいたら、ぼくは管理職になってくださいと言いたいと思います。自分自身が進路部長でやったときは、なかなか皆さんが動いてくれませんが、当たり前ですけど。学校は保守的というか動かないという文化がありますんで難しいんですが、同じことを管理職になってから、特に校長になってから言ってみると反応が全然違うんですよ。

例えば四日市南高校が3年間であんなに変わるなんて、自分自身は全然、思っていないんですけど。3年間でここまでできたらいねという自分の計画はあったんですが、なんとそれは1年半ぐらいで終わってしまって、逆にかなり進んでしまい、「このペースで進んだら俺のやる事がなくなる」と思うくらい進みました。今の学校で言うなら、こないだ県の教委から電話があって、「四日市商業の先生と話をしていたら、主体性、主体的、生徒の主体性って言葉をものすごく言うんですけど」と言われました。今年になってから「キャリア教育プラス主体性を養う」というのを生徒に言ってるんですが、そういうのを校長で、あるいは管理職で言い続けていると、浸透が全然、違うと思います。ぜひとも、20代、30代、40代の方は自身で管理職になってください。50代の方は、先ほどの話ではもう間に合いませんので(笑)、自分が管理職になる代わりに、管理職をだまくらかして、管理職の先生から「わしもそう思ってたんや」と、自分の考えやなく

て、校長先生の考えとして語ってもら、というくらいの芸をしてもらわないと自分のやりたいことをやれないんじゃないかな、と思います。がんばってください。

一酒井 質問③ 次の世代に伝えたいことをぜひ一言ずつお願いします。

一服部 これが最後のダイニングメッセージですね。もう少し、教諭をこの時代にやっていたかったな、という感想です。今回の指導要領の改訂というのは、昭和46年以来の大きな改訂です。当時は総理大臣の田中角栄が教員の給料を25%アップしたとか言われていますが、実はそれは中教審の答申の中に入っていて、先生の給料、共通一次の実施、特別支援教育、そういうのがいろいろ書いてあるわけです。そこに書いてある内容が実施され、その後延々と50年、今もやっている教育なんです。10年ごとに指導要領は改定されてきたわけですが昭和46年発表のものと基本的には変わっていない。PISAの学力調査がV字回復した理由とされる「総合的な学習の時間」が入ってきたのは大きな変化ではあります。

今回の改定は46年の答申以来の、大きな改訂です。その中でのキーとなるのは「主体性」と、「三観点評価」です。社会において、会社がやっている評価はこの「三観点評価」です。知識・技能に相当する日頃の知識注入。一番大切にしたい社員がどう行動するか、つまり思考力・判断力・表現力です。この育成に対し会社というのはお金をかけますよね。そうすると自然と会社に貢献する態度ができ上がって、いい人材が育ち、いい会社ができ上がるわけです。この「三観点評価」を教育の場でどう導入していくのか。通知表で、国語が5だ、社会が4だ、という数字の羅列を見ても、子どもの姿は見えてこないわけです。ところが観点別評価にして、思考判断表現力を例えばルーブリック評価。知識技能は我々が得意な5段階。態度は自己評価やルーブリックを使う。こんな評価をどう学校現場の教育の中に埋め込んでいき、子どもたちが見えてくる通知表にしていくかというのは、ひとつの大きなポイントになります。観点別評価について論議されていますが、大学受験指導ができないという理由で全国高等学校長協会は反対しています。おそらく、急にはできない。でも、中教審の論議は子どもたちが見える観点別評価に変わっていくと思います。

そういう評価の時代、そういう育成の時代に生きるこれからの教育ですから、子どもの姿が見えるように。全国どこでも昔のように荒れた子どもたちは少なくなってきましたから、生徒指導でなく、学びをガチで子どもたちと向き合う先生方になっていただきたいと思います。

郡上の小学校の先生で面白いことをやっている人がいます。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」そして「学びに向かう態度」というのを、ダイレクトに小学生に授業でやっている先生がいます。「じゃ今日のめあては…」「最初に学ぶのは何？」生徒は「知識・技能～！」と先生の言われることを、学び始める。学んだあとに、「じゃあ、次にこの課題はどうする？」と投げかける、子どもたちが自然に教室の中を動きまわって、友達をみつけてグループで床の地べた議論して、わかるとまた机に戻ってくるんです。おしゃべりなやつがいて、「メタ認知できました」とかやっとなります。(笑)「おいおい、メタ認知ってこいつらわかるんかい?」「わかります、子どもって難しい言葉が好きですから」「なるほどね」。そんな素敵な授業を中学校、高等学校と続けてやれば、社会につながるんじゃないかと思ったのです。日本の学校がメタ認知ができる子どもたち、アウトプットできる子どもたちを、育てていけたらなあと思います。

僕はたまたま、小・中学校の兼務教頭やいろんな学校に行かせていただいたので、今の学校に何となくちぐはぐに感ずることがあります。学校は、小学校中学校は、中1ギャップはあるのですが、学びはなんとなくうまくつながっています。ところが、高校の学びのハードルはやはり高い。知識が膨大過ぎて学びがうまくつながらない。これを少しでも解決すべく、この場のようなセミナー、小学校・中学校の先生方との交流等を活発化することによってずいぶん指導方法も変わっていくと思います。高校は知識教育が主ですが、思考力・判断力・表現力を深めれば子どもたちは賢くなるんです。知識の吸収に差異があっても、社会へ出て活躍できるようになるんです。我々と同じ大人になるんです。そういう子どもを支えられるような幼・小・中・高・大につながっていないかなと思っています。

最後に1つ。学校はどうしても必要な場所だと思います。親と子の関係は学校外。友達との関係、第三者としての教師と生徒の関係が学校です。第三者としての専門的な目で、よく観察している先生方がいる「学校」という場所がどうしても必要です。今N高校のようなところも存在が大きくなりつつありますが、やはり細かく面倒を見る先生方はいるわけです。

学校というのは、とても大切な場所です。我々は今、失墜してしまっている教育界を、先生という職業を、やはり元の位置、あるいは、給料が高く上がっていくような、そんな崇高な職業になるように先生方に頑張っていただきたいと思います。

一鈴木 これも2つあります。仲間をつくるということ、プラスそれを大切にする、ということをもまずお伝えしたいと思います。今日は実は三重県から26人の先生方がいらしてます。でもほとんどの人がいや、全員がもう身内みたいな人ばっかです。もう最後の看取りをするというか、病院に駆けつけるというくらい。こうやって一緒に改革を進めてきた仲間というのはすごい大切ですので、ぜひとも先生方もこれから改革、ないしは実践をつなげていこうというのであれば、仲間を大切にしていきたいと思います。

先ほど講演で、教育困難校の先生方を集めて、話をしてもらったということを話しましたが、そのときに、ぼくらがおったいわゆる進学校というのはすぐに結果が出るからやりやすいんですよ。すごく気持ちもいいんですよ、成長したな、ってわかるんで。でもその学校の場合は、進んでいるのかいないのか、全然わからない。「これでいいのか？」と自問自答しながらやっとなんと言っていました。じゃあ「気分が落ち込んだときはどうしとんの？」と聞いたら、この場のような研修会に出て、「本当に自分はこれでいいのかどうか、ってことを確認している」と言っていました。なるほど正解だな、と思います。仲間と言うのは、自分と志を同じくする人という意味合いでも大切にしてほしいです。これが1点め。

それからもう1つは、今日は名古屋開催ですので、皆さんにぜひとも地方を盛り上げてほしいと思っています。もし放っておいたら地方は衰退していくし、これに気づいた人がやらないとダメだと思っています。実は私は四日市市に入り込んで、教育界や市役所や商工会議所でいろいろやらせていただいているんですけども、四日市は今、人口30万人で、規模は理想なんです。人口そのものは毎年ちょっとずつ増えているか横ばいか、というところです。しかし、この3年間で四日市市内の学校は、公立の学校だけでも全て1クラス減にしなければならないというほど、15歳人口が減っています。この意味にあんまり人は気づいていないんですけど、これはこのままいっただら大変なことになるんです。そういったことを含めて、今、私は小学校、中学校、保護者も含

めていろいろ話をさせていただいています。普通の自治体、普通の地方がこれからやっていくような、助成金を受け取らなくてもいいような自治体ができるように、自分はやっていきたいなと思っています。

三重県って本当に普通の県で、だいたい何をやっても 47 都道府県のうち 20 番から 25 番くらいに入る。それが 35 番くらいだったら「ま、誤差の範囲やな」というくらい。それが、今年の春の学力検査でなんと 10 位台に入ってしまったで大喜びで、もう来年はまた落ちるんじゃないかなと。でも、そうでない状態にこれからもしていきたい。そんな中で自分が必要とされるところから声をかけてもらえればぜひともありがたいと思います。文科省や教育委員会から言われることをそのまま鵜呑みにするのではなくて、「自分なりにアレンジしてやりましょう」と話をしています。自分が当事者として地方でやっていくということを考えてほしいと思いますし、自分自身もそのように関わっていきたいと思っています。よろしくお願いします。

一酒井 お二人の先生方、ありがとうございました。

新渡戸文化小中学校・高等学校

山藤 旅聞 先生

SDGs の視点による教育改革

～SDGs を通じて社会課題を「自分ごと化」する教育デザイン～

- 1 自己紹介と新渡戸文化学園の紹介
- 2 未来教育デザインのイメージ
- 3 時流を読む
 - ①時代のスピード感
 - ②物差しの変化
 - ③世界の動きと日本の動き
 - ④教師の立ち位置とは
- 4 これからの時代に求められる教育とは？
- 5 ぼくの SDGs
- 6 教科から他教科へ、そして学校全体へ
- 7 最後に。成功事例と夢

SDGs の視点による教育改革

～SDGs を通じて社会課題を「自分ごと化」する教育デザイン～

新渡戸文化小中学校・高等学校

山藤 旅聞

1 自己紹介と新渡戸文化学園の紹介

皆さん、おはようございます。山藤 旅聞と申します。ここですごく緊張しています。ぼくは今年（2019 年）4 月に、新渡戸稲造氏が初代校長である新渡戸文化学園に異動しました。学園は、幼・小・中・高、そして短大もありますが、全て 30 人×2 クラスの超超小規模校です。新渡戸文化学園の、新渡戸稲造氏の「アジアの懸け橋」という理念。さらに個性、個を大事にする教育、実社会に生きるための学び、といった理念が学園にあります。教育改革をめざそうとする集団との出会いがあり、彼らと一緒に働きたいと思って新渡戸文化学園に異動したばかりで、1 学期の 3 か月が終わったばかり、という状態です。本日はこの理念のもとで、この 3 か月で何をしてきたのか、ということをお話したいと思います。

もとは都立高校の教員を 15 年間やっていました。都立高校が大好きです。自分自身は、中学・高校・大学・大学院と私立でやってきて、職員になって初めて公立学校に足を踏み入れました。でもそこにはとっても素敵な生徒がたくさんいて、当時の 3 年間は、生徒と一緒にクラブ活動のテニス部に没頭し、さらには新規採用者として授業を日々組み立てて、部活、授業、部活の日々でした。その後、2 校の学校で勤務し、大学進学指導や、中高一貫校の経験をしながら、今は新渡戸文化学園で働きつつ、都立高校でまだ講師もやりつつ、自分で社団法人を立ち上げて所属し、企業にも 2 社に所属しながら、教育活動をしています。

そういう仕事の広がりから、公務員であることの限界がきてしまい、いったん民間の学校に出た、という形です。でも公立の学校は大好きということと、ここまでやってきたので、学校と言えば教諭ですが、せっかくだから、そうではない新しい生き方というか、働き方を、内部から発信してみたいという思いもあり、「学校デザイン」という肩書で今は活動しています。こう言うちょっと格好がいいんですが、または「は？」という感じでしょうか。でも 10 年後ぐらいには「あぁ納得」となって、いろんな学校デザイナーがどんどん生まれてくるといいなと思います。

そして、新渡戸文化学園の魅力はなんといっても、中学校が定員割れしています。これは超魅力的じゃないですか（笑）。先ほどの札幌新陽高校のように、3 年後に V 字回復していたとか、何が起きるかわかりません。時流を読み解いて、これからの時代に必要な教育を真剣に考えて、そして定員割れしているからこそ、カリキュラムで大胆なチャレンジができる。そこで皆で一致団結して一所懸命にやろう、というところです。もちろん既存の先生方もいらっしゃる。今までの私学への母校愛がある。そこにぼくのようなのが飛び込んでくる、といったところで模索している状態です。

今日は赤裸々に、自分の思いと、実践をお伝えしつつ、一人でも多くの方に新渡戸文化学園のファンになっていただいて、この V 字回復を応援していただきたいと思います。ご親族に東

京に異動される方がいらしたら「ちょっと新渡戸学園っていいかもよ」と本校に興味を持っていただけたらと思いつつ、プレゼンさせていただきます（笑）。

自分のツールとしてかなり力強く取り入れているのが、SDGs です（スライド 9）。でも SDGs を教えるということよりは、SDGs を活用して、「社会と学校をつなぐためのツール」として活用しています。SDGs は、非常に使える便利なツールだと思っています。そんな紹介もできれば、と思っています。

（スライド 9）

社会課題をまとめたもの = SDGs



ちなみに、昨日は生徒たちと三重県にいました。「定置網漁法」を生徒たちが経験しました。それで釣れるのは生徒たちが喜ぶような大きなサバと、箸にも棒にもひっかからない雑魚がいっぱい捕れます。雑魚はもうキロ 10 円とかの、養殖魚の餌になるしかないような値段の魚ですが、これをその場で食べると、もうめっちゃおいしいんですよ。この食べ方もよくわからない、つまり市場に並ばない魚たちが 90% ぐらいで、残り 10% に満たないくらいが市場に出まわる魚。子どもたちは、この知っている魚の 10% を喜ぶんですが、そうじゃない 90% の命がどうなるのか、ということを知る国内スタディツアーです。今回良かったのは、小学生と保護者、中学生と担任、それから短大生がきてくれたのツアーになりました。非常に良かったです。

昨日、国内スタディツアーの帰りですが、名古屋まで皆と一緒に帰ってきて、そこから私は福岡へと別れたんですが、生徒たちは、帰りの電車の中で、「私たちにできることは何かないかな」とずっと考えていました。あの捨てられてしまうような値段のない魚の調理法を参加した短大生が地元の方に聞いていて、この短大生は食物栄養学科の学生なんですが、①どう保存したら、おいしく、腐らないか、ということと、②冷凍品をそのまま現場から送ってもらって、「ご家庭でこ

うやって調理したら、こんなにおいしく食べられますよ」といった生産者と調理者を直接つなぐようなネット販売アイデアみたいなものを動画つきでできないだろうかと考えました。自分たちで動画を撮って、この活動に協力してくれた企業にプレゼンして、そういうネットビジネスのようなものをやれないかな、という原形アイデアが生まれ始めている瞬間で、まだ一所懸命考えている最中ですが、今度それを提案しに行こうと思っています。

ところが、実はその2日前まで、約1週間のボルネオ島でのスタディツアーの引率をしていました。こちらは、自分の学校の生徒もちろんいるんですが、他校の生徒と一緒に、つまり学校という枠を超えての活動で、これはどうしても自分でやってみたくて立ち上げたものです。企業とNPO、NGOと組んで、そして自分の社団法人で募集をかけておこなったボルネオ島スタディツアーです。12校21人の生徒たちと、皆さんのような先生方10人とで、合計31人で渡航してきました。そこに行って帰ってきて1日休んで、次の日から先ほどの三重の国内スタディツアーに行き、家に帰ることなく福岡にきました。

ボルネオ島は「環境破壊と経済発展のジレンマ」と、その「経済発展に関わる環境破壊の消費者が日本である」という非常にグローバルな話題をもち、実際に海が自分たちの生活とどれほど密接に関わっていて、どんな状況になっているのか、というのを肌で感じるツアーです。現地ではマレーシアの子どもたちと交流しましたが、彼らもそのことを知らないの、共に学び合い、夜な夜な乾杯です。「寝なさい」と言っても無駄で、聞くと子どもたちは夜中の3~4時までずっと語っていたそうです。恋愛トークじゃないですよ。途中でそれもあるそうですが、「どうしたらいいんだろう」って、ずっと考えていたそうです。モヤモヤを最大限に拡大していき、リフレクションのときに、話しながら自然と泣いてしまう生徒がいるような、本当に素敵なツアーが成熟していったんです。そんなツアーから帰ってきたばかりの状態です。

東京都には唯一の村、檜原村があります。過疎で本当に大変な村ですが、そこで耕作放棄された畑を完全開墾して、その土地の産物のジャガイモを育て、小麦粉を地元の食材と合わせて、すべて地産地消で、自分たちがつくったジャガイモを潰してあんにした「ジャガイモあん」をお祭りで販売する、という卒業生たちの活動がありました。卒業生たちも自分たちで社団法人をつくっているんです。そして檜原村からの助成金を受けて活動しています。これがボルネオ島スタディツアーと並行して動いていました。その卒業生の中には、かつてボルネオ島に渡航した子たちもいて、そんな生徒たちから刺激を受けながら後輩たちが、と言っても学校は違う後輩ですが、社会のために、未来のために、と思う教育をずっと平行してやっていた、そんな夏でした。自分の自己紹介はこのようなものです。

2 未来教育デザインのイメージ

実社会と学校をつないで、プロジェクトを起こしていくことを、特にこの2年半の間やってきました。大切にしていることは、学校が外部と完全につながることです。そしてアウトプットも外部に対しておこないます。そしてフィードバックも外部からもらう。先ほどの中原さんとまったく一緒のイメージかなと思います。そういうことをずっとやってきました。

今、教員16年目なんですが、10年目ごろまでは学校と大学・専門学校とつなげようというイ

メージが強かったのですが、あるとき気づきました。私の教科は理系・理科・生物ですが、進学校の高校3年生の「理系、生物クラス」の生徒が、高校卒業後に専門機関でずっと働いている生徒は何%いるのかな、と調べたときに、実は10%もいない、ということに気づきました。

文系の生徒も関わる教科になると、もっと基本的なソーシャルに生きる人たちが多くわかりました。だとするなら、教室の中でも探究をし、自分たちで課題を設定していろいろ学びをセットするんですが、全員に論文作成をさせることは、止めようと思いました。理系探究のようなことはイメージできるんですが、そうじゃない生徒たちが生物基礎でまたは選択生物の中で、どういうふうに探究ができるのかな、と自問自答を続けた結果、「ソーシャルアクションをデザインする」ということになりました。

なので「教室を、社会で起きていることをそのまま縮小させていきたい」というのが、今一番思っているイメージです（スライド3）。

（スライド3）



実は公立を離れたのは、自分で2枚目、3枚目のカードを持ちたい、という希望もあったからです。もう1つは、公立なのに、どこまでも縦て割りされている感じが嫌でした。

例えば、地元の子どもがみんな行きたいと思ったら行けて、教室の中に難関校をめざす生徒もいれば、芸術家をめざす生徒もいて、就職する生徒もいて、というそういう状態の学校が自治体に1校あってもいいんじゃないかなと思いました。

進学校で選抜された学校も、当然各自治体に1校はあっていい。2番手校もあっていいかもしれない。定時制もあってよくて、商業科もあっていい。ですが、あとそこに1校、何かソーシャル型の学校というか、社会そのままを縮小したような学校、例えばクラスには、漁師さんの子ど

ももいれば、大学に行こうとする生徒もいて、そんないろんな子どもが混ざっているような、多様性に満ちている学校があってもいい。さらに、10年後、20年後を想定した場合に、日本の人口減少を考えると、インバウンドが必要になると思います。ならば、教室にそのインバウンドの割合で、海外の子どもが普通にいるような状況というか、たぶんすでに日本で学んでいる人はかなりいると思うんですよ。そういう子どもたちをつないでいくようなことをしたい、というのがビジョンです。

今、新渡戸文化学園でチャレンジしようとしています。ゆくゆくは、これは、オープンソースとして、公立学校でもやっていきたい。もしかしたらもう一度、公立学校に戻ることがあるかもしれないですが、そんな思いでやっています。

教室と大学をつなぎ、かつソーシャルともつないだときに、子どもたちに笑顔が戻ってくるといいなと思います。いまぼくの目の前にいる笑顔を失った子どもたちの言葉をちょっと選んでみました。

「学校の当たり前に違和感を感じている」。(スライド3)

「数字で評価しきれない」。

下のはぼくですが、生物の昆虫好きとか鳥好きな生徒が、意外と生物基礎の点数が取れないんです。けど彼らはすごいんですよ。「先生、あれは足がこうだから〇〇科です」と言って、私は「おおーすごいな。おれは全然ダメわからない」、みたいな感じなんですよ。そういうことができる生徒に、「お前はそのまま行け」って言えない自分がいて、「ううう」というのもあります。

あと効率化ですね。「大人の都合によるカリキュラムの進み方、スピード感に対する違和感」。そのスピードについていけない生徒はいいんですが、ついていけない生徒が多々いるので悩んでいます。

それから、こういう生徒たちに出会ってびっくりしたんですが、高校1年が終わったときに文理選択があります。すごく素敵な子がいて、真剣に言います。「どの教科も面白くて選べないです」って。ぼく自身なんかはバツサリと「国語できない、社会できない、ハイ理科」といった感じだったのに、「こういう生徒がいるんだ!」と。実はいっぱいいるんですよ。そういう子たちが選択できない学校って、こら、あかんですねと。そういうことがいろいろともやもやして、いまだに解決していませんが、そういう子たちを学校で少しでも笑顔にするために、カリキュラムが無理なら、放課後でつないでいこうと。あとはせめて授業の中でつないでいこうと。そこからだんだんと学校に広げていっている事例を少しはご紹介できるとと思います。

自分が課題意識を持ったのは、教員になってちょうど8年目ぐらいでした。JAICAの教員海外研修制度で、当時3週間弱かけてJAICAが支援している途上国で授業をするという研修です。今も続いています。そこでぼくはブータン王国に行かせてもらいました。これの影響が大きかったです。このとき生まれて初めてパスポートをつくりました。実は日本の自然が大好きだったので、「海外なんて」とちょっと思っていたんです。でもここでそういう先入観を破壊されて帰ってきました。

一番は、嬉々として勉強をするブータンの子どもたちの姿。こんなに生き活きとして勉強をする子どもたちは見たことが無かった。すごかったです。ぼくは驚いて皆に「なんでそんなに勉強をするの?」と聞いたら、全員の答えがまったく同じだったんですが、「国力を上げるため」と言

ってきたんです。これは日本のフェイズとはもちろん違うんですが、「こんなにまで国の発展のために！」と感じました。あとは、家族のために学ぶ。「兄弟が多くて学校にきてるのはぼくだけです。ぼくが稼げるようになって、兄弟を学校に行かせてあげたいんだ」と。そういう子が普通に大勢いるんです。ぼくはたまたま、高校生と中学生がいる学校に訪問してきましたが、ぼくが何も言わなくても、この子たちは2〜3時間、写経のような勉強を始めるんですよ。そして母国語の教科書がないから、全部英語です。小学校から全教科をオールイングリッシュで勉強しているんですよ。

そういう子どもたちが、ぼくたちと同じアジアの国にいるんです。ブータンです。そして、日本は何やっているんだろう、というのがぼくの一番のスタートでもあります。

というわけで「今の子、大丈夫？」というのは自分に常に課していることです。

3 時流を読む

ぼくも中原さんと同じです。教師は時流を読み解かなきゃならないと思っています。そういう力を教員がつけなきゃならないと思っているんで、放課後の半分はもう外に出まくっています。そして時流を読み解こうとしています。

皆さん、ちょっと考えてみてください。日本の政府広報による約1分間の動画です。ストーリーの中で最後に主人公たちが学校に行きます。その学校がどんな学校なのかな、と考えながら見てください。そして政府はこれが20XX年に訪れると言っています。この20XX年は何年後、もしくは何十年後なのか。これからご覧いただく動画が何年後の世界なのかな、とお考えください。でも20XX年です、21XX年ではないんです。どんな学校で、いつのことなのか。考えつつご覧ください。

(動画)

この2人がどんな学校に通うのか。動画の設定は地方だと思います。ぼくも三重県でスタディツアーを始めて3年経ちました、東京の檜原村も経験しています。映像の学校はどんな学校なのでしょう。テクノロジーを活用すると「どこでもできる」ということがあると思うんです。だから「都心だからできる」という学びがあるのならば、そこを出す必要があるし、「地方だからできる」のであれば、それをやっていかなきゃならないし、もしかしたら、無人のクルマが走り出すのかも。シンガポールでは来年(2020年)4月にスタートします。この秋には日産が高速道路での自動操縦車を発売します。スカイラインです。そういう時代がもう来る。そうなったら、例えば三重県なんかは高速道路が発達しているので、もし高速道路が自動操縦車で走れるんだったら、かなりストレスなく通えるようになるんじゃないかと思うんですね。

そして、新幹線がリニアモーターカーに変わりますね。そうすると今よりもっと移動が楽になって、地方のアクセスがもっともっと楽になったときに、都心と地方のどっちが強いのかと、何がいいのかと、いったことを考えています。そして動画の学校はどんな学校なのか。そこに向かっていきたいと思っています。

それから、この2人が通う学校では何を学んでいるんでしょう。ここは時流を読んでいかないと。彼らが卒業した後は、2100年時代。人生100年時代と言われている彼らは必ずこの世界を見るはずで、もっと激しい世界になるかもしれないときに、ゴールを受験だけにしたくない。本当に必要な力を生徒たちとともに創作していきたいと強く思っています。

「今の学校で大丈夫なのか?」。これは皆さんへ問うのではなく、共に考えたいです。ぼくもずっと考えています。

①時代のスピード感

時代のスピード感についてですが、画像はニューヨークの5番街、1900年の写真です。走っているのはほとんど馬車です。次の画像は13年後です。なんと自動車の中に馬車が走っていて、その馬車の割合もぐっと減っています。時代は、10年もあれば大きく変化します。じゃあ変化のスペンは10年なのか、という最近はすごいスピードの5年くらいのスペンなのかもしれません。

その1つの事例ですが、ぼくは39歳ですが、自分が大学に入ったときの4年生の先輩が卒業プレゼンでOHPを使っていました。OHPを知っていますか? 平成生まれの先生方は知らないかもしれませんが。当時は透明な下敷きみたいなやつでプレゼンしていたんですよ。ところが、4年後の自分の時代は全員がパワーポイントを使っていました。

ぼくは教員になって16年目がスタートしているんですが、スタート時点では 아이폰やアイパッドを持っていませんでした。でも今は完全にそれで授業をしています。そんなのは想定していませんでした。

そんなことを考えると、5年、10年というスペンでテクノロジーがどんどん変わっていくと思っています。

そうすると、AI時代。いろんな勉強会で聞いた言葉なども混ぜていますが、それを自分なりにまとめて、スライド4だとすると、「今の学校で大丈夫?」と思うんです。

ぼくが学生時代に経験してきた学校は全部これでした。ぼくはラグビー部でしたが、先生が「いけーっ」って言ってから、行く。ところが箱根駅伝で優勝した青山学院は学生自治出そうですよ。そういう時代がきていると思います。「今の学校で大丈夫?」を一緒に考えていきたいと思います。

(スライド4)

AI時代

- ・知識を正確に覚える
- ・単純作業を繰り返し、正確にできる
- ・指示に従う
- ・情報無料時代
- ・他律

あとは、ぼくが生物の教諭だからということもあるかもしれませんが、気候変動については、

これは待ったなし、だと思っています。今年の夏、フランスはずっと 40 度を超えているってご存知ですか？ 日本も、これは東京のデータですが、気象庁のデータで 1800 年後半、8 月の日平均気温は 24 度、25 度を前後しています。ところが 2019 年、今は 29.9 度です。なんかこう 2010 年あたりから何だかおかしいですね。29 度が続いています。確実に気温が上がってきていますね。面白いのは、1 月や 2 月でみると、完全にその月も過去に比べて 5~6 度気温が上がっています。気候変動はもうきています。

スライド 3 は書籍にあった図ですが、すごく好きなものです。気候変動は、実はこれだけのものに関わっているという図です。生徒たちはこれを見ると「自分に関係している」と言います。理系だけの話ではないということですね。訪れる未来ではさまざまな産業に密接しているということがわかってきます。大人にも講演で使うんですが、いろんなセクターの方が「そうか、初めて気候変動が自分ごと化した」「自分の業種が気候変動に関わっている。SDGs に関わっていることがなんとなく理解できた」と言います。この図はすごく好きです。

(スライド 3)

時流を読む②



②物差しの変化

物差しが変わりましたね (スライド 5)。ぼくの学生時代は、「低炭素社会」と言われていて、CO₂ 排出量をどれだけ減少できているか、という勝負でした。でも今は「脱炭素社会」です。完全に物差しが変わって、もう CO₂ を出しちゃだめなんですね。石炭開発とかありえなくなっちゃいますね。そうなったときに、今まで通りのことを教えることが多いのはだめで、書かれていることは過去になりつつある。「踏まえてどうする」という世界がきているからです。

エネルギー問題に今日は触れませんが、事業運営を 100%再生可能エネルギーで調達する企業として世界で認められている会社は日本で 1 社しかありません。ちなみにリコーです。この RE100 には当然、アップルもグーグルも入っています。そういう社会がきています。

(スライド 5)

時流を読む②

気候変動 待った無し！！！！

- ・ 低炭素社会→脱炭素社会
- ・ ESG投資
- ・ トレスアビリティ
- ・ RE100

今度、掃除機で有名なダイソンが車を出すって知っていますか？ 「ガソリンエンジンの開発は負けるけど、電気モーターはうちだ」と。そういう時代なんですね。ということで SDGs＝持続可能な社会をめざしていく。そんな機運が世界的にも広まっていくだろうと思うわけです。

東京大学のアドミッションポリシーには、「自ら主体的に学び、各分野で創造的役割を果たす人間へと成長していこうとする意志を持った学生」とあります。とは言うものの、受験は保護者との対応となります。「先生たちの言っている理念はすごく賛同できる。でもさ」みたいな話になる。しかし、大学側も受け入れ態勢がちゃんと変わっています。

東大と京大が推薦入試を始めたのは大きいですね。去年の東大の推薦入試の問題を手に入れましたか。これがアドミッションポリシーですから、どんな推薦入試なのかと思ったら、推薦入試の小論文は、「SDGs について書きなさい」ですよ。これが東大の小論文です。ですから、やっぱり求められてきている人材が変わってきているということだと思います。

センター試験で95%以上の点をとるのも素敵なんだけど、そうじゃない。生徒たちは「なぜ学ぶのか」を語れるのでしょうか。しかも社会課題を自分ごと化して、語れるのでしょうか。そんな語れる生徒を増やしたいという思いがあります。

なので、今やろうとしているイメージは、各教科を世界共通言語である SDGs で紐づけていくことです。皆さんの教科で SDGs というと、どこらへんに強みをお持ちですか。どこら辺とコミットしていくんでしょう。「まずこれを共通言語にしていきませんか」ということを学校でやっています。生徒と先生もです。

③世界の動きと日本の動き

世界の動きと日本の動きですが、小・中・高の学習指導要領すべての前文に、「持続可能な社会の創り手となる」という文章が入りました（スライド8）。

そして SDGs4.7 には「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」とあります（スライド8）、これが世界標準ですね。こういうことを今世界で求めている。ぼくはこっち側にいたい（スライド10）、と思っています。

（スライド8）

時流を読む④



新学習指導要領

これからの学校には（中略）一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

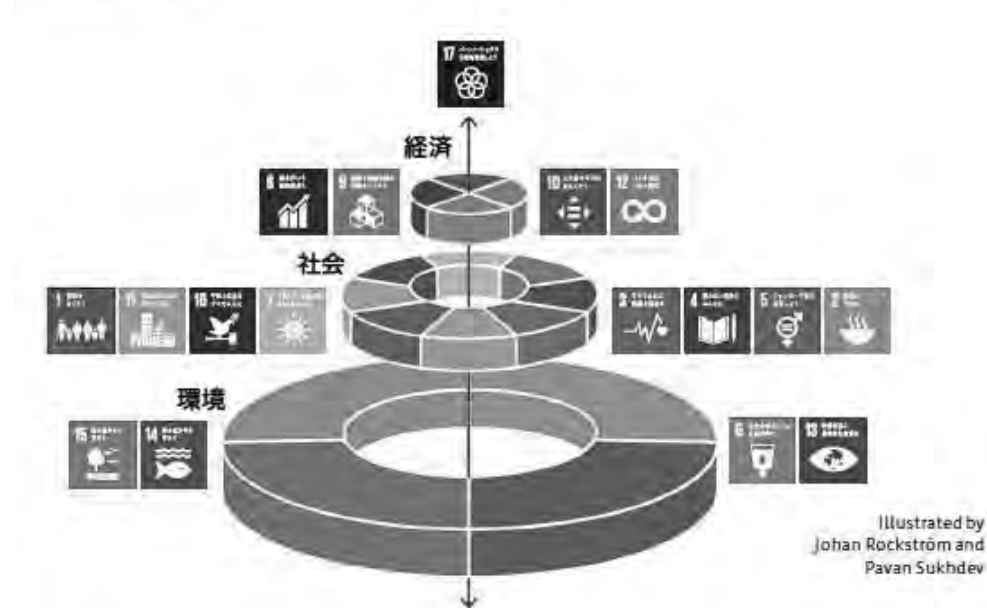


SDGs 4.7

2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

(スライド 10)

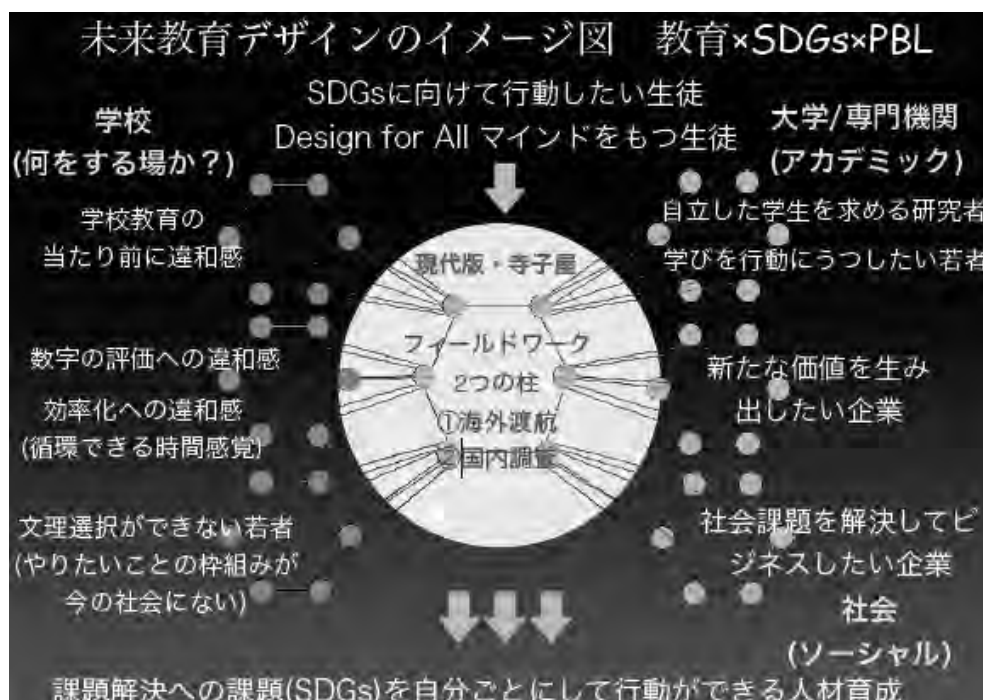
こっちが好き



何度も言いますが、「今の学校で大丈夫？」です。やはりちょっと変えなければならないところが絶対にありますよね、ということです。

というわけで、それを実現させるために、「学校教育の当たり前への違和感」（スライド 3）、そしてアカデミック（大学／専門学校）も実は変わり始めていて、でもソーシャル（社会）と組むことによって多様な生徒の多様な笑顔と、その力を活かした社会貢献。そして、学生時代にこれらを経験すると、日本はもっと良くなるんじゃないかと思っています。

(スライド3)



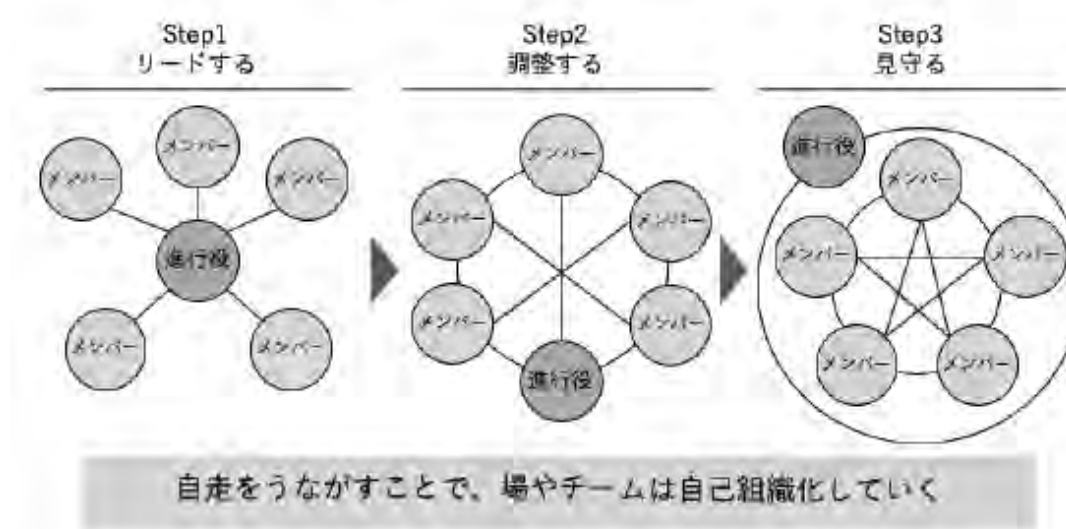
④教師の立ち位置とは？

そうすると、今日一番言いたいのは実はここかもしれません（スライド2）。先生の立ち位置が非常に変わるんじゃないかと思っています。昔は生徒たちに火をつける、リードする船頭役だったんです。ところが、社会課題と向き合い始めると、あるいは探究活動をやり始めると、答えがないので、生徒たちとチームになり始めます。同じ課題を共有する仲間になる。一緒に考える、という立場に変わる。スライド2の左図ですが、この役を務めあげるのは不可能で、次にスライド2の中央の関係性をつくります。心の中でも表現的にもです。そしてたくさんのチームを持ち始めると全部を抱えられなくなるので、最終的にはチームの中で最も必要の高い生徒にバトンを渡して、自立するチームをつくっていく。先生はメンターに変わっていきます（スライド2の右）。この組織が複数でき始めて、そこでのリフレクションがさらにお互いを活性化させていく。

そして、まだ火がついてない生徒を見つけたら、当然ぼくたちは火付け役にもなります。このような立ち位置なので、「今日このクラスでは、ぼくはどこかな」「こっちのチームではどこかな」といったことを常に考えながら生徒を指導していきます。生徒と対面したときも、「この生徒とは、どこの関係かな」、30秒ぐらい沈黙しつつ、「どこかな」と考えながら、こっちだろうか、あっちだろうか。やっぱりこっちかなと考える。生徒との関係がスライドの右だとしたらずっと疑問形を投げかける。「何で？」「どうして？」と。生徒との関係がスライドの中央だったら、僕は「こう思うよ」といった対等性でいく。スライド左の関係の生徒が迷っていたら、「これだけ選択肢があるけどどれかやってみたら？」と、このように立ち位置を変えていくことを意識しています。

(スライド2)

教師の立ち位置とは？



ヒトコトデザイン株式会社 清水謙氏より
2018/12/03

世の中の物差しがパリ協定あたりから変わったように思います。『世界を変えるデザイン Design for the other 90%』、デザインは人間にしかできない創造的な力だと思うんですが、このデザインを「誰のためにやりますか」というときに、つい10年20年前、2000年に入る前までは、先進国のための「よりよい早い新幹線」とか、「よりよい静かな飛行機」とか、「スタイリッシュなPC」とか、そういうものでした。ですが、とうとう変わり始めました。

このデザインはストローです。写真では子どもが泥水を「Life Straw」で飲んでいますが、泥水が飲める「ろ過ストロー」です。電気店に並ぶ大量の浄水器たち。あそこにアイデアを使っていくなら、本当に困っている人たちに向けて浄水器のアイデアを使っていこうじゃないか。そういうデザインの変更ですね。おそらく美意識の変化、社会全体に対する「もっと便利に、もっと豊かに」の物差しから、「誰かのために」のマインドにすごく変わっています。

この10年間くらいで、変わっています。子どもたちもそのマインドがすごく強いような感じがしませんか。ぼくの子どもが、クリスマスや誕生日に「欲しいものがない」というようなことを言うんですよ。ぼくの場合は指折りかぞえて待ち望んで、しかも両方をドッキングさせて「これを買う」って思っていたんですが、今は「あんまり、別に」みたいな。それよりも、家族で旅行したいとか、保護者が泣きそうな100点満点のことを言ったりします。なんだか変わってきているのかな、と思います。情報社会になったことも大きいのかもしれません。

4 これからの時代に求められる教育とは？

社会と世界が変わっていく中で、しっかりと理念を持ち、その理念の中で達成するためのスタイル、それが SDGs や PBL である（スライド 11）。それから Active Learning、PR Learning こういったことだと思います。私は今 PR Learning を押しています。

（スライド 11）

これからの時代に求められる教育とは？



2015 年、国連で SDGs（スライド 9）を採択するときに流した最初の動画をごらんください。

（動画）

以来、世界の流れが SDGs（スライド 9）になったんですよ。国連加盟国 193 加盟、全ての国が参加しました。今の大人が真剣に考えて社会課題をまとめたものです。

次は「SDGs beyond2030」ですが、次の目標を考えると、学生たちが今度その会議に入っているような、できれば日本の学生が発表しているような未来をつくりたいと思っています。

そうすると SDGs と言われたからではなくて、その前からやっていて、気づいたら Project Based Learning 型、Active Learning 型、SDGs、PR そうというのが重要だったんじゃないかと思っています。さらに、もっと言うと尖った発言になるかもしれませんが、Project Based Learning の頭に今、リアルな R をつけていて「答えは本当に社会しかない」と、社会と必ずつながる、そしてインプットとアウトプットも社会へと、心掛けています。こういうことでやってきたのが Project Based Learning 型の教育だったんです。

5 ぼくの SDGs

ここからバーッとお話しますが、ぼくは初め、自分の生物の教科の中でやっていました。放課後を使って、社会とつなげることをやっていたんです。例えば、先ほど話した三重県の定置網漁業を経験していくようなことを、授業の生態系の分野の中から紐づけしていき、夏休み等に行きたい人に声をかけて行く。その子たちが帰ってきてから授業する、というふうに全員で行くというよりは、有志だけでやっていました（スライド 14）。

(スライド 14)



×三重県
×株式会社ゲイト

持続可能な漁法である「定置網漁業」を体験しながら、過疎化や自然資本の持続性を学び、解決アイデアを生み出すプロジェクト

現在は、2学期(文化祭)に向けて「高校生レストラン」を企画している。

それから、檜原村です。先ほどの話のほかにも、耕作放棄された畑を完全開墾させて、オーガニックコットンを育てるというプロジェクトをやり (スライド 15)、先ほどのようにジャガイモを育てて何か商品をつくっていくということもやっています。

今年 2 年目になり、子どもたちと一緒に学校で飼育栽培委員に話かけたら「私たちもオーガニックコットンやりたい」と言ってくれて、今まではヘチマだとかヒマワリとかの栽培をやっていたんですけど止めて、今はオーガニックコットンを育てています。それを保護者に話したら、保護者の皆さんも一緒に行きたいと言ってくださって、今は保護者と生徒と一緒に畑を開墾し、オーガニックコットンを育てています。これって、すごくないですか？ 完全無農薬なので全部手作業で取って、生い茂っていた土地がきれいな畑になります。これは月 1 回のフィールドワークになっていて、順調に育っています。

これによって綿花が採れるので、今年はそれを 1 枚の T シャツにしてもらおうと思っていますが、コットンを採るのがどれだけ大変かということですね。ちなみに私が着ているジャケットと T シャツはオーガニックコットンです。苦労を知らずしてこの T シャツが 5000 円ぐらいと聞くと「高い！」と思うかもしれませんが、この経験をしちゃうと 5000 円でも安いかなと、最近では思い始めています。生徒たちもそう結論を言わないですけど、何か考えている。あとは伝えたいという思いが生まれていますね。

(スライド 15)

×檜原村 ×NPOフジの森



東京都檜原村をフィールドに、耕作放棄された畑を開墾し、
オーガニックコットンを栽培し、収穫したプロジェクト
里山問題、過疎化、高齢化、新規産業、トレスアビリティを学ぶ

そういう関係で、オーガニックコットン会社と取材を続けていく中で生まれたことがあります。商品の切れ端が生まれるんですね。想いを持って育てたオーガニックコットンの切れ端を、どうにかリノベーションできないかと。ある生徒が考えたのは「アフリカの女学生たちが、ナプキンがなくて生理になると学校に行けなくなる」ということを世界史の授業で学んだので、オーガニックコットンでナプキンをつくって送ることができないかと話し合ったときに、大阪にそういう活動があって、オーガニックコットン会社が全部切れ端を提供しますよとなって、皆でつくりました。とうとうこのあたりから、科学の先生や家庭科の先生も協力してくれるようになりました。結果、アフリカに届けることができました（スライド13）。

次の動画は生徒の感想です。彼女が中心となった生徒です。

（動画）

ー参加して思ったことや感想とかを教えてください

数か月後に送られてきたケニア子供達の写真を見たときに感じたことなんですけど、みんなすごいキラキラした笑顔で布ナプキンを持って写真に写っていて、私のつくった布ナプキンを持っている少女がいて、それを見たときにすごく感動して、感じたことなかった感情でいっぱいになって本当に幸せな気持ちになりました。

ーこの活動を通して変化したことはありましたか

今までは将来やりたいことがあまりなくて、興味があることもないし、安定した職に就きたいとか自分のことしか考えてなかったんですけど、今は発展途上国の子供たちを、自分らしい方法で幸せにできたら良いなという夢ができたので、人生がすごく変わったと思います。

こういったプロジェクトを通じて、利他的な思いで学びが始まるっていうケースです、この生徒は受験も手段になったということを言っています。

(スライド 13)



実際に行動者育成についてアンケートを取りました。こういう教育を「総合的な学習の時間でやった場合」と「授業でやった場合」に、どうなるかと聞いたときに、授業で聞いたという生徒の方が「イベント等に参加してみたい」、「もう 1 歩アクションしてみたい」と言う生徒が 50%になるのに対して、総合的な学習の時間で聞いたというバイアスをかけると 30%になります。

教科と紐づけることが重要なのかなと思います。もちろん総合でやっていく、探究でやっていく重要性はありますが、教科とつながるということがさらに背中を押すのかなと思います。ちなみに統計は、1300 人ぐらいとったものですので、有意な統計結果ということです。

実際に、前任校の都立高校時代に 1 学年持っていたとき、「どれぐらいの生徒が有志で放課後等集まってプロジェクトに参加したか」というのを調べたら、大体 25%でした。多くの生徒が部活に所属している学校でしたから、サッカー部やテニス部など部活動をしながら、この数値です。

実は複数のプロジェクトをまたいだ延べ人数を出すともっと上がりますが、実際に関わった生徒だけで 25%。ですから 4 人 1 組になってもらったら 1 人はプロジェクト経験しているという状態になったのが、1 つの教科で関わったときの限界かと思っています。

ちなみに、2 年目にぼくともう 1 人の先生で、調べたことがあります。隣のクラスはプロジェクトを紙ベースで紹介していました。僕のクラスは授業で。そうすると他クラスの行動率が 8.4%。ぼくの授業のクラスは 27.8%と出ました。やっぱり授業って大事、生徒に直接言うことが大事だと分かりました。

6 教科から他教科へ、そして学校全体へ

今、新しい新渡戸文化学園でチャレンジしていることをダイジェスト的にお伝えします。教科から全体へというものです。

実は同じ想いを持った仲間と一緒に新渡戸にきました。英語の「教えない授業」で知られている山本嵩雄先生も新渡戸にいます。時間割上、水曜日の3時間目のぼくの理科と、4時間目の山本の英語がつながっているの（スライド17）、教科を超えてここでチームティーチング（以下、TT）をしています。

ここで何をやっているかという、時流をひたすら読み解くんですね。時流を読み解いて最後の数10分ぐらいで、「今日の話は、理科を学んだらもっと深掘りできそうな場面はあった？」とか、「英語の必要な場面があった？」など、そういうことを投げかけているだけです。そうするとさまざまな場面で「今日は理科のこういう所をもっとやった方がいいと思った」とか、「英語の自己紹介が必要になった」とかが出てくるんです。そういうことをやっていてスライド17の15人というのは、結果的に1学期間で15人の外の先生を、この3、4時間目にお呼びした数字です。

（スライド17）

水曜3・4時間目 英語×理科(生物)

15人

3C Curriculum ~2019~



あと、普段の授業でやっているのは、自分たちでつくっている本の紹介で恐縮ですが、SDGsの日本一素敵な本があるんです（スライド19）。すでにご覧になって皆さんの学校に届いているかもしれませんが、40人100校分の予算がドネーションで寄付でたまったら無償で送ります。つまり買っていただいたらそれが寄付になって、いつか予算額がたまったらお金のない学校へ無償で届くというシステムになっています。

この本をひたすら教科書として読んでいて、例えばプラスチック問題に興味がある、学校デ

サインをやることに興味がある、としたら、じゃあその人たちを呼ぼうという事で授業に呼んで「理科ってなんで必要だと思う?」「英語って何で必要だと思う?」といった授業をしています。

面白かったのは、プラスチックの問題で企業の方と授業をしていると、放課後の小学生が遊びにきて、そこで聞いているということが生まれ始めています。

スライド 19)



そしたら中学 1 年生ですが、1 学期の終わりに「学校菜園を通じてカフェをつくって、そこに持続可能な社会をめざすためのコミュニケーションを保護者とやっていきたい」と、「自分たちの学びを保護者に伝えたい」「そんなカフェを学校内につくっていけないか?」というプロジェクトの絵を描き始めた生徒がいて、2 学期はこれをどうサポートしていくかということになっていくと思います。

来年度は、水曜の 1 時間目から全てぶち抜きまして、国語、数学、英語、理科、社会、芸術の教科横断的に社会課題を紐解いていこうと考えています (スライド 20)。そこで僕たちがやらないといけないのは、週の中で 1 時間だけ削るということを全員でやる。そうすると、皆さんやっぱり「やってみたい」が増えていて、来年はここに、「自分の持ち時間じゃない人も TT になっていいよ」というシステムにして、「やるには怖いけど 1 年間見てみたい」という人にも、「どうぞどうぞ」という形にして、そうしたらここに一気に最大 20 人ぐらい集まるんじゃないかなと思いますが、そうやって実践ベースで校内の理解を深めていきたいとも思っています。

(スライド 20)

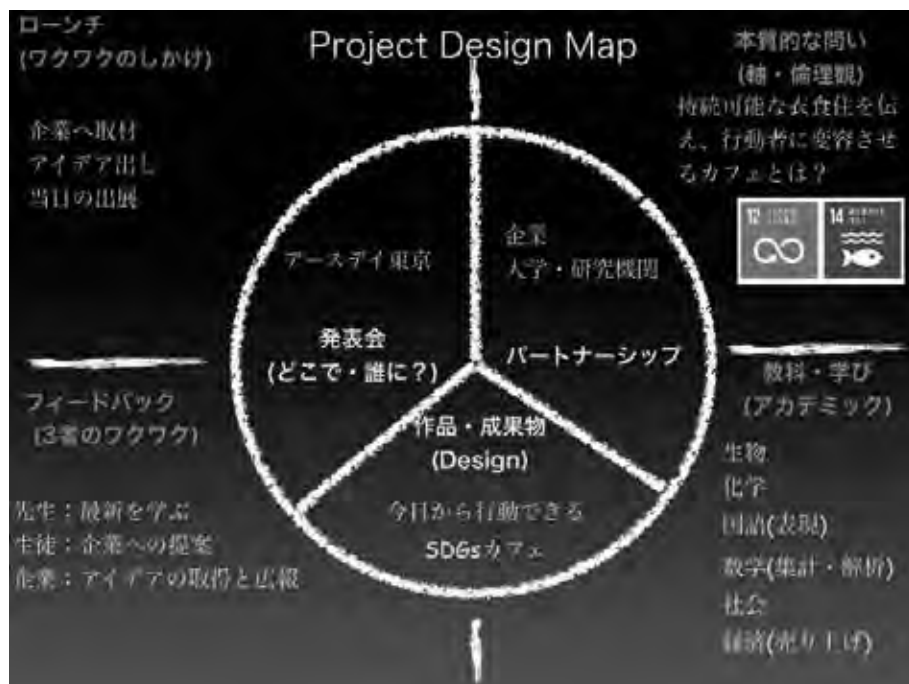
次年度のデザイン

3C Curriculum ~2020~

	月	火	水	木	金	土
1			国語			
2			数学	Cross-Curriculum 教科×教科で授業の枠を超えて、プロジェクトを通じて学習をする。 5～6教科の先生で多角的な視点で授業を行う。		
3			英語 (山本)			
4			理科 (山崎)			
5			社会			
6			体育			

「ハイテック・ハイ」という学校をご存知ですか。カルフォルニアにある完全 Project Based Learning 型の学校です。これの日本の第1号校を新渡戸で実現しようと具体的なイメージに取り組んでいます。そこでの研修の中で、今後、教師に教科の枠を与えるときにこういった共通マインドを持つのか、という「プロジェクトデザインマップ」という手法（スライド21）があります。今日はお話できませんが、そんなソーシャルセミナーをやっていますのでいつかどうぞお越しください。

（スライド21）



7 最後に。成功事例と夢

最後に、これは成功したと思っている事例の1つです。理念を共有する、時流を考える、そして最新の教育を本当に検討する勉強会を今、保護者と教員が一緒になってやることにしています。

一番最近の勉強会は、麹町中学校の工藤校長を呼んで学校研修してもらいました。そして保護者と教員が一緒になって勉強をする。その後、さらに教員研修をするのですが、その様子を保護者に見学していただきました。保護者も真剣です。「ぼくたちが言っていることがおかしかったら保護者も言ってください」というスタイルでおこなっています。

その横では、このように子どもたちが勉強をしています。壁一枚ぶち抜いて広い場所でやっているのです、お互いの声がちょっと聞こえるし、姿も見える。子どもたちも一所懸命にやっている。大人もその子どもたちの横で、一所懸命に考えている。それをまた保護者が見守る。これ社会の当たり前前の構図ですよね。さらに2学期はここに市民を呼ぼうと思っています。社会で起きていること、教育のことを考える学校を中心に、皆で考えるということを考えています。これを続けていくことが、スライド8のような教育をめざすことになるのではないかと思います。

最後にSDGsの決議書のタイトル文章、これがぼくは大好きです。「Transforming Our World」です(スライド22)。ChangingではなくてTransforming。Transformというのは蛹から蝶々になるダイナミックな意味です。ぼくは映画の『トランスフォーマー』の世代で夢中になっていました。あの映画のように、思いっきり変えなきゃ、というのが世界マインドなので、そんなことを生徒と一緒に、保護者と一緒に、地域と一緒に考えていきたいと思っています。

皆さんと共にそういった学校をどんどん増やしていけたらなと思っています。それでV字回復するのかな。3年後にまたお会いできたらと思います。どうもありがとうございました。

(スライド22)

SDGs×教育の魅力

Transforming our world



決議書
2015/09/25

福岡県立城南高等学校 校長

和田 美千代 先生

キャリア教育・アクティブラーニング・探究
高校教育にもたらしたもの

講 演

本日の構成、そして目標とそのループリック

第1部『ドリカム温故知新』

- 1 ドリカムプランはなぜ生まれたのか？
- 2 キャリア教育との出会い
- 3 で、生徒はどうなの？
- 4 生徒に何が起こったのか
- 5 教師にとってのドリカムとは

第2部『自校のバラも赤い』

- 1 現在の城南
- 2 いつも時代は若手が創る
- 3 「つきたい力」は何ですか？
- 4 先生自身が未来の創り手

リフレクション

キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらしたもの

講 演

福岡県立城南高等学校 校長

和田 美千代

一進行 溝上広樹先生

ではセッションを進めていきたいと思います。本日のゴールをこのようにしています。和田さんの話を受け取った後は、「未来のづくり手として、明日から学校で何をどうつくるか?」「どういう思いでつくるか?」を点検し、それぞれみなさんと交流したいとおもいます。

では互いに自己紹介からいきたいと思いますが、1氏名、2所属、3分科会に参加して思ったこと・気づきです。時間をできるだけ圧縮したいので3番の「分科会に参加して思ったこと・気づき」は、ほんとにひとことコメントでいいと思います。例えばこんな感じです。「私の名前は溝上広樹です。熊本県立北高校に勤めています。理数関係の分科会に参加しました。無事に終わってほっとしています。以上です」このくらいです。では同じ机の方同士で自己紹介から始めてください。お願いします。

では次は和田先生の講演となります。和田先生よろしくお願いします。

講演 和田美千代先生**本日の構成、そして目標とそのループリック**

皆さまこんにちは。ようこそ福岡に。遠い方は岩手から来ていただいて、本当にありがとうございます。この最後のセッションに登壇するまで、ずっとみなさんの素晴らしいセッションを見ながら、「最後の出番は嫌だな」とドキドキしながら待機していました。今日は、『未来の創り手であれ ～キャリア教育 AL 探究がもたらしたもの～』として私に与えられた時間はちょうど60分です。第1部と第2部に分かれています。合計で180枚近くのシートがあります。1分間にシート3枚、10分で30枚、そして60分で180枚です、そしてしゃべり倒したいと思いますのでよろしくお願いいたします。

第1部は『ドリカム温故知新』、第2部は『自校のバラも赤い』です。

まず、本日の目標とループリック（スライド3）はこちらです。

(スライド3)

本時の目標とそのルーブリック

内容目標	①第一部 ドリカムプランの中から今の自分に使えることを見つける。 ②第二部 自分が明日から学校で何をするか、どう動くか1枚KPに宣言できる			
ルーブリック (評価基準)	S 三つ以上見つけた 何のために、何を、どう動くのか、具体的に言える	A 二つ見つかった 何を、どう動くのか具体的に言える	B 一つ見つかった 何をするか具体的に言える	C 全く見つけられない どう動くかを精神的で言える
態度目標	発言する、傾聴する、自分の言葉で述べる、質問する、ほめる			
ルーブリック (評価基準)	S 相手の行動をほめることができた	A 質問して人の発言を促すことができた	B 自分の言葉で発言できた	C 発言に耳を傾けることができた

私はこういう研究会で話をさせていただくときに、いつもこのパターンでルーブリックを示します。第1部の目標は、今日、私が話す『ドリカムプランの話』の中から、今の自分に使えることを見つけていただきたいと思います。そして第2部では「自分が明日から学校で何をするか、どう動くか」を手元の1枚にKPで宣言していただきたいと思います。評価基準の段階としては第1部では「まったくなにも見つけられませんでした」というのがCで、1つ見つけられたらB、2つはA、3つ以上はSと考えます。第2部では、まずCは「どう動くかを精神的な言葉で言える」、これは「がんばる」などですね。Bは「何をするかを具体的に言える」。Aは「何を、どう動くのかを具体的に言える」。Sは「何のために、何を、どう動くのか、具体的に言える」。つまり「何のためにそれをやるのか」ということを自分の言葉でキチンと言える、ということです。

そして「態度目標」と「ルーブリック（評価基準）」があります。内容目標、態度目標ともにできるだけSになっていただきたいと思います。

第1部 ドリカム温故知新

では、ここから『第1部ドリカム温故知新』です。

ドリカムプラン開始は平成6（1994）年、ちょうど25年前となりました。今日、話すのは25年前の話です。めちゃ古いと思います。平成14（2002）年、ドリカムプランを始めて9年目に城南高校が研究開発高校として「発表大会」をしました。そのときに聞きに来てくださった皆さんに会場で、オープニングで使ったのが先ほどの動画です。

ドリカムプランは25年前の話、城南高校で発表したのは14年前の話。そして、ここ産業能率大学の教育キャリア教育推進フォーラムでの第1回目で話したのはもう13年前となります。この

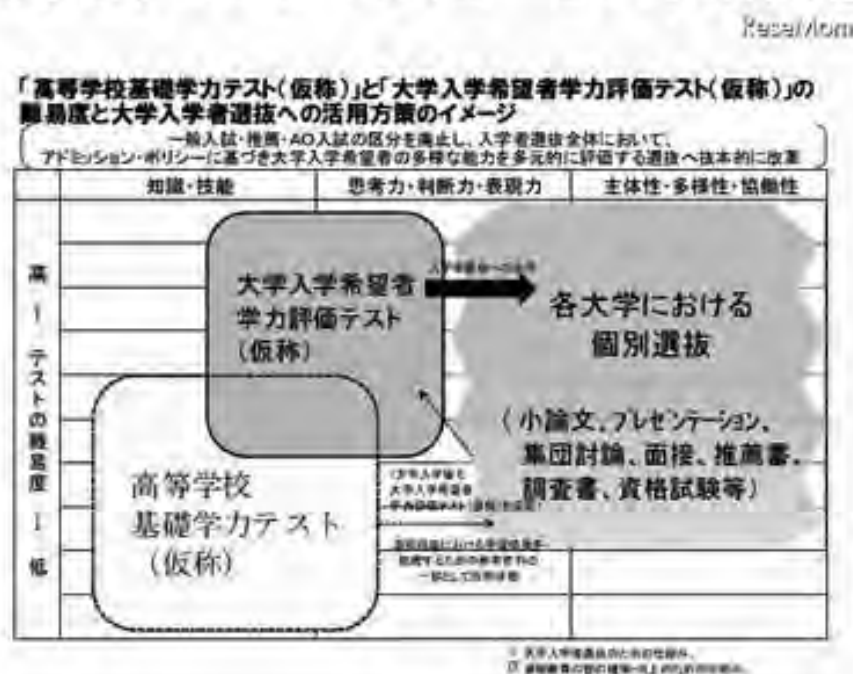
前、青森でこの話をしたら、青森の先生が「ドリカムのことをちゃんと正面から聞いたのは初めてでした」とおっしゃったのを聞いて、「そうか、平成 14 年当時に話したことが、今のアクティブラーニングや総合的な探究とたくさんつながっていることがある」と気づきました。私は今年が現役最後、今年度が最終です。それでこのドリカムのことをこの場でもう一度話させていただこうと思いました。もちろん昔話をしたいわけじゃないんです。今後にたくさんつながる話なので、皆さんにそこからたくさん吸収していただけたら、活用していただけたら、と思っています。

私は福岡県の国語科の教員です。学校の中では長年、進路指導部にいました。城南高校で平成 6 年に「進路学習ドリカムプラン」を企画開発して、それが、全国的注目を浴びて文科省や国立教育政策研究所などのキャリア教育関係の専門委員をしています。管理職を経て福岡県教育センターでアクティブラーニングの普及・啓発の仕事を 2 年経験し、それから県の高校教育課の主幹指導主事を 1 年務めて、今、城南高校校長です。

早良高校にいたときにこれ（スライド 9）を見て、思わず当時の校長室に駆け込みました。これは平成 23（2011）年だと思います。高大接続システム改革会議から出た入試改革の中の 1 枚でした。私がこれに感動したのは、一番右端に「各大学における個別選択（小論文、プレゼンテーション、集団討論、面接、推薦書、調査書、資格試験等）」とあって、「各大学の個別試験がこんなふうになるんだ」「とうとうここまで来たんだ」という感慨がありました。

（スライド 9）

とうとうここまで来た・・という感慨①



もう 1 つは、「調査書改訂」で、「平成 33 年度大学入学希望者選抜実施要項の見直しに係る予告について（通知）」（平成 29 年 7 月）があり、「調査書や本人記載資料（活動報告書）の活用」と出ました。そして活動報告書のイメージ例として具体的に「課題研究の活動」が出ました。私が「ああ、ここまで来たんだ」と思ったのは、平成 6（1994）年のドリカムプラン開始以来、言って

きたことが実際に実現しつつあったからです。それは、全員が記述しなくちゃだめだ。小論文や面接をしなくちゃだめだ、そして全員が「自分は高校生活でこんなことをやりました」、ということ活動を報告書として添付できるようにならないといけない、ということです。

ドリカムプラン一期生の城南高校生 31 期生は、平成 8 (1996) 年の高校 3 年のときですから、そこからすると 2021 年の入試で実現するとなると、25 年間かかったことになります。だけど私は教育というのはそういうものだと思います。変化の激しい社会の中でも、教育は少しずつ変化します。急な変化ではないんですね。だけど 25 年間かけてここまで来たんだ、という思いがあります。

ドリカムプラン的自己紹介をします。ドリカムプランを始めた頃、私は平成 6 (1994) 年、城南高校教員で 33 歳でした。

ドリカムプランは一言でいうと「先生がする進学指導から、生徒自身がする進路学習へのモデルチェンジ」でした。

そして、「キャリア教育」や「総合的な学習の時間」の先進事例として全国的に注目を浴びることになって、NHK の番組に放映されたり、中央公論に載ったり、本になったりしました。その後は文部科学省や学習指導要領の特別活動の解説などもしました。

1 ドリカムプランはなぜ生まれたのか？

本日のメインクエスチョン『ドリカムプランはなぜ生まれたか？』です。

平成 14 (2002) 年、研究開発校としての発表の年にこの本を出しました。そしたら、今日崎野先生がこの本を持って来てくださって、めちゃめちゃ懐かしいのでちょっとだけ紹介します。今日お話することはこの本にも書いてあることなんです。

『ドリカムプランはなぜ生まれたか？』ですが、それは福岡県立城南高校で平成 6 (1994) 年 4 月のことでした。そのころ「キャリア教育」という言葉は私の中には全くなく、キャリア教育の「キャの字」も知らない状況でした。知っていたのは、目の前の生徒たちの様子です。

当時の城南高校を紹介しますと、全日制普通科 1 学年 10 クラス、昭和 39 (1964) 年創立。ちょうど平成 6 年は、創立 30 周年が終わり 31 期生が入ってきたところでした。

福岡県では昭和 39 年頃から新設校がつくられていきましたが、城南高校はそのときのはしりの学校で、創立当初はスパルタ教育で有名でした。その様子は「城南火山」という言葉で表現されています。校訓は「進取、明朗、端正」です。

福岡県は当時 15 の学区に分かれていまして、その第 7 学区にあり、同じ学区内には藩校から続く伝統校の修猷館高校があります。城南高校はそこで 2 番手の進学校として存在していました。そこに 31 期生として入学してきた生徒からドリカムプランをスタートさせました。

そして平成 6 年は、高校で新教育課程がスタートした年でした。当時私は城南高校で 7 年目、3 年生にずっと張りついて、つまり 3 年生だけやっていて、役割は進路指導の中の定点観測でした。毎年の 3 年生の傾向や、その年の入試傾向を分析する仕事をしていました。

そうやって 3 年生に張りついていたんですが、新 1 年生の学年主任からスカウトされました。「和田先生は 3 年生ばかりやっているけど、今度から新課程が始まるので 1 年生からやって新課程の入試の研究をしませんか？」と誘われたので、そのときの 3 年生を卒業させたあと 1 年生の

担当になりました。

そのときの新課程 1 期生の学年目標は、「新課程、城南元年」というものでした。具体的にどうするか。実際は、そんなものはなににもなく、前の 3 年生を卒業させることで手一杯でした。先生方もそんなご経験があるんじゃないかと思います。そしてあるのは、「進学実績レコード国公立大 131 名」という城南高校の当時の最高記録でした。具体的方針は走りながらつくるという超自転車操業です。

当時、『躍る大捜査線』という映画があり、その中で「事件は現場で起こる」というキャッチコピーがありました。私はこの言葉が本当に好きです。「学校改革・教育改革は、教室という現場で起こるものだ」と思います。私たち教員が教室という現場で、ナマで感じる手ごたえみたいなものがあります。それが平成 6（1994）年 4 月の教室という現場ではどうだったか？ ひとことで言うと、平成 6 年 4 月の城南高校は「ピンチ！」でした。

① ピンチは 2 つ その 1 つ目「目の前の生徒たち」

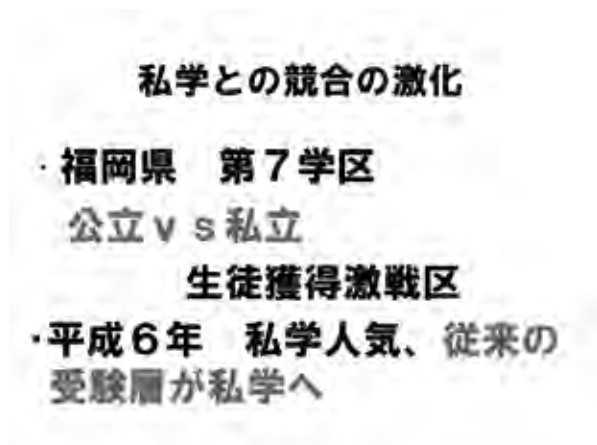
ピンチは 2 つあり、その 1 つ目は「目の前の生徒たち」です。先生方は「教え方がわからん！」のです。新教育課程になって教科書が変わっています。それに対して、それぞれの教科の先生方が「教え方がわからん」となっていました。一番のピンチだったのは数学でした。「図表等をたくさん使って視覚的に理解させることが先」というような教科書の単元の配列でした。その新しい配列に若い先生方はけっこう反応していました。だけど年配の先生は「おれは判別式を先に教えたバイ」「そうじゃないともうできん」と言いながら授業をされていました。英語の先生方は「単語数が足りん」と言われるし、国語の私は「暗唱ができていない」ということに本当にびっくりしました。城南高校に入ってくるような生徒たちは、有名作品の冒頭、例えば方丈記の『ゆく川の流は絶えずして』とかは暗唱できて当たり前だったんですが、誰も暗唱できなくてびっくりしたことと、文学史について生徒に聞いたところ「先生、文学史って何ですか？」と。教育課程が変わって文学史というジャンルが無くなっていたんです。そのことに教師側は、気がついていませんでした。

それで「今年の新入生は変だ」というふうに捉えていたんですが、「知識量、ドリル、暗記、忍耐力」でちょっとマイナスでしたが、プラス面では「とても活発、行動的」。そして一番驚いたのは「クラスの半数が英検 3 級を持っている」「ディベートの経験者がいる」ということでした。なかには「先生、ぼくは中学のときにディベートキングって呼ばれてました」という生徒がいたんですが、そのころ教員は「ディベートってなんだ？」の状態です。意味がわかりません。賄賂のリベートと見分けがつかなかったんです（笑）。「どうして 1 年生はこんなふうなの？」、「新課程っていったい何？」と、週 1 回の学年会で疑問や不満が噴出していました。

② その 2 つ目「学校を取りまく状況」

そしてピンチの 2 つ目です。「学校を取りまく状況」です。新教育過程というピンチは全国の高校にやって来たんだと思います。皆さんも経験されたかと思いますが、城南高校にはさらにピンチが重なっていました。それは私学との競合の激化です。（スライド 40）

(スライド 40)

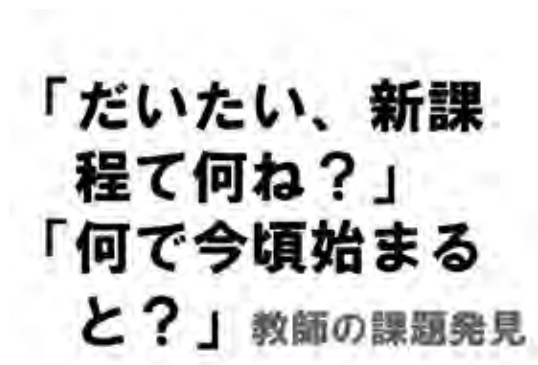


福岡県の第7学区は25年前、本当に「公立 vs 私立の生徒獲得」の激戦区でした。この25年前の城南高校の姿は、今、福岡県全体に広がってどこの公立高校の先生方も苦勞されていると思います。そういう激戦区状態の中で、近所の西南学院高等学校が男女共学化してものすごく人気が出ました。そこで従来なら修猷館に行こうかな、という生徒たちが城南を安全策として受験していたのが、「西南学院の特進クラスに受かったら、イチかバチかで修猷を受ける」という選択をするようになって、従来、城南高校に入ってきた層が入ってきていない、ということが新入生テストの結果でわかりました。それまで城南高校で偏差値70ぐらいの生徒は毎年20人ぐらいいて、だいたいその子たちは九州大学の現役合格者という感じだったんですが、その年の偏差値70以上は1名でした。それで私たちの学年は「これは3年後はどうなるのか？」と。私たちにとっても大ピンチです。それでも例年並みの結果は出したいと思いました。

② 教師の課題発見と、課題解決の第一歩

それで先生方は「だいたい新課程って何？」「何で今ごろに始まる？」「あと1年遅くに始まってくれれば」と本当に思いました。それがつまり教師の課題発見だったんです(スライド45)。それで先生方はその課題を解決するべく、情報をたくさん集め始めました。これが教師たちの課題解決の第一歩でした。(スライド46)

(スライド 45)



(スライド 46)

1 年学年団 情報戦スタート 教師の課題解決第一歩

それで、この場のような勉強会や進学説明会などに、学年の 10 人が手分けして行くんですが、そんな中で、原点に帰って学習指導要領を読み込みました。とても恥ずかしい話ですが、私は学習指導要領を真剣に隅から隅まで読んだのはそれが初めてでした。そうすると、新しい学習指導要領の中に「新しい学力観」という言葉が、「意欲・関心・態度」という表現が登場していました。

それからこういった研修会に行かれた先生が、やはり「新しい学力観」という言葉を捕まえてきて、なんとなく私たちは「大きな変化が起きるんじゃないかな」と思いました。それから先ほど言いましたように、中学校で英検 3 級をとっている子は毎年 5~6 名なのに、その 31 期生はなんと学年の半分の 220 名が取得していました。5~6 名が 220 名というのは「中学がものすごく変わったんじゃないか？」とっていました。

そして中高連携事業で、いくつか近くの中学校の授業を見学させてもらう機会があり、そこに行ってわかりました。

いろいろな教室で選択授業が展開されていたんですが、いわゆるまっすぐ前をみてやるスクール形式だったのは 1 クラスだけで、あとは全部コの字型になったり、グループで集まってワイワイやっていたりするグループ学習、調べ学習で、私がそれまで宴会授業と言っていた形でワイワイガヤガヤとやっているんですね。それを見てものすごく納得しました。あの生徒の元気のよさですね。つまり、中学校での授業がこんなに変わっているのに、高校では変わっていないからズレが起こっているんだなと。そうすると教育課程が変わり、生徒が変わったのに、高校だけが従来のまま。「変わるべきは私たち高校じゃないか」と思ったんです。だけど、どう変わればいいのかわかりませんでした。それがドリカムプラン 1 期生である生徒たちの高校 1 年 1 学期です。

そして夏休みに「正副主任主事研修会」というものがあり、1 学年からその報告をしました（スライド 56）。新課程が始まってどうやら私学に生徒を取られたみたいだと。そして模擬試験の結果を報告しました。そうすると世界史の先生が「これは城南高校にとって黒船の来航である」と表現されました。「こういう黒船が来ているんだから、1 年生をなんとか応援しなくちゃいけない」という雰囲気になりました。なぜなら、今の 3 年生の担当の先生は来年の 1 年生の担当になり、今の 2 年生の先生はその次の学年担当に降りてくるわけです。皆が「明日は我が身だ」「なんか大変なことが起きているようだ」と感じていました。

(スライド 56)

夏休みの正副主任主事研修会

・ 13分掌26人+校長 教頭

・ 第一学年から報告

新課程・私学の台頭・模試結果

「黒船の来航」

明日はわが身→危機感の共有

1年生を応援しようという雰囲気

そこで2学期に学校訪問に行きました。鹿児島中央、甲南、宮崎大宮、宮崎西の4校です。この中に宮崎西高等学校がありますが、これは、ベネッセ営業マンの金子さんが「それならぜひ、宮崎西校の宇津田校長に会ってください」と情報を教えてくれました。このひとことがなかったらドリカムプランは生まれていません。

実際に宮崎西校は、たった20年間で東大進学者を出しています。その秘策は何なんだろうと思いつつ4人で訪ねました。そして宮崎西校の宇津田校長から2時間説教されました。

「あんたたち教師が目先の合格ばかり考えようろが。だからあんたたちの学校はつまらんとよ」と叱られて、「先を見ろ!」とも言われました。

「その生徒たちが社会に出て、どれくらい役立っているか、そこが問題やろ」「大学のその向こうこそ人生の本番」と言われました。

そして「その本番で貢献できる生徒を育てるために、うちは体験活動やら講演会やらを奨励しよる」と。実際に週30時間の授業をして、土曜は全部そういう活動に充ててらして、具体的にはボランティア活動、献血活動、有馬朗人・秋山仁講演会などをされていました。

さらに「体験活動をした生徒は目覚めるよ。自分が何をなすべきかを」「目覚めた生徒は自分がかんばるよ。意欲が高まっているから。新しい学力観とはそのところを言いよるとやろうが」と言われて、「そうか!それがつまり新しい学力観なのか!!」と理解しました。

大学卒業後の人生の本番で、自分から意欲的に活動する人材。体験をして意欲が生まれ、それが内発的動機となって、生徒が自分で走る。今でも「自走する生徒」という言い方もします。だから「客観的100回の観念的志望より、1回の体験がモチベーション、内なる動機を高める」と。

宇津田校長先生の話聴きながら、思い当たることがありました。「英検と模擬試験、どっちを選ぶか?」というときに、私たちは何と言っていたかということ「英検は後でも受けられるやろ。だけど3年の模擬試験はこのときしか受けられん」、つまり模擬試験を受けなさいと言ってたんです。しかし「英文科を受けようという生徒が英検を受ける、それを止める権利がどこにあるのか?」と思ったんですよね。そしてさらに、「英文科志望の生徒たちの英検に当たるような活動を、それぞれがやるべきだ」と思いました。そしてこのときの帰りの飛行機の中ではすでにドリカムプランの構想がありました。

2 キャリア教育との出会い

「大学のその向こうこそ、人生の本番」。この言葉こそキャリア教育との出会いでした。内発的動機づけの大切さに、私たち自身が気づきました。

宮崎から帰ってきてからは、もう憑かれたように動きました。このときの出張報告は「城南に明日はあるか！？」。まるで映画のようなタイトルになりました。

①ネーミングからプログラム概要まで

それからネーミングは、学年会の出張報告に「国公立推薦入試対応 城南ドリカムプラン」と名づけました。

それから「生徒の興味関心はどこにある？」ということで、新しいタイプの進路希望調査を始めました。〇〇大学希望とか〇〇に就職ということではなく、「10年後・20年後に自分はどのようにしたいか？」というアンケートをとり、それは後に作文「10年後・20年後の私」となりました。それから生徒の同じ志望者を集めて「ドリカムグループ」を組織し、そこに担当者をつけて「ドリカム顧問」となって張り付き、「自分の将来に役立つ活動ならなんでもやってみよう」ということで教師には「平日とぶつかったら公欠にするよ」ということで、「ドリカム活動」を奨励しました。そのグループ枠はスライド95で、今考えてみると大学の学部の分け方にも似ています。

(スライド95)

ドリカムグループ

グループ	1年	2年	3年
理学	田村	池上	青田 有樹
工学	宮多野 野口 夏名子	横崎 三芳 野上 井上	幸川 竜井 西村
医療保健	斎中 川原	平川 綾上 天野 和由	村田 幸田
生物農学	久保 永晴	中道	西尾 川崎
人文科学	藤崎 水村 平野	安岡内 村上 上木通	森 田原口 上道
社会科学	井戸 穂高 美松	森森 美松 山中 清野	香取 永国 新原
教育	高尾 吉岡	藤原 福高	藤澤 旭平
芸術	小林 風板	井田	西崎
生活科学	尾崎	中山	内田

そしてドリカム活動や大学のシラバスの研究、オープンキャンパスに行ったり、出前授業をしてもらったり、職業人講話をしてもらったり、企業研修をしたり、という活動をしました。

例えば「職業ガイダンス」は、OB 職業人講師による職業人講話をドリカムグループ別にやりました。もともと講演会は全体に向けてやっていたんですが、「聞きたい内容を聞きたい生徒」と、グループ向けに始めたんです。「ジョイントセミナー（出前講義）」は、元々は大学から来ていただいて開いた入試説明会でした。だけど生徒たちがそこで質問するのは「大学では、どんなことが勉強できるんですか？」という声だったので、それならそこに応えるような話をしてもら

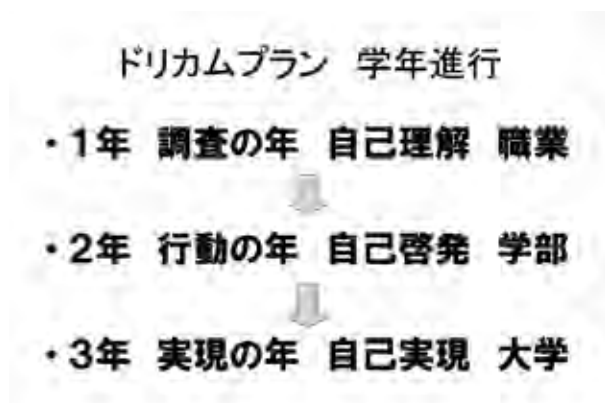
える出前講義にしてもらおう、と変えていきました。

「ドリカム企業研修」は、フィールドワーク型修学旅行で今では「東京ドリカム研修」と言います。企業研修として様々な企業・団体へ訪問させていただきました。

それから課題研究も当時「ドリカム課題研究」としてやっていました。ドリカムグループ別の研究でA4サイズ10～30枚のレポートを制作し、10分間のプレゼンテーションをするものです。まだ教科「情報」の開始前で、「インターネットというものがあるらしい」、そんな状況でした。インターネットやパワーポイントがとても珍しい頃だったので、先生方は画面が動く！とびっくりされるような時代でした。

こんな感じで進んできたドリカムプランですが、1年目は自己理解、調査の年。2年目は自己啓発、行動の年。3年目は自己実現のためにがんばる年、そういうプログラム（スライド105）になっていました。

（スライド105）



②どうやって組織化したか

どうやって組織化したか、についてです。最初は第1学年のみの動きでした。それから年度末に校長先生が職員会議で「ドリカムプランでいく」と宣言をされました。「国公立大学に合格する県立高校として地域の信頼を得て生き残る。ついてはドリカムでいく」と。この校長宣言こそ、管理職のリーダーシップと職員のボトムアップが握手した瞬間だったと思います。そのとき私も職員の一人としてその席にいてどう思ったのかというと、いきなり校長がそう言ったので「いいのかな？ 結果も出ていないのに。知らんぞ！」って思いました。

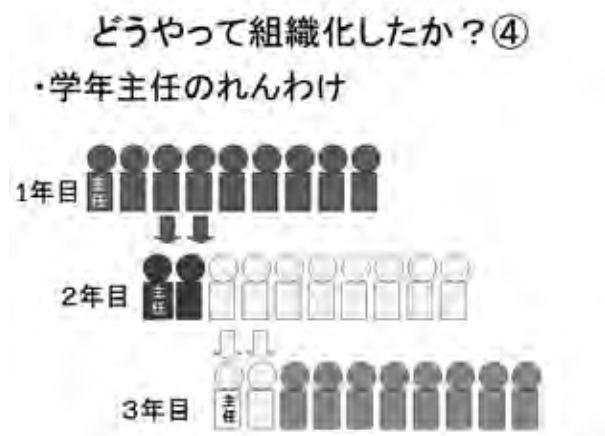
でも一方で、「校長先生は1年生の動きを見てくれたんだ」、そして自分たちも学校経営に参画している実感やうれしさがありました。

組織化の具体ですが、校長先生は「ドリカムでいくという方針が見える人事配置」をされました。第1学年の学年主任が進路指導主事になり、このことで「学校はドリカムでいくんだ」という方針が職員全体に見えるようになりました。いわゆる「見える化」ですね。副学年主任だった私は学年主任になりました。当時私は34歳の女性です。進路指導主事は35歳。新しい第1学年の主任は39歳でした。ものすごく運営委員会が若返りました。これで若手の先生方たちの意欲向上にもなりました。「私たちも参加できる」という感じで。

それから「学年主任ののれん分け」（スライド113）ですが、最初1年目の10人がいます。こ

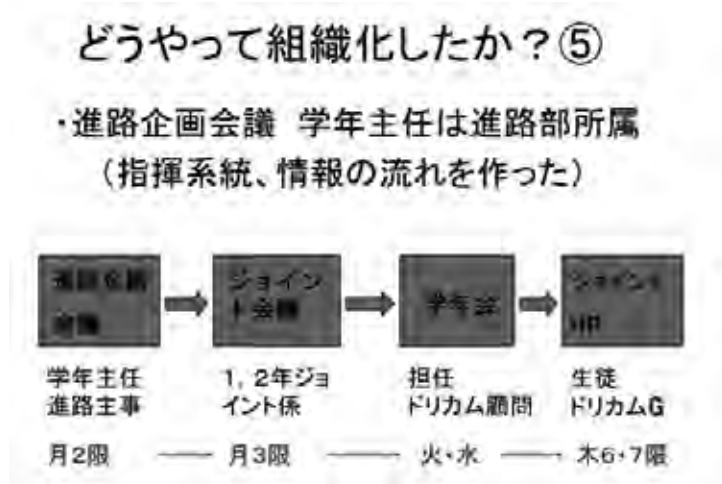
これから2人を「学年主任ともう一人」として2年目の新1年生担当とします。そこに新たに8人をプラスして計10人で構成します。そして3年目は、その8人の中から再び2人を新1年生担当にして、そこに8人をプラスして10人を構成します。このように3年間かけて形ができ上がっていったわけです。

(スライド 113)



さらに「指揮系統」と「情報の流れ」をつくりました。(スライド 114)。月曜2限に「進路企画会議」を開き、学年主任と進路主事が「総学をこんなふうにする」という計画を立てて、月曜3限の「ジョイント会議」におろします。それを「学年会」におろし、最後に生徒たちの「ジョイントHR」におろしていきます。この流れです。今は「進路企画会議」と「ジョイント会議」を合体させて、城南高校では「デザイン会議」と呼んでいます。

(スライド 114)



2年目の9月、『VIEW21』に掲載していただきました。そうするとですね、周囲の反応は「理想だけだね」「で、生徒はどうなの?」とか、言われていました。

3 で、生徒はどうなの？

3年生になって12月の受験校決定の「三者面談」です。冬場なので温かいパソコン教室で、10クラス一斉にやるということになりました。当時私は学年主任として「失敗したなあ」と思いつつも「これでいい」とも思っていました。

面談は一斉に同じ場所でやっているの、よそのクラスの面談が聞こえてくるんですよ。そして中村君という生徒が、「先生、行くのはぼくですよ。ぼくが行きたいって思っているんだからいいじゃないですか。ぼくはここを受けます」って言って志望校を譲らないんですね。私は内心「困ったもんだ」と思っていました。また別のクラスでは担任が「おまえ、やりたいなら突っ込まんか」とガンガンと生徒をたきつけているんです。私は学年主任として「ダメだ、数は出ない」と思いました。

実際に地元の私大合格は現役マイナス29人、浪人マイナス31人の合計60名減りました。そのことを教頭先生に報告に行きました。私が「申し訳ありません」と言ったら、教頭先生はにっこりと笑って「良かったじゃないですか」と言って、ひとことも責めませんでした。私はものすごくありがたいと思いました。この時ほど教頭先生の情けが身に染みたことはありませんでした。そして無理して笑顔の卒業式をして、「顔で笑って、心で泣いて」という心境でした。学校で顔をあげられない、といった状況だったんです。その後また教頭先生のところにいって「この学年、お世話になりました」と言ったら、「何を言っているんですか、これからですよ」って。これから国公立の発表があるから「これからだ」と。

国公立の発表のときは、偶然、私はたった一人で職員室にいました。私の周りには誰もいません。合格した生徒の名前には選挙の赤い花のようなのがつくんですが、その黒板の前に一人で座っていたんです。「なんでこんなに辛いんだろう」って思いました。「31期生の結果が出せなかったら、私が辞表を出すだけだ」とも思いました。だけどそれじゃ済まないような気がするんです。「何でだろう？」って考えたら、すでに1年生も2年生もドリカムで走り出しているんですよ。いまさら、「失敗でした」と、やめられない。そのことに気づいたときに、「ああ、本当にこの城南高校の未来が私の肩にかかっているんだ。だからこんなに辛いんだ」と思いました。

私の父はもう亡くなりましたが、私にとってメンターでした。その父が、

「おい、結果が出なかったらこう言えよ」

と言ってくれたんです。それと同時に私は父にこう言いました。

「大丈夫、お父さん。私、ちゃんと考えとる」

と、私と父が同時に言葉を言ったんです。

「10年後、20年後の生徒たちを見てください」(笑)

って。この言い訳を私は用意していました。

だけど、実際に私が狙っていたのは、大学に何人合格するかじゃなくて、「大学卒業後の人生の本番で活躍する生徒」だったから、さっきの言葉は言い訳でもなかったわけです。

さて、いよいよ合格発表です。第1号は筑波大学体育学類で、あの中村君です。受験校決定の「三者面談」の場で、「受験するのはぼくです」と啖呵を切った生徒です。もうびっくりしました。「えっ、あの中村君が合格!!!」って。「筑波も落ちたもんだね」って(爆笑)。それから、第2号は御茶ノ水大学。「ウッソー!」。それから、「おめでとう!」を言う前に「ふざけとう!」の

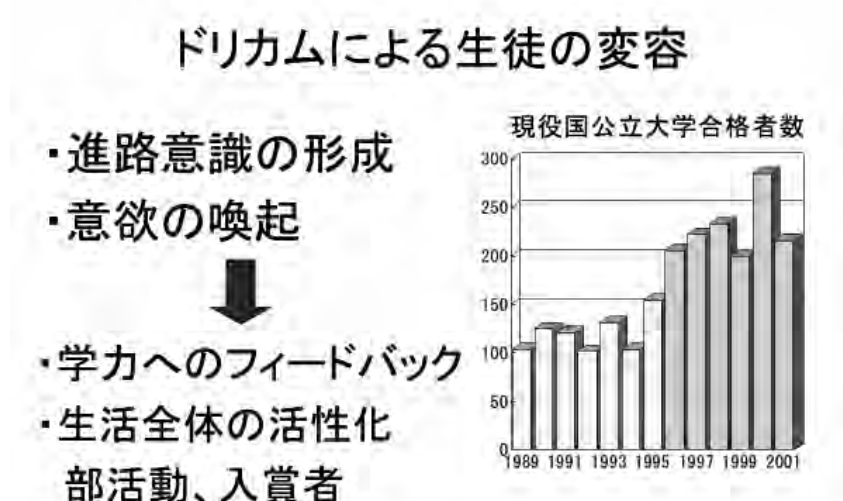
声が出ました。そして結局、現役の国公立大合格は 209 名となり、つまりそれまで 100 人台だったのが倍増でした。

4 生徒に何が起きたのか？

「何が起きたのか？」と 3 年担任団は思いました。6 月くらいまでは分析ができなかったんです。でもこれをひとことで言えば、「志は千里を走る」だと思います。「将来どうするのか？」「何をやりたいのか？」を生徒たちにつきつけた 3 年間でした。生徒からすると「こんな将来を」と、描いていた 3 年間でした。「自分の人生を自分でなんとかせないかん」という覚悟。それから、「人生はやりたいことをやれそうだ」という希望。つまりキャリアを展望した生徒たちは、自分で勉強をやり始めたんです。

その後はおかげさまで進路実績も増えました。(スライド 150)

(スライド 150)



振り返って、「ドリカムは結局何だったのか？」というと、「教師指導の進学指導」から「生徒主体の進路学習」へのモデルチェンジだったんです。この中にある文字の「主体」と「学」が、「主体的な学び」につながっていくんじゃないかと思います。その後はキャリア教育の先進事例として全国的注目を浴びるようになりました。

5 教師にとってのドリカムとは

そして「教師にとって、ドリカムはどうだったのか」と言うと、ドリカムをつくることは、ものすごく楽しかったです。面白かった。寝食を忘れてやりました。それは、自分たちのドリカムだったからです。自分たちの教育の理想の実現、やりたいことだったからです。生徒に「主体的に行動しろ」と言いますが、私たち教師が主体的に行動するから、おもしろいんです。

では、ドリカムの障害とは何だったのか。言ってもいいですか。それは教員の保守性です。古い頭です。たとえると職員室は海の底です。産業能率大学の第1回のフォーラムで一番受けたものはこのたとえでした。海上でどんな教育改革の嵐が吹こうと、海の底では関係がない。「そんなことを言っても大学入試が変わらんかぎり、関係ない」と言った感じです。そこでとうとう文科省が伝家の宝刀を抜いて、海の底に眠るモアイ像を起こしにきました。「大学入試を変えるぞ」と。これが高大接続改革ですね（スライド 116、167、168）。私はこのプレゼン用に次の歌をよみました。

「海底の眠りを覚ます4技能 たった二回で夜も眠れず」

皆さん、わかりますか。元歌は黒船来航の狂歌ですね。

「泰平の眠りを覚ます蒸気船 たった四杯で夜も寝られず」です。

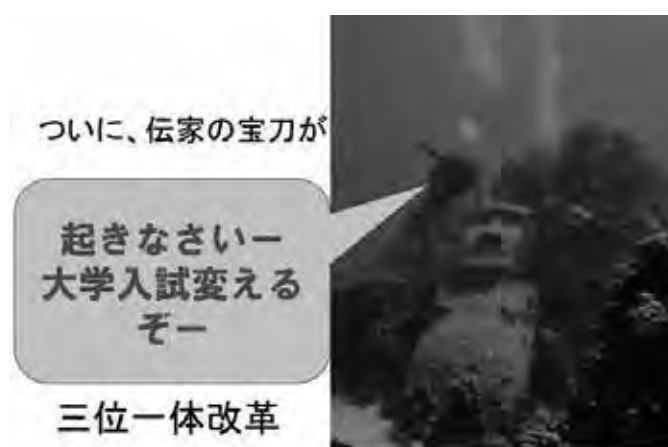
（スライド 166）



（スライド 167）



(スライド 168)



学校訪問のとき、宮崎西高校の宇田津校長は「宮崎から日本を変える」と言われたんです、そのときはなんというホラ吹きなのかと思いました。だけど実際に、たった1つの教室の取り組みが、日本を変えていきます。25年くらいかかりましたけどね。

「学級を創ること」、「学年を創ること」、「学校を創ること」は、日本の教育を創ることです。そして「学校を創るのは自分である」。校長先生ではありません。そして自分が動けば学校は変わる。そして「生徒の未来のために、今これをしよう」という教師の想い。それから「生徒たちの将来のためにこれが必要だ」ということを形にしていくのが「キャリア教育」だと思います。

今になって思えば、当時いろいろと校長先生に、「これしませんか」「あれしませんか」と、政策提案・企画提案をしました。それをやらせてくれた校長先生の度量に本当に感謝しております。

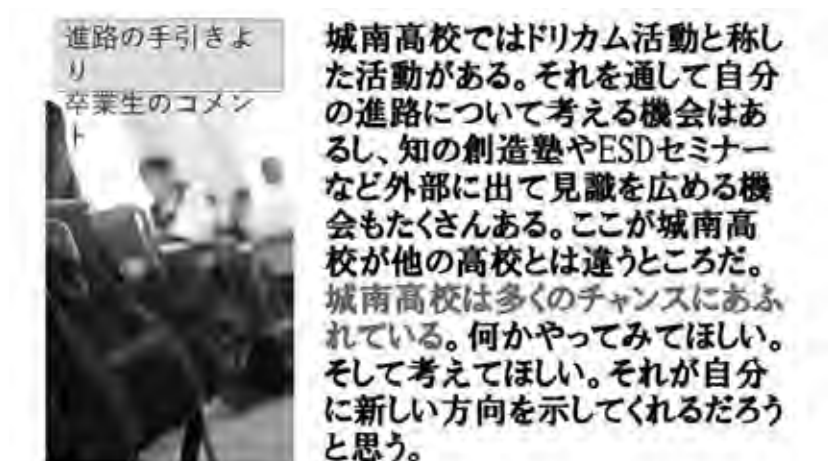
第2部 自校のバラも赤い

1 現在の城南

「他人のバラは赤い」と言います。だけど、自分の学校のバラも赤いな、と思います。ではここから城南高校の現在をお伝えします。私は平成30(2018)年、去年の4月に校長として着任しました。ドリカムプランの開始から24年がたっていました。その間ドリカムはいろんな変遷をしました。SSHは2期4年目で通算9年目でした。そして2年生のESD課題研究が2回目、ちょうど全学年が2年生を経験して、ふたまわり目が始まったというところでした。そのESD課題研究を実際に仕切っているのは各学年の若手の先生です。それから、即興型ディベート、英語イメージ教育。「総合的な学習の時間」はドリカムプランと言う名前です。それから、金曜特別講座、城南EPS。それからジョイントセミナーも続いていました。

では、生徒側から城南高校はどう見えているのか、というと、進路の手引きに「卒業生のコメント」でスライド3が載っています。その中の「城南高校は多くのチャンスにあふれている」という言葉を私は大変に嬉しく思いました。

(スライド3)



だけど、例えば「ふくおか高校生 知の創造塾」といって、福岡県下全体がやっているんですよ。それで、「知の創造塾って、よその学校でも参加しているでしょ？」と聞いたら、「城南高校は、こういうことをものすごく積極的に生徒の背中を押しています。中には、学校に情報が来た段階で、握りつぶされて生徒に伝わらない高校もあるそうです」と聞いて、「ああ、そうなのか、と思いました。

次に「総合的な学習の時間」のプログラムについてです。1年生は ESD 課題研究のプレとしてやり、2年生は ESD 課題研究をし、またこれは SSH の一環で教科の扱いです。3年生はジョイントセミナーや、学問探究講座などをやっています。ところが、3年生の推薦 AO の入試次期になると、まったく進路と結びついていない。私はそれをちょっとイライラしながら眺めていました。でもまだ年度途中ではなんとも言えないので、1年間、年度末まで様子を見て、判断をしようと思っていました。

そして、いよいよ年度末の2月26日に ESD 課題研究の発表会がありました。これは80班に分かれて、各班の全員が発表をします。私はその中のものすごくいい出来のグループの10班を他の先生方から推薦されて、その発表を見つつ、それ以外の班も見ながら、「なかなかやるなあ」と思ったんです。生徒たちが一所懸命に発表をしている。もちろんつたない班もありますが、一所懸命にやっている。それを見て「あ、あのときもこんなふうだった」と思いました。

つまり、ドリカムプランを担当してやっていたときのことで、あのときの発表もこんなふうで、研究発表の成績は正規分布するんです。生徒全員がハイレベルな気持ちでドリカム活動をやっていたのではなく、一所懸命なのが上の5%、そして大部分は中間層で、まったくノッてこないのが5%。こういった正規分布だったなと。あの頃と同じだな、と思いました。そして、「よそもいいけどうちもいいじゃないか」って思ったんです。学外のあちこちで生徒の発表会などを見ますと、そこの生徒の発表がいいな、とったりするんですが、「城南の生徒もやるなあ」と。そして「ウチはウチで、独自に発達していけばいい！」とも思いました。

2 いつも時代は若手が創る

でも、やはり私の中で「ここをこうしたら」といった思いがあって、担当者を何人か呼んで、そのことを言いました。そしたら彼らに言い返されました。「校長、それを変えたら、目標が変わってしまいます。自分たちはこんな力を育てたいと思って、このプログラムをやっているんです」と。この言葉を言った先生はとても丁寧な口調でした。でも「自分たちはこんな力を生徒につけさせたいんだから」と、ドリカムプランをつくったこの私の前で（笑）、そう反論したので、私はもうめっちゃ嬉しかったんです。つまり、「こんな思いで、こういう思いを持って、先生方は各学年で創っているんだ」と私は受け止めました。このとき、老兵は消え去るのみだな、と思いました。

これはネガティブじゃないんです、もう安心して私がいなくなっても大丈夫、と消え去ることができる幸せなんです。

歴史は繰り返しますね。うちの若手を見ているとあの頃の自分たちを見ているようです。当時私たちは30代、「ドリカムで行こう」と言ってくれた校長先生は今の私と同じ歳で、勤めが最後の年で60歳でした。自分が60歳になってあの校長と同じ立場に立ってみると、30代の先生方を見ると、とても頼もしく、とてもまぶしいです。「あの頃、校長先生からすると自分たちは、こんなふうに見えていたんだな」と思いました。

いつも時代は若手が創ります。（スライド8）当時「今の1年生がやっているドリカムを全校でやる」と言ってくれた校長先生、それは職員のボトムアップと管理職のリーダーシップが握手した瞬間でした。創る30代、それを支持する50代ですね。そして私も総学をつくってきた身として思うのは、現状に「ああしたらいい、こうしたらいい」と思います。だけど、30代の先生方のアイデアと60歳の私のアイディアを比べると、それは絶対に時代的には30代の先生方のアイデアが正しいと思います。さらに若手には勢いも力もあります。だから、振り返ってみると当時の校長先生は「若手の言うことに乗ろう！」という決断をされたのだと思います。

（スライド8）

いつも時代は若手が創る

- ・「今の1年生がやっているドリカムを全校でやる」
- ・職員のボトムアップと管理職のリーダーシップが握手
- ・創る30代、支持する50代
- ・アイデアは30代の方が、時代的に正しい！
- ・若手の方が、勢いも力もある
- ・若手の言う事に乗ろう！という管理職の決断

3 「つきたい力」は何ですか？

よその発表を聞くと、良さそうに聞こえるんです。でも自校には自校なりの発達をして今日があるんですよね。(スライド9) そうすると、そこを肯定すること、そこを育てることが大事だと思います。つまり、よその良さそうなのをうらやむより、自分の学校の実態に合わせて手作りをすることです。

平成12(2000)年に当時の福岡県の高次教育の合田哲雄課長が、内閣府の人と来校し、「ドリカムを教科化しませんか」と言われました。だけどそれは即座にお断りしました。その理由は自校のものは自校でしかつけれないからです。ではこのドリカムを全国に広めたらどうなるか？ そのときは、やらされ感が全国に蔓延するだけだと思ったからです。

自分の学校のバラも赤いんですよ。私が城南高校の職員をみて、これに乗ろうと思ったのは、「先生方が自分ごと化して、当事者として、責任を持って創造していた」からなんです。先ほどの講演の中で「エージェンシー」という言葉がありましたが、本当に当事者として責任をもって創造する。そして生徒に「つきたい力」を明確にして自分たちのアイデアで具現化していこうとしていた。つまり、城南の校訓の「進取、明朗、端正」という不易を、その時代の流行の中で発現しようとしていると感じていたからです。

(スライド9)

本校独自の発達！

- ・他所の発表を聞くと、良さそうに見える。
- ・でも、自校は自校なりの発達をして今日がある。
+それを肯定し、育てていけばいい。
- ・他所の良さそうなのを羨むより、自分の学校の実態に合わせて手づくり
- ・平成12年合田哲雄課長が内閣府の人と来校「ドリカムを教科化しませんか？」
- ・即座にお断り「自校のものは自校でしかつけれません」
(やらされドリカムが全国に蔓延するだけ！)

総学もアクティブラーニングも、まずは「つきたい力」があつての手段なんです。でも、「どうやればいい？」「何をやればいい？」と How や What を聞く声が多いに多いんです。そうじゃなくて、「why」です。なぜその探究のプログラムをやるのか。どんな力をつきたいのか？ なぜその総合をやるのか？ あなたの「will」は何ですか？ 全てはあなたの「will」から始まると思っています。(スライド11)

だから、よその学校がこんなことをやっているの、いいなと思ったら、良いところは取り込んでいいと思います。だけど自分の学校は、今、目の前の生徒たちに「どんな力をつきたいのか」、これをはっきりとさせる。それから具体的に形にしていくことだと思います。

(スライド 11)

Whyがしっかりすればwhat,howはついてくる

- ・総学もALも総探も、目的（つけたい力）あつての手段。
- ・しかし「どうやればいい？」「何をやればいい？」how、whatを聞く人の何と多いことか。
- ・Why、なぜその探究のプログラムやるの？
- ・どんな力をつけたいの？あなたのW i i iは？
- ・全てはあなたのW i i iから

4 先生自身が未来の創り手

これは最近の嬉しい話ですが、ESD 課題研究の「問い」を探すために、1年生が「ふしぎダネ帳」というものをつくります。さらにその「ふしぎダネ帳」に加えて、もっと社会的に広く課題を探そうということで、「新聞の切り抜きをして、そこにコメントして、冊子化する予定です」と1年生の先生が私に教えてくれました。偶然ですが、これは昔にやっていた「小論文日誌」とまったく同じです。私から「こんなのつくりましょう」などと言ったわけではありません。先生たちの中から自然発生的に、自分たちの発案で生まれてきました。先生たちのこういった姿を見ながら私は本当に嬉しいことだなと思い、歴史ってこうやって繰り返すんだな、とも思いました。

このセッション5のタイトル、「キャリア教育・AL・探究がもたらしたもの」は何かというと、私は「先生方の創造の場である」と思います。(スライド 13)

要請されていることは、私たち自身が未来の創り手「アクティブラーナー」であることです。

『誰もが未来の創り手になる時代。この変化に教師として立ち会える喜び』

これはリクルートの『キャリアガイダンス』がつけてくれたタイトルです。

今のものすごく激しい変化の中で、創ることが求められています。その創るのは誰かということ、私たち自身です。

「皆さんの学校をどう創りますか？」ということを私は問いかけたいと思います。以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(スライド 13)

キャリア教育・AL・探究がもたらしたもの

先生方の創造の場

アクティブラーナー

要請されていることは先生自身が未来の創り手であること

キャリア教育・アクティブラーニング・探究 高校教育にもたらしたもの

ファシリテーター

福岡県立城南高等学校

校長 和田 美千代

熊本県立熊本北高等学校

溝上 広樹

―溝上

今から振り返りをちょっとやってみたいと思います。皆さん、和田さんの話をいろいろな思いで聴かれたと思います。皆さんの想いをまとめてください。それぞれで、A4 の紙に短く書いてください、悪い例はこちらです。なぜなら思いはほとぼしっていますが細かすぎます。15 分間とりますので、まず個人でまとめて、その後は休憩を挟んで皆さんで見えるようにします。

―和田

では、私は 10 分時間をいただきます。その時間で動画をもう一度見ていただきます。先ほど話を聴いていただきましたので、もう一回見ていただくと「ああ、そうだったのか」となると思います。すみません、動画を流していただだけませんか。

―和田

ありがとうございました。この動画をつくったのはもう 16 年前です。九州大学の「21 世紀プログラム」の 1 期生の丸尾君が発表会のために手伝いにきてくれて、私がイメージを伝えたら、彼はそういうのが得意な生徒でした。ただ、当時は動画という観念が無かったので、特殊なソフトを使っていて、そのソフト上でしか動かなかったんです。それを城南高校の情報科の先生に「これをもう一回見たいんだ」と言ったら、Windows で動くようにしてくれました。そんな経緯がある動画でした。

先程から皆さんのようすを見ていたら、とても熱心で、皆さんそのものがアクティブラーナーだと思い、大変嬉しく思っていました。

では、3 枚紹介します。

①「学校を創る。そのためにまずは、自分がアクションを起こして、まずは学年団になる。その学年団をアクティブラーナーズにする」

まずは自分の所属する学年団をアクティブラーナーズにする、ということから始まるんじゃないかと思います。

②「探究を楽しむ」

探究を、総学をどうするか、ということでもこの学校も頭が痛い。そして「何をすればいいのか」、いろいろな思っいらっしやると思うけれど、まあ、「総学」と言う名前はついているけれど、「自分たちがやりたいことをやる時間」と考えたら、面白いんじゃないかな。

例えば、誰も学年の先生がやりたがらない。そしたら「私がやります。その代わり、私が好き

なようにやらせてください」、そのくらいの気持ちで創られる先生自身の気持ちが、探究を楽しめばいいんじゃないかなと思います。そして必ずいろいろとくさす人はいます。絶対いるんです。

だから私は 10 人の担任がいたら、そのうちの 3 人が突っ走っていて、真ん中の 4 人は巻き込まれていて、最後の 3 人はなかなか動かん、というものと思います。でも生徒が先を走る 3 人を支持したら、後ろの 3 人も「生徒から嫌われたらいかん」とか「生徒から遅れたらいかん」って、生徒に支持されたら、ラストの 3 人もついて行かざるを得ないかな、と思います。そういう意味では、最初の 3 人が突っ走ることが大事だと思います。

③「先生の熱意が 1 番。教育改革はトップダウンではなく、若手の先生が先導していくことになる」

この「若手の先生」って何歳までを言うんでしょう（笑）。さっき私は 30 代の先生が学年をどんどん仕切ってやっていると話しましたが、皆さんは何十代ですか？ 年齢は物理的なものももちろんありますが、例えば私は正確には 59 歳ですが、気持ちは 30 代です（笑）。まだまだ私も創るぞと思いながらやっています。だから、「30 代」とか「若手」というのは気持ちのことじゃないかな、熱意のことじゃないかな、って思います。だから、物理的な 30 代におまかせして自分は手を引いているというのではなく、自分も気持ちは 30 代です。

学校組織の中で考えると、30 代の先生方って、自分たちで学校を創ろうと思っていても、やはり自信はないんだと思います。そんなだから、40 代の先生から「それでいけ」って言われたら、「お、これでいいんだ」と思えてまた調子にのって走れる。40 代、50 代の役割ってそれなんじゃないかな。そして 50 代の先生方は、若手がそうやって創ったものを今度は学校全体に広げるとい、世代的役割があるのではないかと思います。

ではラスト 3 分になりました。実は第 2 部の最後のスライドをわざと残しておりました。これです、「人生の一回性」。ちなみにこのフォントは教科書体です。

（スライド 15）

人生の一回性

この歳になって思うのは、これまでの話のように若手の先生方がかんばって学校を創っているようすを見て思うのは、「私もやりたいな」と思って、私もアイデアを出したい。でも、さっき言ったように、アイデアはやはり若い先生の方が時代的に正しい。そう考えると、私は実際に総学の担当者として毎年毎年働いていましたが、でももう二度とやれないんです。そして、私は退職します。だから改めて思うのは、「人生は 1 回きりなんだな」ということです。総学の担当を何年間も、何回もやっていましたが、自分の自己実現を生徒相手に最前線でできるという時間は私にはもうありません。そういうことを考えると、今の 20 代、30 代、40 代、50 代、それぞれまだ

時間を持っていらっしゃる皆さん方が大変うらやましいです。

そして毎年毎年、同じようなことをやっているように見えて、実は「それは1回しかできないんですよ」。と今は思います。人生って1回しかないんです。だからこそ、自分の30代を精一杯に生きる。40代を精一杯に生きる。50代を精一杯に生きる。

それから、目の前の生徒という時間って、やはりこの1回しかないんです。そうすると、私たちはその1回しかない時間を生きているんですね。それを考えると、皆さんそれぞれに自分の1回しかない時間を完全燃焼させていただきたいなと思います。以上で私の話を終わります、どうもありがとうございました。

コーディネーター

前 岡山県立林野高等学校 校長

三浦 隆志 先生

探究考察ワークショップ②

「習得・活用・探究を意識した『問い』のあり方を考える」

での各チームからの振り返りをご紹介します

※探究考察ワークショップ①は本書には収録されていません。
次ページにご案内している会員制動画配信システムにてご確認ください。

探究考察ワークショップ②「習得・活用・探究を意識した『問い』のあり方を考える」では1グループ4名のチームとなり、シンキングツール KWL 表を使用しロイロノートにて振り返りを行いました。

KWL 表とは、知っていること (What I Know)、知りたいこと (What I Want to Know)、学んだこと (What I Learned) をそれぞれまとめ、今後の見通しを立てるために使用されるツールです。今回は知っていることが本フォーラムにて学んだことを通してどう変わったのかを可視化し、共有することを目的に振り返りを行い、そこから問いづくりを体験するために、グループにて探究課題を設定してもらいました。

◇シンキングツール KWL 表の使い方

K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
知っていること・知識	知っていることに対し、より詳しく知りたいこと	講演・ワークショップを通じて学んだこと
上記の内容を踏まえて、探究課題を設定する		

次ページよりグループでの振り返りを紹介します。

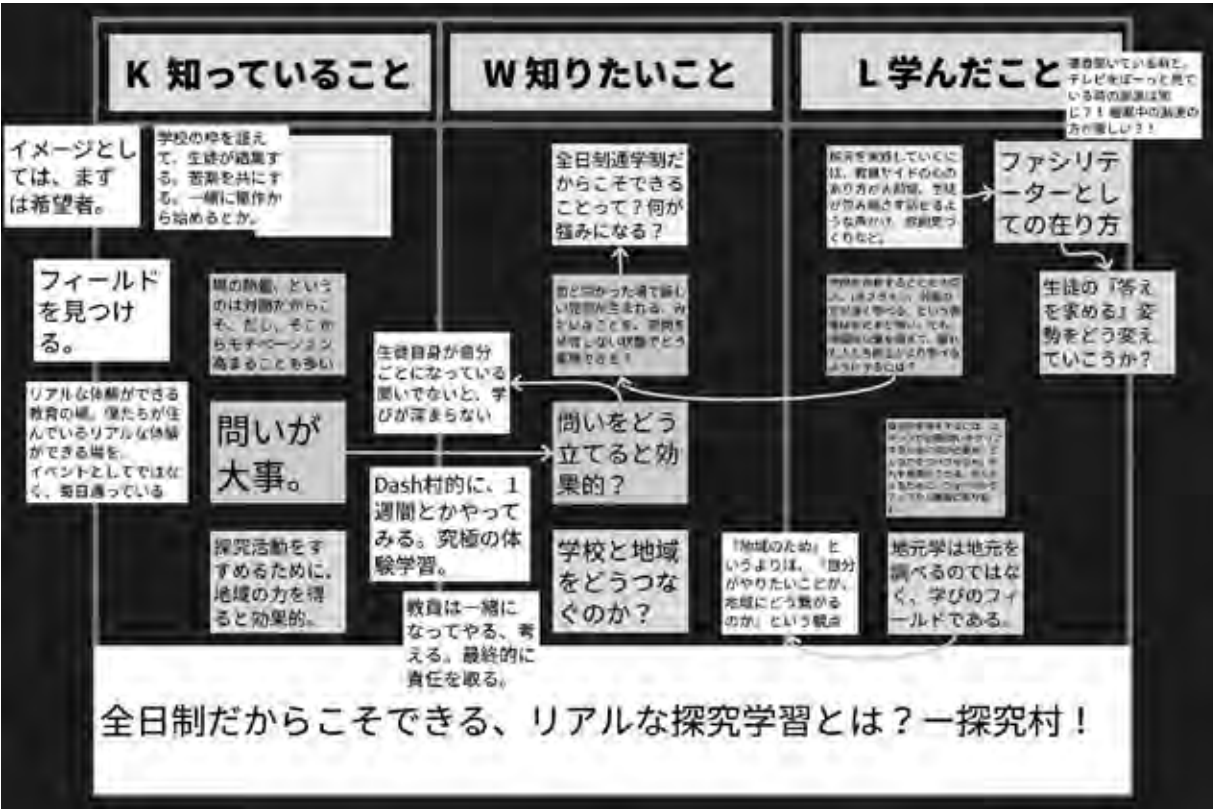
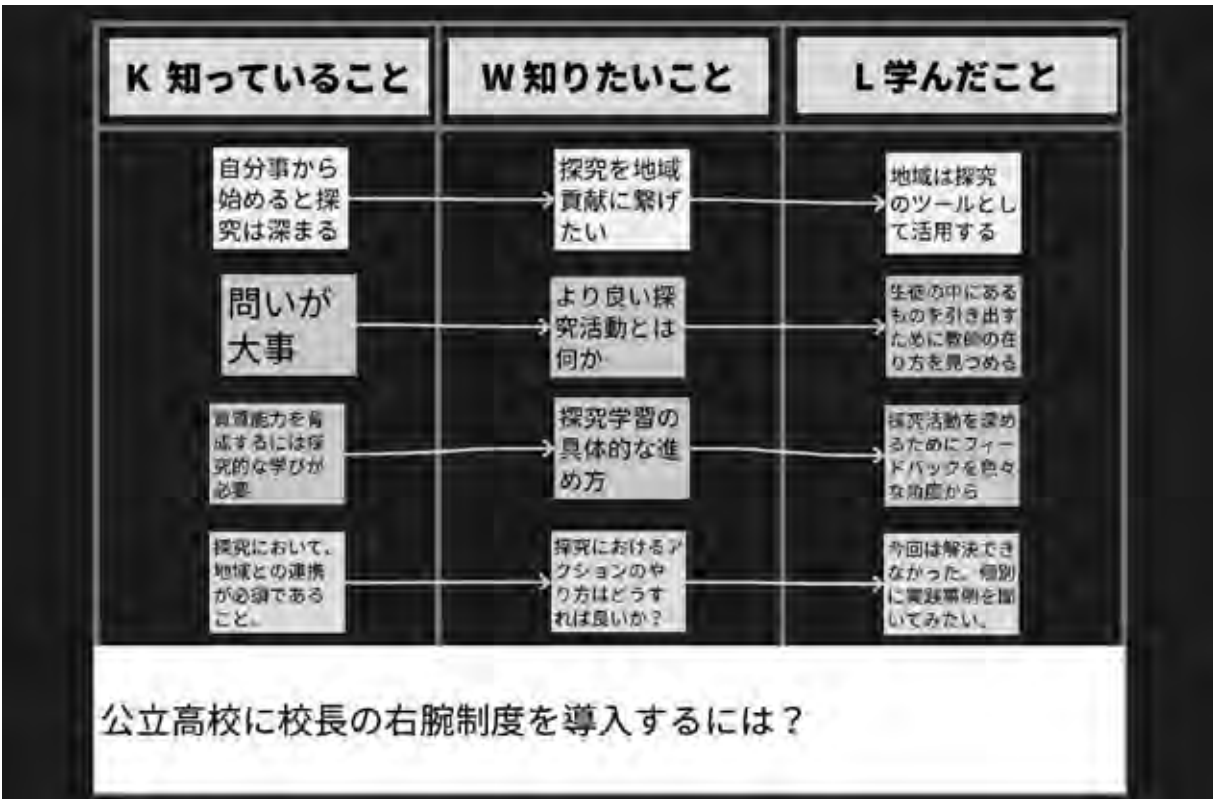
◆探究考察ワークショップ①の内容は本学ホームページの会員制動画配信システムにて無料で配信しております。そちらも合わせてご覧ください。

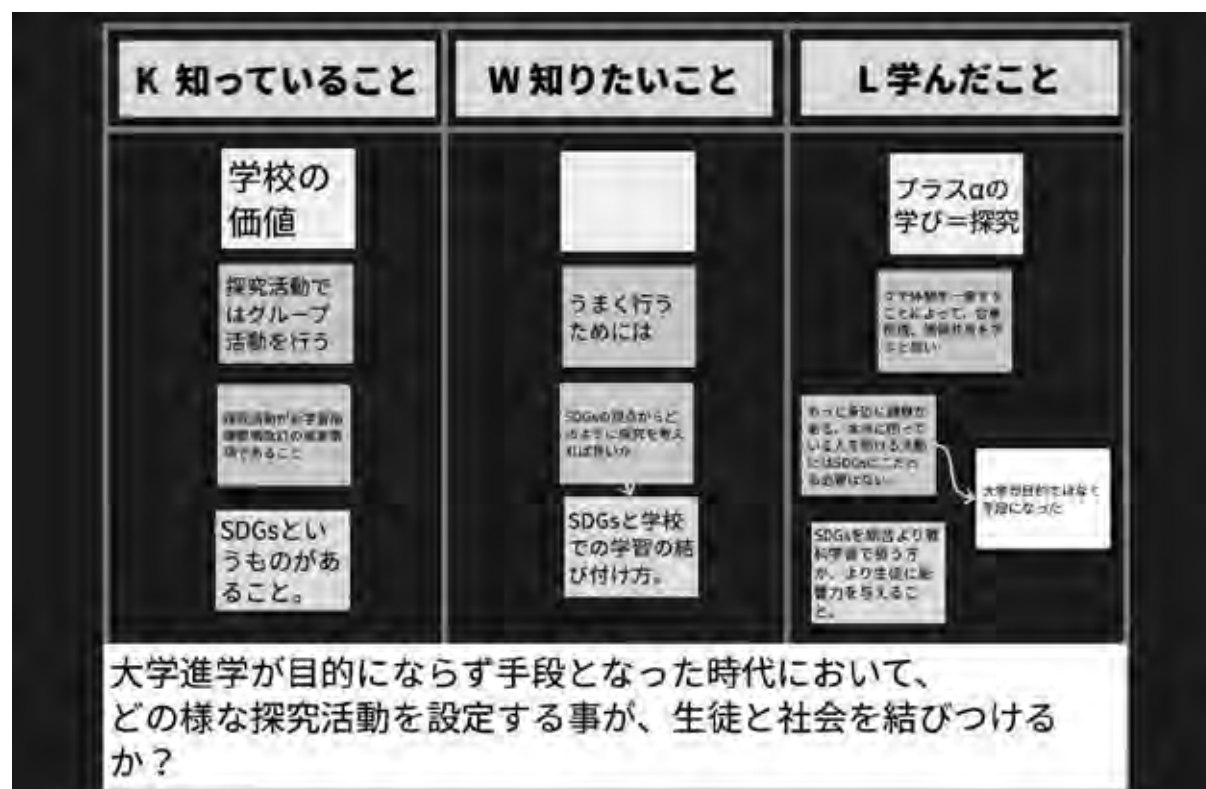
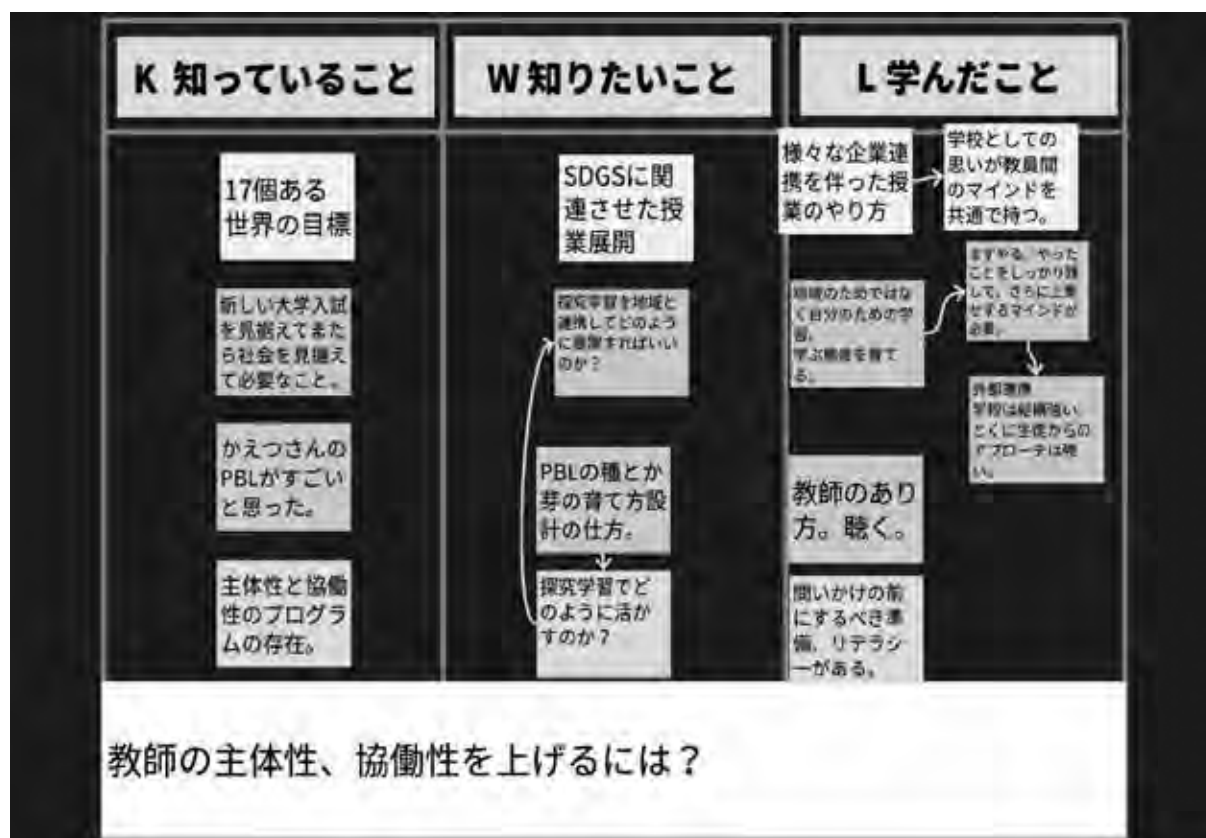
フォーラム体験授業動画配信

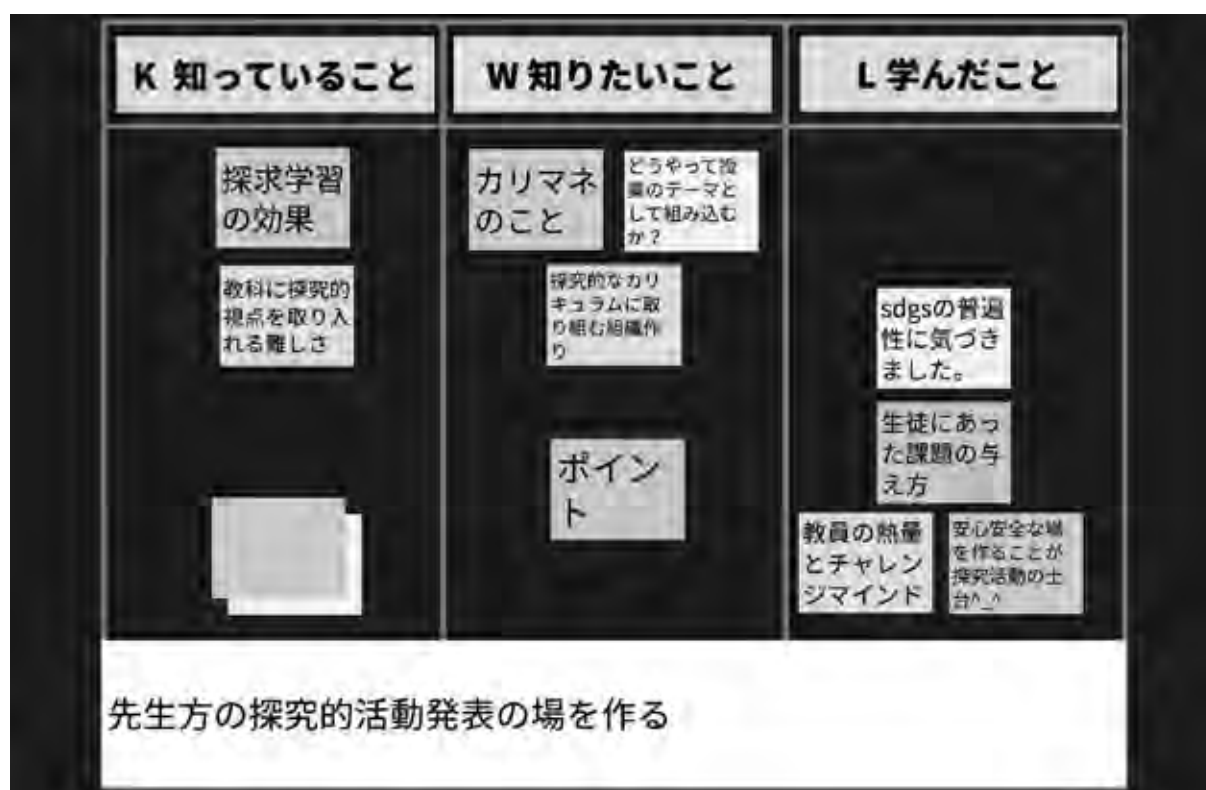
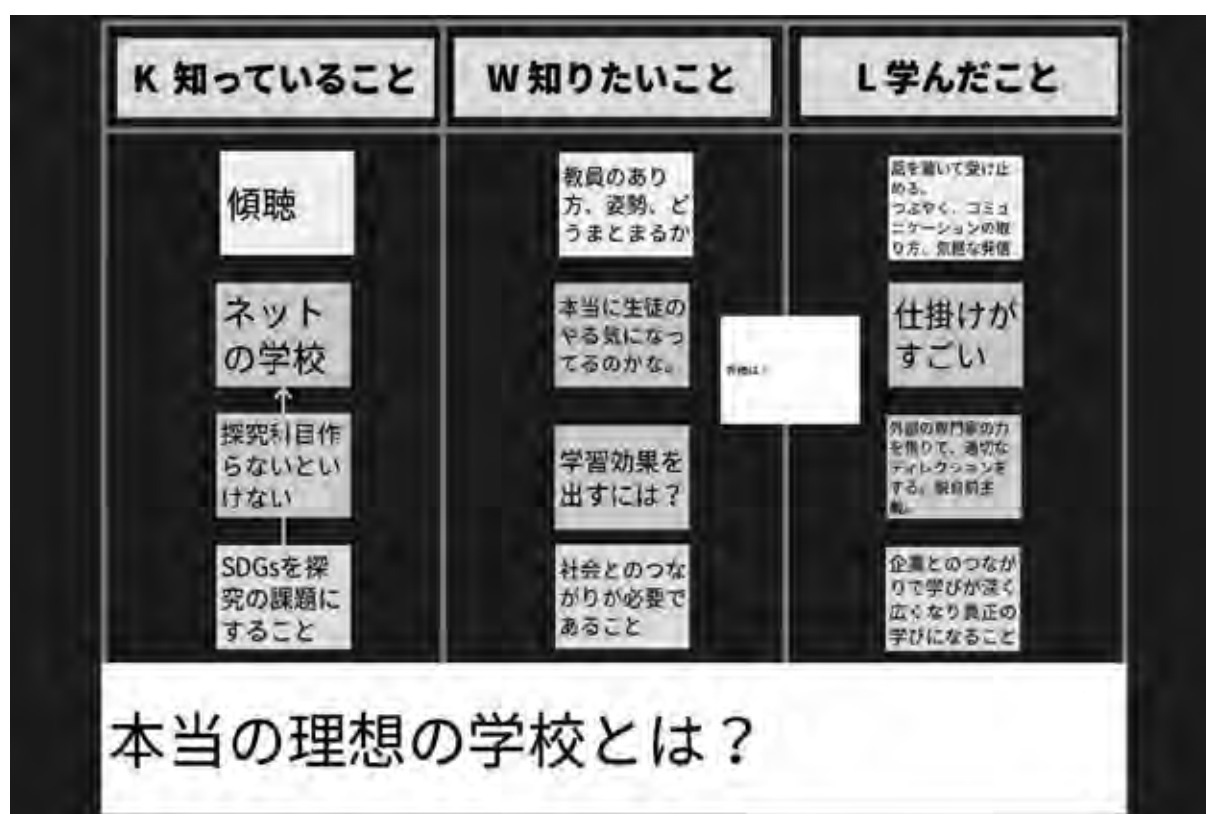
<https://www.sanno.ac.jp/teachers/almovie.html>

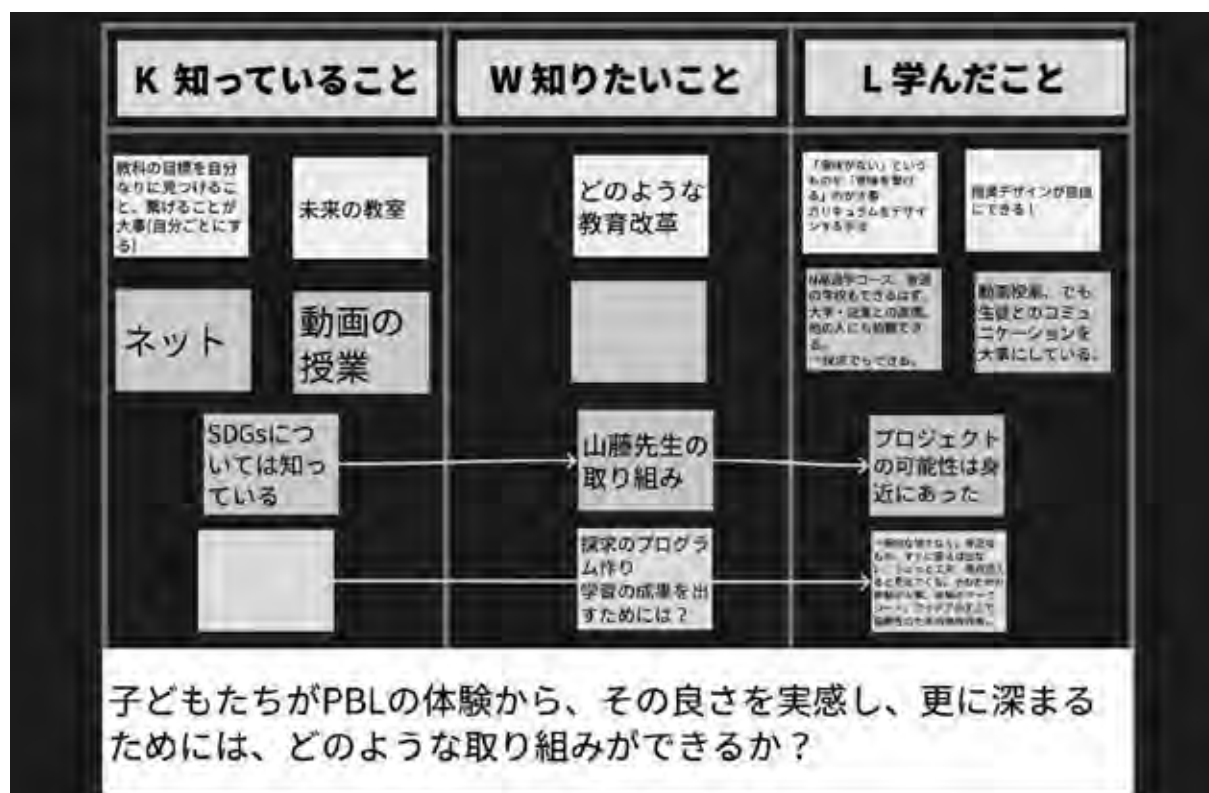
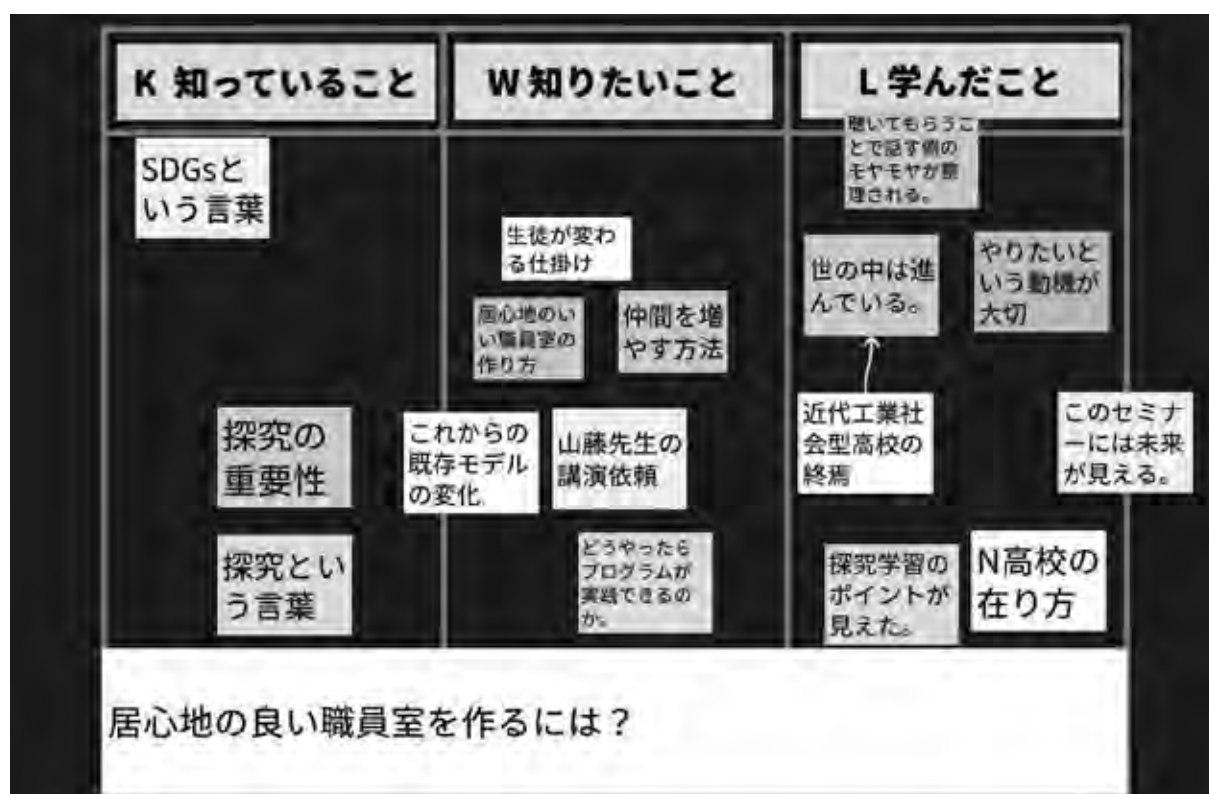
※ご利用にあたっては会員登録が必要になります。











K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
自分の自覚型が必要、異質性による違いを カリマナー、異質性やデザイン、共有 SDGsが注目されていること 探究が1年生から入った	ハーブリックの内容 共有する場(時間空間、人)をどう作るか どのように授業に取り入れるか 探究をどう進めるか	本質をよみ、異質性や異質性1日3日、異質性 バスターンションが、異質性や異質性を持つ、異質性の異質性 世界や社会とのつながり方、カリキュラムのヒント 杉田先生のプログラムをやってみる
お金をかけずに、共有の場やツールをどのように取り入れるか		

K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
K先生たちは改革に向かっているもの。苦しんでいる。 K地域連携の取組 K課題解決学習の大切さ Kkpblには二種類あるということ	Wどうしたら改革が進むか? Wすべて地域と結び付けることが必要か W探究の指導方法やテーマの決め方 Wkpblの授業をどのようにデザインするか	L教師同士の本書の話し合いが探究の土台にもなり、改革も進む。 L生徒が学びたいテーマで追求する Lsdgsと紐付けて考えていくと、アイデアが広がるということ Lsdgsと関連させて授業を設定すること。最上位課題を追求することが大切
近隣のお年寄り対象のカフェを地元企業とコラボして、校内に開設するにはどうしたらよいか?		

K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
教育活動を可視化すること 探究の概念 受身的な生徒が多い 社会(外部)との連携	可視化の具体的な例 ファシリテーターとしての教師の変身 実際の連携のあり方 講師科などの役割	画一的ではなく、客観的な視点で生徒をみる必要性を学んだ。 生徒の話を傾聴する大切さを学んだ。 生徒の中に答えがある中で、それに対して月曜まで継続の大切さを学んだ。 社会との連携がいかに大切か学んだ。

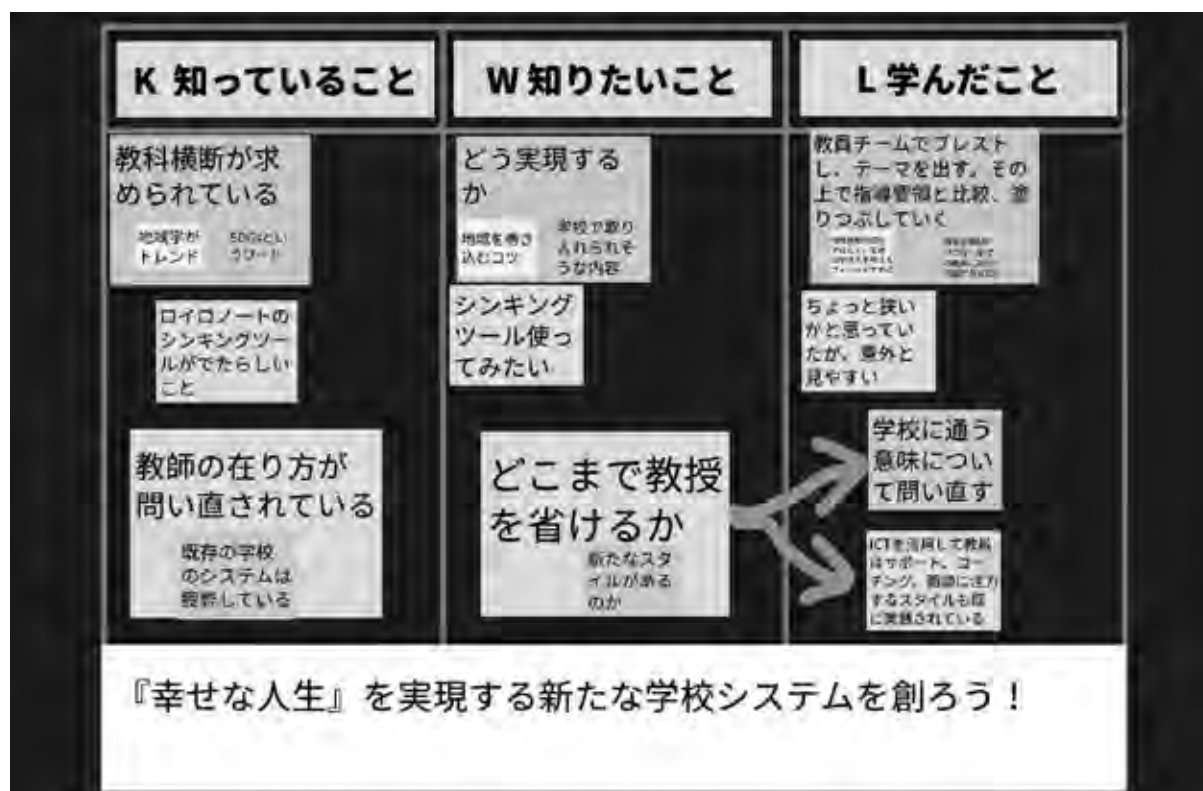
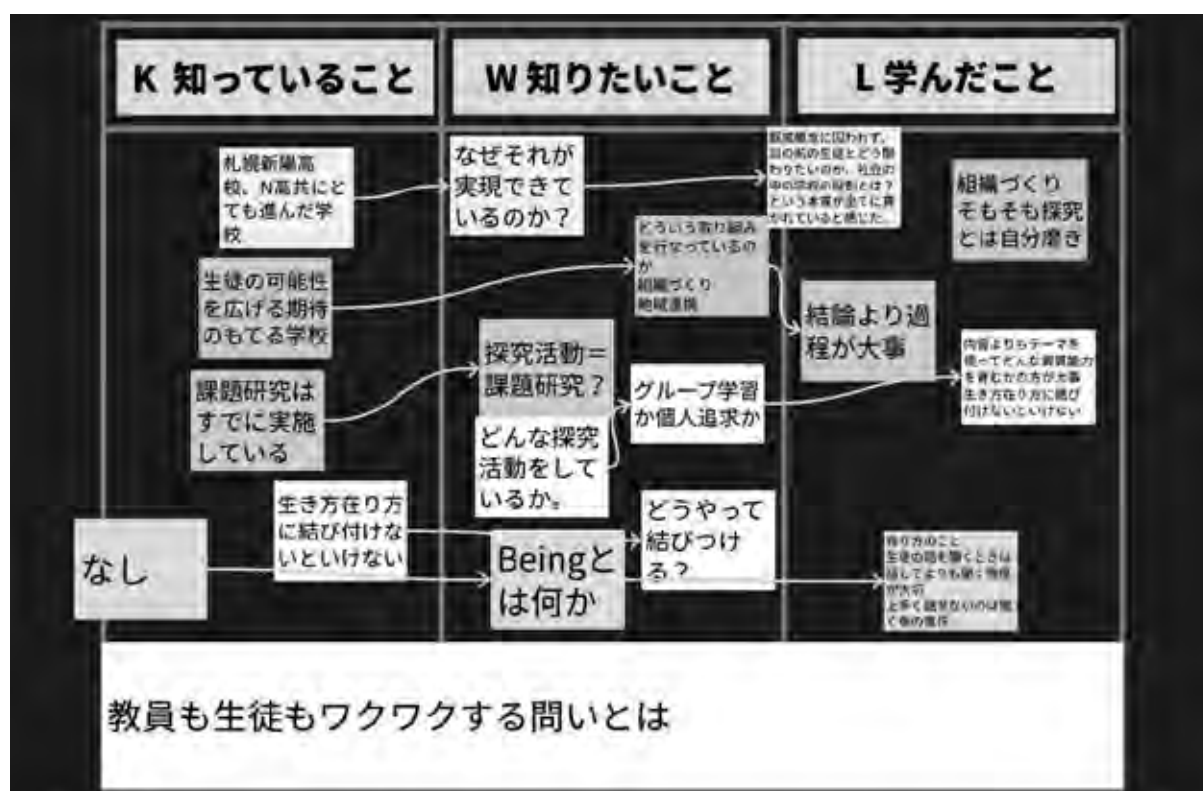
学校のトイレを変えようプロジェクト

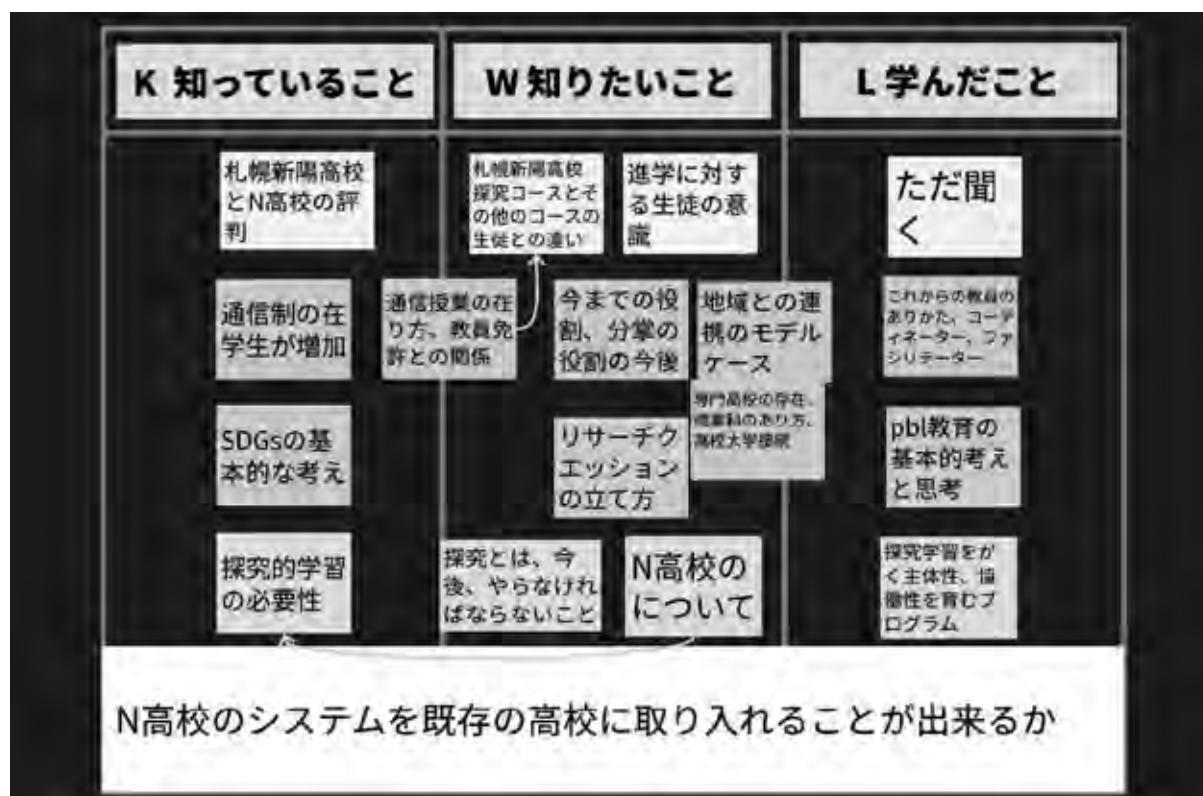
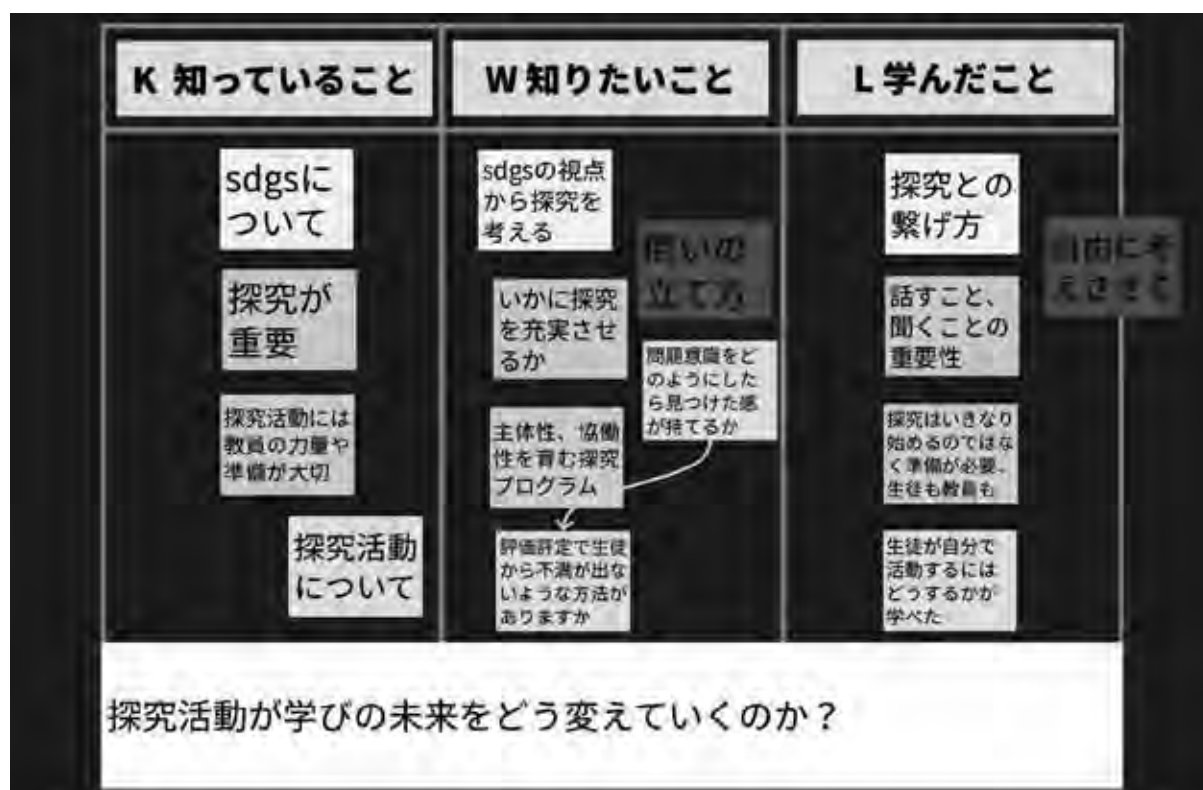
K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
人は成果物や結果を求める 組織を変えるためには、自分一人の力では足りないチームが必要 自己開示の必要性 →安心安全の場づくりが必要	教師beingとは 教師のマインドセットをどう変えるか 協力者の探し方は？ 共通の目標に合意をどの様に得たか どのように安心安全の場を作るのか 例えばシャッフルクラスをして、まずザラウンドルール作り 探究と自己肯定の接続	終わりが無い中で、当事者のモチベーションをどのように維持できるか？ 探究は結果が出なくても良い 探究に終わりが無い 教員がワクワクするには？ 身近なテーマにワクワクするには？ →好きなこと、得意なことを書き出す→それを使って隣の人を幸せに 自己肯定感の低さはなぜ？
		自分のあり方がしっかりしていなければならない。 →ブレない軸を持つ 形にこだわらない →グループワークだからといってアクティブラーニングではない。 自分ごと化も ステップバイステップで →身近なテーマから

♪ 生徒、教員が余白をどうすれば楽しめるか？ ♪

K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
数学で探究学習 探究活動は社会貢献につながる 探究は生徒主体。教員はファシリテーター アクティブラーニングという言葉	探究活動の在り方 課題研究テーマの設定について カリキュラムマネジメント	ルーブリック評価を授業しながら構築する。 生活課題でもいいことがわかった 子どもは自ら学ぶ力を持っている 机上の探究ではなく、地域のフィールドに出て行く
当事者意識のある「問いの作り方」は？		

K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
SDGsということを最近よく聞く 教員の役割は、指導だけでなく、多様になる。 主体性や協働性を育むことが大切だということ 探究活動を行う際の題材	どうやって授業の中で取り組んだらいいのか？ 生徒に助言すると、自主性が減る。 どうしたらそれらを育めるのか。 どのように運用し教員間の温度差をなくすか	身近な小さなことから考えて良い 教員は、コーディネーターやファシリテーターになっていく。 自分ごとにする問いから始めると良い。 聴くことの大切さ
どうすれば、教員みんなが楽しんで生徒と一緒に探究に取り組めるか？		





K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
N高校の存在 地域で探究している学校がある SDGs コーチングやメタ認知 主体性や、協働性という概念。探究学習。	どんな生徒？ どのように取り組んでいるか どう探究に組み込む？ being? 主体性や協働性を育む探究活動の方法	N高校の実体(生徒が活動的) 自分の学びたいことを考えた上で、地域とつなげる 周りを使おう 実践してるつもりが多い 授業に対して、答えを出して終わるというのとは違う学び方で、問題を解決して、答えを出すまでやり出し、いくつもの答えを出して解決する。
どうやったらN高校生がうちの学校に転校したいと思うか		

K 知っていること	W 知りたいこと	L 学んだこと
転退学時の需要の高さ 知識という要素について 対話時の心構え 主体性が求められているということ 教員の介入について	多様な生徒それぞれに合わせたケアの仕方 レベルの違いとこころでのSDGsについて 実際にどのように関係が構築していくか 問いの設定 生徒の活動が手探しの時に待つだけで良いのか	一人一人に合わせたカリキュラムや時間割が組んであること 小さなことからよい 話が通ずる、話題から逸れたときの対応法 多人数での活動が前提だといいこと。 残ることが多い
N高校は全日制でできるのか！！！！		

